
ある晴れた日に

paiちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある晴れた日に

【Zコード】

Z8986V

【作者名】

p.a.iちゃん

【あらすじ】

少年がある日目覚めると、ベッドの上だった。性別までも変える改造手術を施され何時の間にか異世界に。なにやら理由があるみたいですが、冒険をするなかで少しづつ明らかになるはずです。

初めての作品なのでミス等ありましたら大目に見てくださいね。

・・・知らない天井だ！

気がついて目を開ければ一面の白い空間。なんか、やわらかいベッドに寝ているみたいだし。ひょっとして、もしかしてたら俺って死んじゃったのかも・・・。イヤイヤちょっと待て、こういう時はまず落ち着いてなぜこうなったのかを思い出すのがセオリーって誰かが言つてたような気がする。

たしか、何時も通りに、山に芝刈りに行つたはず。毎年冬には木小屋いっぱいの柴を集めて1年間の五右衛門風呂の炊き付けにするのが叔父の家に世話になっている俺の仕事だ。両親が早く他界した俺を引き取つた叔父との暮らしが、まあ良く言えばエコロジー、早く言えば山村の田舎暮らし、高校生になつても部活動なんてのは縁が無く、田んぼと畠の世話に明け暮れている。おかげで格闘技でもやつてるのって感じの体形が維持できている。

柴を刈つて梯子に3段重ねて・・・山を降りたはずだが・・・あれ！家まで辿り着いてないぞ！

とりえず、起きてみようとしたが体が動かん。上を向いたままの状態でからうじて目が動くだけだ。いや、耳も聞こえるか。さつきから何やらガシャガシャとなにかを運ぶ音が近づいてくるのがわかる。

バタン！という音がするとガチャンとワゴンがベッドの脇に止まつたみたいだ。

「気がついたのね。待つて、今改造したげるから。」

女の子の声がした。いや、ちょっと待て！そんなことより改造だと！

人権無視！人でなし！って感じの目線を送るが、まったく無視！されている。

ウイ・・・ンつてドリル？の音が聞ける。もう、ダメかも？

・

・

「フーッ！ つと女の子が手のひらで額の汗を拭く。

隣で成り行きを見ていた甲冑姿の男が器用にヘルメットの後ろに大きな汗をかく。

「良いんですか？ 体の改造はともかくDNAまでいじっては後々問題になるような気がしますが？」

「良いの、良いの。 DNAって言つてもこの体は窒素生命体じゃないから関係ないし。」

男のフェイスカバーがガタンと落ちる。

「一体、どんな改造をしたのですか？」

「私たちと同じ、意識領域を核にした金属生命体！」

そう言つと、少女はテキパキと大工道具を片付け始めた。
それでは、このスプラッタ状態での改造手術は何だつたんだろうと首を傾げる。

「ヒューン！ ヒューン！

良く寝たつて感じだ。変な夢を見てたみたいだが、とりあえず起きて・・・なんだコリヤ！！

無いところが・・・有る！ 有るところが・・・無い！ ついでに意識も無いいいーー。

「いやつ氣絶しましたよ。」

次元の狭間に捕らえられていた少年を見つけたのは姫であった。

姫は異世界の戦士だとはしゃいでおつたが、持ち物は棒の先で直角に曲がった刃物と腰につけた頑丈そうな短刀？ であった。戦士としてはそこそこの筋肉であったが、どのような武器でどのよつに戦うかは姫の緊急手術のあとじっくりと話を聞くつもりであったが、いささか精神修行がなつておらなかつたようと思つ。

「ちょっといじりすぎたかも？ でも、目的遂行に何の問題も無いわ。私の核を・・・切片だけど、これに入れといたから。」

グタつとした少年?の体にいそいそと着替えを施し、最初に持っていた武器改造版を持たせると、小さなバックを腰のベルトに取り付けました。

「待ってください。」

あわてて男が小さな懐中電灯みたいなものをバックに入れます。

「あの武器では・・・せめてこれぐらいは、持たせます。」

少女が頷きます。

「まだ、気絶してるみたいだけど・・・こんなもんでしょう。では、がんばって！」

少年?の寝ているベッドのしたに大きな穴が広がると、ベッドが穴に吸い込まれました。

少女が指を弾くと、壁の一部が透明になります。一人が窓を覗くと、緑の惑星に少年を乗せたベッドが流星のように光ながら吸い込まれていきます。

「災厄に対する、今までの間接対応策ではなく、直接的なアプローチ！・・・はたして・・・」

「たまには違った方法でね。それに切片持たせたからいろいろと助言できるし、なにやつてるか良くわかるし・・・」

いつまでも、いつまでも一人は流星の後を見つめていた。

「うへへん……」
「」

見上げれば底抜けに青い空。なんか長い夢を見ていたような気がするけど……。草むらに寝込むようではまだまだ修行が足りないのかな?つて独り言を言いながら立ち上りました。

え?つて感じです。左手に小さな森。正面と右側は草原がどこまでも広がっており。後ろには大きな岩山がそびえたっています。

「ここは、どこだ?」

「やつと気がついた!」

女の子の声です。キヨロキヨロ見渡しますがそれらしい姿はありません。

「どこを見るの?ここよ、ここ。」

声と同時に左の薬指に鈍い痛みが走りました。何時の間にか指に銀色の指輪があります。気のせいか淡く光っているみたいです。

「そう!それが私。正確には私の核を切片とした量子電腦を装飾品にしたものよ。」

先ほどの夢がよみがえります。……たしか、改造とか?

「そして、あなたは私の作品!改造人間なのだ!!」

思わず両手で体をペタペタさわりながら確かめます。……おんなだ!…がくっと膝を着きました。

「なにをがっかりしてるの?あなたの理想の体にしたんでしょう?」

理想??俺つて……俺つて……自己嫌悪です。お父さん、お母さん先立つ不幸をお許し……つてとつぐに両親死んでんじやん。

「今度はパニクつてるし……あなたの中の理想の子のイメージを形にしたのに。」

ちょっと待て!理想とな?……といつとは、クラスメートのあの子をモデルにしてると?

「それに、今あなたには性別は関係ないわ。金属生命体。流体金属が核を基に形状を固定してるから、動力もメビウス型重力場工ジン原子炉3基分の出力で放射能も出ないわ。」

「え！でも、性別は・・・この際置いといて、体は変わりないと思つけど・・・」

「それは、擬態よ。表面形状はあなたの原型を基にモデリングした筋肉組織にあわせて変化するけど、筋肉は無いのよ。体を作つている液体金属がその場その時に応じて変化するだけよ。」

「こまつた。こんな体では、どうしようも無いのか。途方にくれていふと更なる神託が加わります。」

「あなたは、次元の狭間に漂流してたの。次元の狭間自体は、古い銀河大戦の異物つてとこかな。地雷みたいにあつちこつち仕掛けたみたいだけど未だ機能してるのが偶にあるのよね。あなたの世界でも神隠しつて言葉が多分それだとと思うけど。あなたは凍結した状態で見つかっただけど、私たちの文明でも死者を蘇らせるることは出来ないの。でも、あなたの意識、思念体というべきものは取り出すことが出来たわ。それを予備の核に取り込んで、生きている金属とうべき液体金属で体を再生したの。あなたの世界でのサイボーグに近い存在になつたと思ひなさい。」

「どうやら、人助けをされたのかな？とりあえず生きてるし？われ思つ。ゆえに我ありつて言葉もあるし・・・

「ところで、何でこんなところに？」

「そうそう！目的よね。・・・これは、あなたには関係ないけど・

・・私達の昔の罪滅ぼしかな。今まで間接的に世界に干渉してたんだけど、今回はあなたがいるから直接に！つてね。・・・手伝つてくれるかな？」

「いいとも！つてなに言わせるんだよ。しかし、どんな形にせよ助けてくれたみたいだし・・・手伝つよ！」

どうすればいいのかと言つ質問に指輪はこの世界で生きていけば、必ず判るというだけで黙つてしましました。

生きていくと言われてもどうすれば・・・とりあえず持ち物検査をして見ます。

体：女の子の体です。クラスメートのあの子の姿ですが、良くわかりません。

服装：Gパン、Gシャツ、薄手のハイネック、足はスニーカーですね。下着は恐ろしくて確認できません。

持ち物：腰のベルトに鉈がケースに入っています。後ろのポーチには、小さな水筒、見覚えの無い懐中電灯、タバコにマッチが入つてました。それと、傍らには愛用の鎌？ちょっと肉厚で柄が木製から樹脂性に変わっています。

これで、どうしようと思わず考えこんでしまいます。

鳥の鳴く声で我に返りました。何時の間にか座り込んで考えてみたいのです。

とりあえず人里に行こうと思い、それらしきものを探します。

右側方面にはどこまでも続く大平原です。

後ろは山でしたから、なにかあるとすれば森を抜けた先と思い歩き出しました。性別の変化からか重心位置が変わったからなのか最初はちょっとふらつきましたけど、数分もしたら大分なれました。どうやら足が長くなっていたみたいです。ちょっと嬉しくなりました。

だんだんと足取りは軽くなります。森に入ると、木立や木に絡まる薦が邪魔になりますが、何時もやってきたことですから問題はありません。何時しか森の奥深く入っていきました。
さりに歩くと、道らしきものを見つけました。

お約束ですよね

森の中で道を見つけた場合の重要な選択！それは、左に行くべきか、それとも右に進路を取るべきか？

誰でも迷いますね。こういう場合の解決策は一つしかありません。少女は少し考え込むと、持っていた鎌を道の真ん中に立てました。鎌は微妙に揺れると右側に倒れました。

「うん！神様の思し召しだ。右に行こう」歩き始めたその時に！
「きゃ————！」

誰かの悲鳴です。思わず聞こえた方向を指先で確認すると走り出します。幸いにも道の左側だつたことから木立に邪魔をされません。どんどんと駆けていきます。

「ここちこないで————！」

涙目に訴える先には、グルル」と唸りながら少女を取り囮む野犬？の群れがありました。じりじりと少女は後ずさりますが、やがて立ち木に後退を阻まれてしましました。野犬？達は取り囮んだ輪を少しづつ小さくしていきます。

もはや、これまで。でも1体だけでも倒したら後で何が起こったか村の人気が判るはず。と覚悟を決めました。少女は杖を縦に持つと野犬に向かつて叫びます。

「火炎弾！も一つ、火炎弾！」

杖の上にはめ込まれた小さな宝石から小さな火の玉が野犬に向かつて飛び出します。

ギャン！と火の玉を受けた野犬が叫ぶとその体は炎に包まれました。さらにもう1体同じように炎と化します。

しかし、怯むことなく野犬は少女に近づきます。そして、ついに一匹がガルルと唸りながら少女に飛び掛りました。思わず少女は目を瞑ります。

ドゴー！「ギャンッ！！」

鈍い音と、野犬の叫びが聞こえました。

恐る恐る少女が目を開けると、見慣れない服装の少女が左手の武器を野犬にバシ！っと叩きつけています。手に持つ武器は・・・どこか見覚えがあると思つてみて見ると鎌です。それで、どうやつたら野犬を倒せるのかと不思議な面持ちで不思議な少女を見ていると・・・終わったようです。野犬の群れは半数近く倒されたことで、自分たちよりも相手が強いことを知つたように少女達の囮みを解くと森の奥に消えました。

「もう、心配ないよ！」

笑顔で少女に挨拶します。内心では、笑顔が肝心！スマイルスマイルつて繰り返してますけど・・・

「ありがとうございます。私は、この先の村に住むサンディと言います。失礼ですが・・・どちらをまでしょつか？」

助けてくれた少女の服装は見たこともありません。良く見ると、少女の容姿も少し違つて見えます。黒い瞳は初めて目にします。村人でもなく、旅人としても変わっています。

「良く判らないんだ・・・気がついたらここに居たし・・・」

助けたのに何か謝つてるみたいだと思いながら、鎌を調べています。丈夫な鎌です。前より肉厚で、柄は長くなりましたが持ち重りはしません。

「あのー・・・お名前は？」

「うん・・・ああそうだね。美浜龍維、名前がリューイね。」

「苗字をお持ちでしたか。貴族の方とは思いませんでした。」

「貴族ではないよ。俺の住んでたところは誰でも苗字は持つてるもの。」

「では、遠くからの旅人さんですね。とりあえず、日も暮れますから私の村に来てください。」

「うーん。とは言うものの、どうしたものか？第一、無一文だ！」

迷っているとサンディは、大丈夫ですよ。私んちで歓迎しますか

らど、騒動で投げ出した籠を手に持つとリューイのてをガシ一とつかんで歩き出しました。

しばらく歩いていくと森が途切れます。ほーつーとリューイは感嘆します。そこには段々畑が広がっており、ちょっとと前までのリューイの故郷に良く似た風景でしたから。

段々畑を下つていくと村が見えてきました。村は丸太の柵で囲まれており、柵の前には空堀が掘られています。少し回り込むように歩くと門が見えてきました。

「とまれ！」

門番の制止の声です。槍を構えています。

「おじさん！なんでとめるのかな？」

「サンディイはいいが、後ろの見かけんやつは何者だ？」

サンディイは、野犬から助けてくれた旅人だと説明しました。

「・・・それは、済まんかった。森の野犬には近頃みんな迷惑してた。わしからも礼を言つ。」

どうぞ通つてくれとのことで門をぐぐり村に入ると、サンディイはくるりと振るかえりリューイに微笑みました。

「よひこや、ナナイ村へ！」

サンティアライム

サンディの声に奥からお帰りなさい！の声がします。誰かいるみたいですね。

低い2段の階段を踏んで中に入ると、10畳ほどのリビング兼食堂があります。右手には台所があるようで、軽快なりズムで何かを刻んでいる音がします。左手には、2つのドアがありますけど、寝室のようですね。小さいながらも住みやすそうですね。

「ここに座つててね。と言われた席に座ると、椅子の脇に鎌を立て掛けました。刃物をそのままにしておくと危ないですから、腰のポーチにあつた布?でしっかりと包んでいます。

サンディが向い側に座ったの期に、質問タイムが始まります。

「は、ざるで、今は二つだ？」

၃၅။ ရုပ်ပိုင်

即答です。

「今度は「**ハ**」ちからね。あなたはどうから来てどこへ行くの?」

・・・両方とも判らない。気が付いたときには、草原で・・

その後、森に入り・・・君を見つけた。

に禎丈そ^うだが

「ああ・・・あれね。戦争つて訳じやないけど・・・盗賊や魔物に備えるためよ。盗賊はめったに来ないけど、畠の取り入れが終わるころに來ることがあるわ。魔物は、あなたも見たでしょ。あんなのよ。いろんな種類がいるけど、ここには大きな魔物は来ないわ。で

「この村に銃はないのか?」

サンディは首を傾げています。？つて感じです。

「火薬・・・薬剤を調合して粉末にし、鉄の筒に入れて、その後、金属製の小さな玉を入れる。敵に筒先を向けたら火薬に火を付けると、勢い良く玉が飛び出るんだ。結構な殺傷力があるんだけど。」

「聞いたこと無いわね。飛ばすんだつたら魔法で十分でしょ。」

サンディには興味ないみたいですね。

「そうだ！魔法だ。ここはみんな魔法が使えるの？」

「出来る人と出来ない人がいるわ。それに、魔法には攻撃型と治療型があるの。両方出来る人は・・・そうね。王国内に10人はいないわ。」

「・・・おれにもできるかな？」

「あなたギルドカード持つてる？」

「いや？・・・何のカード？」

ひょっとして、怪しいカードかも知れません。作つたら最後、とことん支払いが続くカードがあることを学校で聞いたことがあります。

「冒険者の資格？って感じかな。身分証明書みたいなものだけだ。

」

「ないよ。」

ひょっとしてと、腰のポーチを探しましたがカードはありません。そんな会話を続けていると、あれ！やつぱりお密さんだあ。と台所から声が届きました。

小さな金髪の巻き毛の女の子が、上半身だけ壁から出してこちらを覗きこんでいます。

「いらっしゃー行儀悪いでしょ！ちゃんと」と挨拶しながら「...」

トコトコと女の子がテーブルにやってきました。

「こんにちは。ライムです。よろしくね、お姉ちゃん！」

え・ええーーーー突然、サンディが大声を上げて立ち上がりました。ライムとリューイを交互に見てます。最後に、ライムをジッと見据えました。どうやらライムに説明を求めているようですね。

「だつて、ほら！」

ライムはリューアイの一点を指差します。その指先は・・・そう！ズバリ胸です。自己主張気味なサンディと違い、控えめではありますぐ、確かに男の子の胸ではありません。

「言葉はヤツクルみたいだけど・・・お姉ちゃんより背が高いのに、小さいけど・・・お姉ちゃんだよ！」

ライムの指摘に、冷や汗がタラタラと背中に流れるリューアイでした。

ちよつとまつて、確かに性別は聞かなかつたけど・・・背は高いし・・・髪も、肩までしかないし・・・言葉使いはあれだし・・・強いし。

このまま家に泊めて、お料理作つてあげて・・・美味しいよサンディ！まあ！嬉しいわ、つて出来ないじゃない！―それから・・・そして・・・それをネタに村の教会で、つて無理じゃない！！

妹の指摘で簡単に行動計画に狂いが生じたようです。意外といい性格ですね。

「まつしょうがないか。確かにライムの言つとおりみたいね。でも、女の子なら普通こんな姿してるでしょう？」

「確かに、男物の服だけど・・・気が付かなかつたの？」

そうです。普通は気が付くはずですが、白馬の王子様効果で、てっきり男の子と思い込んでいました。

「あ～～あ。てっきり、男の子だと思つてたんだけどな～。」

なかなかあきらめきれないみたいです。黄金月ももうすぐ終わります。次に来るのは灰色の月。雪の降る銀色の月が来る前にしなければならない冬支度は、灰色の月にしなければなりません。もうすぐ町から帰る母を含めての女手3人では出来ない仕事もあるわけです。

「これでも、けつこう力はあるから・・・言つてくれればできることはさせて貰つよ。」

「それと、仕事を探す間、出来れば泊めてほしい。蓄えが全く無

いんだ。」

残念そうに腕を組んでうつむいているサンディに断ります。

「そこは、心配しないでいいわ。仕事は、明日にでもギルドに行けば何とかなると思うけど……」

そんなサンディを心配してか、背中を優しく撫でながら、ライムが、大丈夫？お姉ちゃんをしています。

「ところで、お料理出来たけど……運んでいいのかな？」

ライムが作ったみたいです。小さい子なのに関心ですね。

「いいわよ。」

手伝おうかとリュートも声を掛けましたが、大丈夫よーと軽く断られました。

運ばれてきた料理は、根菜類タツブリのスープと黒パンでした。いただいます。の挨拶で、美味しいお食事タイムです。

「たまにはお肉が欲しいね。お姉ちゃん。」

村の生活をリュートに話しながらパンを千切っていたサンディにライムが話しかけました。

「ううん、今年は不漁だつてザットさんいつてたからね……でも、獲れたとしても、家の株は少ないからあまり配当はないかもね。」

「獵と株つて関係するの？それに配当つて？」

「あ、そうね、わからないかも！」とサンディが説明します。

獵は専門の人に行つており、獵に専念するためにその家の家族を養う費用を株の形で皆で負担します。獵の獲物があった場合は、その負担金、株数に応じて獲物から得た肉が分配されます。株は1年間有効で、その応募は灰色の月の中ほどで行われます。

サンディ達のお母さんも、灰色の月初めには出稼ぎから帰ってきます。町で働いたお金の一部を使って株を購入し、不定期ながらも子供たちの料理に使用されることになるわけです。

「俺が獵をするのは出来るのか？」

「OKよ。村の連中も獵をしてるもの。でも、專業者じゃないか

ら殆ど獲れないけど・・・」

そんな話をしながらも、食事は進みます。『馳走をまの後の片付けはライムがヨイショヨイショとやつました。

「両親の部屋だけビ・・・」レジを使つてよ。』

「ああ、すまない。』

サンディの指示に従い8畳ほどの部屋に入ります。ツインベッドに上着を脱いでもぐり込みました。

ふと、疑問がわきました。もう夜だよなあ。なぜ、食堂もいこも明るいんだ!

あたりをキョロキョロ見渡すと、天井付近に石版でしおつか白く発光している物体があります。

「お姉ちゃん、寝つけた?』

ドアが少し開いてライムが顔を出します。

まだ、寝てないよ!と答えると、トピトピヒューハーイのベッドに入つてきて言いました。

「お話聞かせて・・・』

小ちな子には逆らえません。ここよと答えてリコーアイの昔話が始まります。

「むかし、むかし・・・あるといひて、お爺さんとお婆さんが住んでました。・・・』

ギルドに行け!

「……そんでもって、めでたしめでたし……」

桃太郎のお話を終えて、ライムの様子を見てみます。寝たようです。

リューイは左手を顔の前に持つてみると、薬指の指輪に小さな声で話かけます。

「おーーい！聞こえるか？」

「聞こえるよ！。それに声に出さなくともOKだよ。私は君の思考を直接読めるし、逆もね。」

（わかった。少し確認したいがいいか？）

（OK！）

（今日、野犬と戦つたが、俺の体どうなってるんだ？反射神経、スピード、力……全て前と違うぞ！）

（前にも言つたけど、あなたは通常の生命体ではないの。流体金属が核の意思を読み取つて、通常の肉体での動きをシコミレーションした結果に基づき形状を変えているの。要するに、骨も肉も血液も無いのよ。だから、擬態して人間のように振舞えるようにあなたの動力炉の出力の内、実に3割がそのために消費されてるし、核に付随した量子電腦の使用率では4割を超えてるわ。）

（……要するにスーパーになつたと思えばいいのかな。）

（生前の10倍出力で、私がリミッターをかけているわ。最大出力は……その時にまた。）

（俺の鎌、どうしたんだ。あれって、武器じゃないぞ！）

（え！あなたは異世界の戦士じやないの？戦士＝武器＝刃物。合つてると思つけど……）

（あれば……農具だあ！！！そして、俺は……農民だあ！！！）

（え！……え！……違つたの！）

（え！……え！……違つたの！）

（とりあえず野犬程度なら追い払えるけど、それ以上だと期待して貰つては困る。）

（・・・この世界だと・・・ドーラゴンいるよー!）

（近づかないようにする。）

（あとは・・・そうだ！この体で食事取つたけど大丈夫なの？）

（胃袋の代わりにディラックの海がコンパクトに、その都度作成されるから問題なし！それと、怪我した時に血が出ないと困るから、同じように見える液体を有機合成するから少しばしは食事をしてちょうだい。）

（それと、ここには魔法があるみたいなんだが、俺には使えるのか？）

（無理！でも、似たことはできるからそれで我慢してね。今、データを転送するわ。）

（・・・癒しの光：流体金属応用個人限定版、ボルト：動力炉からの余剰電力放出、メギドの火：宇宙船からのメガ粒子砲攻撃、メテオ・ストライク：小惑星に核パルスエンジンを付けて目標地点に落とす・・・とりあえず、前2つにする。）

（そんな感じで使えるから。それと、將軍が可哀相だ！って言いながら何か送ってきたから転送するわ。）

（なになに・・・サルでもわかる剣の使い方：これであなたも帝国騎士！！）

（將軍が士官学校で使つてた教科書ね。よく読んどいて。あなたの体はあなたのイメージ通りに動くから。）

いろいろ言いたいことがお互いあるようですが…そんな、こんなで、夜が更けて行きます。

・・・

コケー、コケー！！

二ワトリが鳴いてるみたいです。ちょっと声が違いますけど…

・・・

「ウーン・・・朝か！」

リューイが起きたようです。でも、寝る必要あるんですかねえ。
ベッドの隣を見ると、ライムがいません。とっくに起きてたみたい

いです。

もぞもぞしながら上着を着て、スニークターを履きます。スニークターの形に変化はありませんが、材質が違つてるみたいです。生地が緻密になっており、しなやかです。

食堂へ行くと、ボンバーへアーを揺らしながらお茶を飲んでいるサンディがいました。相当寝相が悪いみたいですね。

あっけにとられてサンディの姿を見ていると、顔を洗つて！と台所をサンディが指差します。台所では、ライムがクレープを焼いていました。

リューイが来たことに気が付いたライムは、ヨイショーと踏み台を降りると台所の隅にある水瓶から小さな木のオケに水を入れてリューイに渡します。水道が無いみたいです。

外で顔を洗い食堂に戻ると、すっかり朝食の準備が出来ていました。ライムは良い嫁さんになるなあ・・って、リューイは感動します。何時の間にか、サンディのボンバーへアーがストレーントに変わつてます。??疑問はありますが、ちょっと聞いてはいけないと思つたりしてます。

リューイは、質素な朝食を取りながら、この世界の文明を自分の世界と比較してみました。

水道が無い、家の造りはログハウス風、暖房は暖炉、朝食の食器は素焼きのコップと皿です。西洋世界の中世つて感じですかね。王様も居るようだし、サンディは貴族と最初言つてたし・・・

「わあ、行くわよ！」

食事が終わると、昨日の籠を持つたサンディがリューイに告げます。

昨日と同じようにサンディの後からついていきます。

昨日曲がった十字路を曲がらずに歩くと、周りの建物が、少し立

派になります。木造2階建てに、間口もサンディの家の倍以上あるでしょ？

「いこよー」

その声に、サンディの指差す建物は、周りの建物と違つて石造りでした。

中に入ります。ドアの先にカウンターがあり、何人かの女性が立っています。

その中の1人にサンディは声をかけました。

「あのう・・・一人登録したいんですけど・・・」

「新人登録ですね。出来ますよ。あなたでしょ？」「

「いえ、この人なんですけど・・・」

後ろで、見ていたリューイを前に出します。

「では、この書類に必要事項を記入してください・」

お姉さんが、書類を出します。

リューイは受け取った書類を、読もつとして気が付きました。

(「これは！・・・ギリシア文字？・・・いや、ヒツタイトに近いかも・・・とにかく読めん！！）

書類を斜めにしたり、逆さにしたりして考え込んでいるリューイを、ギルドのお姉さんとサンディが不思議そうに見ています。

「・・・あの・・ひょつとして、文字が読めないとか？」

リューイが「クンとうなづきます。

「大丈夫！私が代筆したげるから！」

サンディはリューイから書類を取り上げると、カウンター備え付けのペンで書類の記載事項を埋めていきます。

なまえは・・・リューイ・ミハマ、性別は・・・出身地は・・・

ここでいいか、特技・・無し、・・・

何か適当なところもありますが、書類を書き終えるとギルドのお姉さんに渡します。

「はい、OKです！」

「ではこれに手を入れて下さい。」「

カウンターの下から大きな箱を取り出します。脇に手が入る穴が開いてます。

二十一

リーリーは、恐る恐る箱の中に左手を差し込みます。

「この者の、眞実を示せ！」

ギルドのお姉さんが呪文を唱えると、左手が何かに包まれ……
強く締め付けられます。

そして、突然に左手が開放されます。

「ハイ、終わりました。ちょっと待つてくださいね。」

「どれどれ?」

カーリーをお姉さんとサンディーが覗き込みます。

• 生命力：計測不可 •

体力言測不可

• 俊敏性：計測不可

魔力ゼロ

・魔法対性：それなりに・・・

カードをひっくり返します。

田舎日記

出典地

性別女

・職業：仕官候補生見習い

「H――――! こんなんでこんな職業が付くの? ? だいたい、
計測不可の河岸の方! 二回壊れてるんじゃねー!!

「あなた・・・女の子なのね？」

反応はひとつと違うみたいですが、リューイはとりあえず無視してます。

「壊れてはいないわよ。計測不可というのは、計れないってこと
で計測限界を超えた能力ではないわ。保留つてことね。」

おねえさんが女の子なんだ！って確認するようにコードを見ながらサンティに答えてます。

銀色の鎖にカードを取り付けてリューイに渡します。

「カードはランクに応じて3種類あるわ。下から順に鉄、銀、金に変わるの。それと、カードの頭、鎖を取り付けるヘッドがある方ね、ここに星があるでしょ。あなたは最初だから・・・変ね？星1つのはずだけど・・・3つあるのね。それだけ実力はあるってことか。」

「はい、これで全部終了！私たちギルドはあなたを歓迎するわ。は～って感じで聞いていたリューイの腕をサンディが引っ張ります。」

「次に行くわよ！」

左手のカウンターに行くとサンディは籠を渡します。

「これ、お願ひします。」

「どれどれ・・・ジギタの根が5本、ケアの株が8本・・・それと野犬の牙が6本！・・・無茶はするなよ、まだ黒の2なんだから・・・」

お爺さんはそう言つと籠の中身を取り取り、硬貨を籠に入れます。「ジギタが2エント、ケアは1エント、野犬は5エントだから・・・

・48エントじゃな。」

二口二口しながら籠を受け取ると、その中から20エントをリューイに差し出します。

「あなたが倒した分よ。」

え！って感じでリューイは戸惑いましたが、それはいいと受け取りません。それはそれ、これはこれ、ってサンディは説明します。だったら・・・と交換条件をリューイが提案します。だって、ギルドの職員が全員注目して見てるんですけど早く出たいですからね。交換条件は、リューイの持つてる鎌のケースが欲しいというものでした。今は布に包んでいますが、何かの時に解くのが大変だからです。

皮製ならこの半分で出来ると思つけど・・・等とサンディ達は次のお店に向います。

パーティ名は赤い靴

道を挟んでギルドの斜め向かい側に細工師の店があります。

ドアの上には、鍔とノミの絵柄の看板が掲げてありました。

ドアを開けながら、おはようーって挨拶すると、店の奥で何やら「ソジョソやってた人が振り返ります。筋肉質ですが、背ガ極端に低くリューイの肩に届くかどうか・・・

ドワーフだ！いるんだ。そうだよな・・・ドラゴンもいるって言つてたし・・・

ビックリしてリューイをよそに2人は商談です。

「この人が持つてる武器のケースを作つて欲しいんだけど。」

「どれ、見せてみな。」

リューイは鎌を差し出します。

ドワーフは、巻きつけられた布を解くと、しげしげと鎌を見ています。

振つてみて、刃を指先で確認します。

「二一ちゃん。・・・これはどこで手に入れた？・・・わしらドワーフの一族でさえこんな金属を作つたものはおらんぞ！それに、この柄の材質は見たこともなれば聞いたことも無い！」

刃先の確認で少し指先を切つたみたいで、いててなんて言いながらも質問します。

「あのね！この人はリューイって言つて、女の子なの。・・・」

サンディの訂正に、ドワーフはリューイをまじまじと見ます。

最後に、リューイの胸で止まり、サンディと交互に比較していましたが、納得したようです。

「わるかつた。でもな、お前達ぐらいの年頃の娘は、これでもか！――つつてぐらいの体形してるもんだぞ。着てるもんが男ものだし、言われない限り判らんわ！！」

「めんなさいとリューイは何故か謝ると、昔から家に伝わるもの

ですと答えました。まあ、嘘ではありませんからね。

その答えに納得がいったのか、神代の名工が打つたものかと関心しながらしばらく鎌を眺めていました。

「良い物を見せて貰つたし、女の子を男と間違えたのもあるし、簡単なものでいいならタダでやつてやる。ちょっと待つてろ。」

そう言つと棚から何かのケースを手に取り店の奥に下がりました。リューイは、暇つぶしに店の見学です。いろんな種類の皮細工、籠等の工芸品が並んでいます。2、3手にとつてみると緻密な仕上げに驚きました。ドワーフは器用だ、とは言われていますがここで出来るのか！って実感します。

「ほれ、こんなんで良いだろ。」

ナイフのケースをベースにしたようです。鎌の刃先をスッポリと被せて、ずれないように鎌の頭を回すように幅広の革帯で押さえ、皮ケースに付いた金具で止めています。ケースには20cmほどの鎖がついており鎖の先にリングが付いていました。

「使い方は・・・鎌の柄を剣を挟むようにベルトに挟んで、そのリングをベルトに通しておく。そうすれば危なくないし、邪魔にもならん。取り出す時は、鎌の柄を少し抜いて、ケースと革紐の間に親指を入れて持ち上げると、革紐が外れてケースも落ちる。」

リューイは教えられた通りにやつてみました。収納する時はちょっと面倒ですが、取り出すときはすんなりいきます。慣れれば見ないでも出来そうです。

本当に、タダで良いのかと聞いても、とりあいません。

「儲けた！と思えばいいじゃない。家に帰ろ。」

サンディイがニコニコ顔で言いました。

家に戻る途中で、急にサンディイが立ち止まる。ほらーあそこが村の共同井戸よ。と言つて指差します。路地の奥がちょっとした広場になつており、そこにはつるべ式の井戸がありました。小さな子が水桶を抱え歩いてきます。

ライムでした。

リューイはヒョイと水桶をライムから取り上げます。

「ありがとうございます、おねえちゃん！」

ライムは嬉しそうにお礼をいいます。そんな彼女にサンディはギルドから受け取ったお金渡します。え！こんなに？って言いながらもサンディから籠を受け取ると、2人にバイバイしながらどこかに出かけて行きました。

2人がサンディの家に戻ると、テーブルにはお茶の用意がしてありました。前もってライムが用意しておいたみたいですね。サンディが暖炉のポットからお湯を入れてカップにそそぎます。しばし時が流れます。

「ねえ！パーティを組まない？」

突然、テーブルに身を乗り出したサンディが言い出しました。

「パーティ？？」

いぶかしげなリューイにサンディは説明します。

- ・パーティとは、冒険者が目的達成のために集まる集団
- ・手に入れたものは、パーティ内で分配。均等配分が基本
- ・パーティでしか受けられない依頼を受けられる
- ・リーダーが必要
- ・パーティは自分達で好きな名前を付けられる等等
- 「いいよ！リーダーはサンディで名前は・・・」
- 「なに言つてるの！リューイはクラスが私より上なんだからリーダーはリューイよ！！」

「ライムもリューイお姉ちゃんでいいと思う・・・」

何時の間にか、帰つてきました。トロトロと籠を両手に持つて台所に向いますが、すぐに帰つてきてサンディの隣に座りました。

「・・・お姉ちゃん・・・ちょっと危なつかしい所があるから。その点、リューイお姉ちゃんなら安心できる！」

断言してます。妹に危なつかしいって言われるのも・・・

「じゃあ、とりあえず！つてことで、俺も結構無茶するところあるから。」

ずっとでいいよ。って言われてますけど、一応念押ししておけば安心です。

何で急にパーティーを組む必要があるのか疑問でしたが、どうやら、レベルを短期間で上げたいみたいですね。今まで、薬草等を調達しながらギルドに売つていきましたが、村から遠く離れた森には魔物や野犬等の襲撃を受けるため、まとまつた数をそろえることが出来ません。

周囲を気にしながらの薬草採取は、非常に疲れます。それでも、たまにちょっと油断した隙に野犬等に出会つたことがあります。昨日は珍しい薬草を見つけて夢中になつてた隙に野犬に囮まれたみたいですね。

1、2体の野犬や魔物でも、塵も積もれば・・・何時の間にか星2つまで成長します。レベルが上がれば上がるだけ体力、魔力等も上昇しますから、よりいつそう仕事がし易くなります。

「それで、名前はどうするの？」

「・・・・うーん！・・・リューアイ何かない？」

丸投げですか？それでもリューアイは考えます。

少し考えましたが、ふと解決策が浮かびました。・・・パクリでいいじゃん！！でも方向性は考えないと・・・

「どんな名前のパーティーがあるの？」

「え」とね。私が知つてる中では・・・一番強いのが、銀の剣。その次が、トットコハムハム。女性ばかりのパーティーに白い子猫が・・・

なんか適当です。どんななんでも良いみたいですね。

ハア～つて下を向くとライムの靴が目に入りました。ちょっと色あせていますが・・・赤い靴です。

「決めた！・・・パーティーを赤い靴と命名する！！」

おおー！！つて感じで2人が拍手します。

「良い名前ね。女の子って感じが良いわ。」

「やはり、リーダーだね。良い名前つけるもの！」

ライムはやうすいと席を立ちお所に向います。

昨日より、1回多い夕食を食べ、就寝となりました。

その夜、リューイがベッドに入り、しばらくするとドアが少し開
け、金髪巻き毛が顔を出します。

「お姉ちゃん・・・いい?」

今夜のお話は、スズメのお宿です。

「むかし、むかし・・・あるところへ、お爺さんとお婆さんが・・

・

最初のクエスト

ライムは眠ったかな？・・・よしよし・・・

（もしもーし！聞こえたら返事願います！－）

（なにかしら？）

（どうも明日から2人で、探索をするみたいなんだけど・・大型の獣が出てきたらどうしようかと・・・）

（あなたが前に出れば大概の獣いや魔物だつてOKよ。怪我したつて、癒しの光・自己限定版が使えるし。鎌改造版も岩を叩いても壊れない。それに、あなたは気付いてないかも知れないけど、腰の鉈も改造版よ。切れ味抜群！）

（それと・・・あなたが魔法使いたいってことが将軍ものすごく気にして、部下に相談したみたいなの。そしたらその部下がやる気満々になつて・・・レギオンつて名付けたわ。鎌改を頭の上に掲げて【レギオン！】よ。但し、絶対に狭いところで使わないでね。要するに、盾になれつてことだよな。でも、レギオンつてどっかで聞いたころあるんだが・・・）

（ところで、君の名は？・・・意外と、名前知らないと呼びかけ難いんだけど・・・）

（・・・そうねえ、ほんとの名前はあなたには発音しへばいいから・

・・みんなと一緒に【姫】で良いわよ。）

（姫なんだ・・・）

そんなこんなで朝になります。

昨日のように鳥の声で田舎め台所に行くと、すっかり身支度したサンディが待っています。

顔を洗い、ライムの用意した朝食を、美味しいって言いながら食べています。

「さて、準備は・・・リューイは特にないわね。ライムはどうへ？」

え？・・・ライム？今、お皿下げるけど・・なんで？

「良いよ！バツチリ！！」

ライムは台所から大きなリュックを担いで返事をします。

「あー出かけるわよ。まずはギルド！！」

「ちょっと、待ったあ！！！！！！ライムを連れて行くのか？まだ子供だぞ！！」

慌てて、やめなよ！とリューイが止ますが、これあるから私も冒険者とライムがギルドカードを出します。鉄の星一つ。軽射撃手です。

「ほらー！」

ライムが後ろを向きます。リュックの背中に十字弓が括りつけてあります。

遠くから、撃つのか。それならなんとか・・・いやーその荷物はなんだ？サンディなんか籠一つだし、いくらなんでも多すぎだろ、フライパンの取っ手が出てるし・・・ライムの背の半分はあるぞ！

「ああ、このリュック？これはライトの魔法効果のある魔法具よ。重くないから大丈夫！」

心配げにな俺を気遣つて解説してくれました。何でも、中に入れた物の重さを百分の一にするとか・・・20キロとしても、200グラム問題はありません。

そんなこんなで、3人仲良くギルドに向いました。

昨日より時刻が早いのかギルド内に数人の人影があります。ゴツイ体に一部鎧を金属板で補強した皮鎧、幅広の長剣や大型の両刃斧なんてのを持つてます。・・ちょっと近づきたくない感じです。

そんな彼らを気にせずサンディがカウンターへ向います。

お姉さん！ちょっと・・・なんて声がするといふを聞くと、昨日言つてたパーティーの登録をするみたいですね。

チヨンチヨンとGジャンの裾引かれます。下を見るとライムが掲示板を指差しています。

「お姉ちゃん、時間がかかるみたいだからあつちで待つてよ…」
ギルドのホールの真ん中でずっと立ってるのも考え方です。

リューイは、うん！と頷いてライムの手をとつて掲示板に向います。

「そういえば…・・・リューイは字が読めません。

「なんて、書いてあるの？ライム読める？」

「ライム読めるよ！えーとね。・・・ジギタの根・15本以上、40エンタ。・・・爆弾キノコ・10個以上、30エンタ。・・・噛み付きトカゲの討伐・20匹以上・40エンタ。・・・」

いろいろあるみたいです。でも、ライムが掲示板の依頼書を指差しながら呼んでいるのを聞いているうちに何故か一部の文字が読めるようになっていることにきがつきました。これって？？

（文字と発音が合致したみたいね。あなたの核は、あなたの世界の大型コンピューターを凌ぐわ。）

（「解説ありがとうございます。」）

「さて、どれにしようかな？」

サンディの用事が終わつたようです。

「最初なんだから、簡単なので・・・これかな？」

ライムと2人で覗き込みます。

「メルル草の球根50個で銀貨2枚！・・・今ならトレッタ草原で取り放題！・・・」

これつて、あやしくないか？・・・取り放題つて断るところが、どうも気になるんだが・・・

「良いんじゃないかな。3人もいるんだし。」

「でしうう！…やつと運が向いてきたつて感じよ！」

ちょっと、引っ掛かる所もありますが、サンディ姉妹が納得してるところを見ると、俺の危惧なのかなあ？って感じで了承します。

「トレッタ草原は、森の南にあるの。最初に出会った森の小道を

途中で曲がれば行けるわ。」

ひょっとして、俺が最初にいた所なのかな？それなら心配ないか
も・・・

「では、【赤い靴】しますーーー。」
アーティストがこう 말했다.

村の門では、門番のおじさんに、女の子2人を連れて行くんだから変なことしちゃだめだぞ！って言われましたけど、サンディが小さな声で、女の子よーつて告げたらえらべビックリしてましたけど・

段々畠の小道を登り森に入ります。この前のよ
くるかもしれないのにリューイが先頭になります。

森の中は、木立が茂り見通しが利きません。
(獣の気配は無いな・・・って、俺、気配なんて判るの?)

(解説しましょう！それはあなたの生体感知機能が無反応なためよ。生体以外に動体も使えるから。)

せて貰います。

股に別れています。

גָּתְּתַתְּתָה

どっちかな?って悩んでいるリューイに、サンディが指差します。

トレッタ草原です。

柴草のような草か、ライムの膝ぐらしの高めでもいまでも広がっています。

レギオンって？

3人は、草原を歩いていきます。

最後尾の少女は籠を持つて、真ん中の少女は大つきなリュックをしようつて、先頭の少女?は手を頭の後ろに組んで・・・まるで、ピクニックみたいだ、とリューイは思つたりしてます。

しばらく歩くと、サンディが遠くの小さな灌木を指差しました。

「あそこよ！あの灌木はこの草原の水場の目印なの。水場に近くにはメルル草が生えてるわ。」

「ラジヤー！」

リューイはコースを灌木に向けます。

「ところで、銀貨2枚つてどのくらいの価値があるの？」

「銀貨はね。一枚で銅貨50枚、50エンタだよ。銀貨一枚あれば、宿屋で1晩泊まれるし、10エンタあれば、食堂でおなか一杯食べられるよ。」

「ありがとね。」

ライムに礼を言います。

1エンタは10円つてとこか。銀貨一枚が5000円つてとこだね。物価的には日本と同じかも・・・

歩け歩こうなんて歌いだすと、ライムが教えて！つてねだつたりしてます。サンディも交えて3人で合唱しながら歩いてます。

突然、草原がそこだけ丸くくり抜かれた広場みたいなところに出ました。真ん中に小さな泉があります。少し離れて数本の灌木が茂つてます。

「ここでーす！」

サンディが宣言します。

「メルル草は、私とライムで集めるからリューイは見張りね！・・・でも、その前に！」

「ちよつと早いけど、お昼タイムだよー！」

泉の辺に大きな石があります。リューイはそこに立つて、周囲の確認です。・・・異常なし・・・

ライムがリュックをビックリして感じで下ろすと、中を「」
「そかき回しながら食器等を取り出します。

鍋を取り出した時、鍋にひつかかったフライパンが、転がり落ちました・・・弾みで転がり・・・泉にジャブン！！

すると、泉の水がゴゴゴ・・・と音を立てて盛り上がります。

サンディ達がビックリして見守っています。

「・・・ここで、泉の精が出てきて、貴方の落としたフライパンはこれですか？って金のフライパンを持つて出たら・・・これ投げつけるからな！…」

リューイがライムほどの大石を頭上に持ち上げて泉に宣言します。
ズズズ・・・と盛り上がりした泉の水が引いていきます。

・・・あー・・・ポイッとフライパンが泉から投げ出されました。
やはり、つとリューイは思つたりしてます。

「ねえ、どうこう」と・・・

「お約束つてやつだ。欲に田が眩んで、はいそうです。なんて答えると食べられちゃうんだ。」

「良く判らないけど・・・気をつける。」

そんな事がありましたけど、ライムは手早く食事を作りました。
今日のお昼は、パスタのような焼きうどんみたいなものです。
へ～麺類はあるんだ！今度リクエストしてみよう。と思いつながらもリューイは美味しいただいてます。

「あれ？今日の料理には肉が入ってる？」

「それはね。昨日沢山お金をもらつたでしょ。それで、ハムを少し手に入れたからなの。ほんとひさしぶり！」

(そういえば、昨日の48エントをサンディはライムに渡してたつけ。)

サンディは全く料理をしてません。昨日もやうでしたから、ライ

ムが何時もしてるんだと、思いましたが口に出して言つことはありません。人にはいつてはいけない事もあることをリューイは知っています。

おなか一杯に食べた後は、本日のクエスト【メルル草の球根：50個】です。

リュックから小さなスコップを2個取り出すと、泉から少し離れている地面を掘り出しました。

砂地に小さな2本の葉がチヨコンと出ているのがメルル草みたいです。

「リューイは、そこから周りを見張ってね。草原は魔物も出るから！」

潮干狩りみたいに球根を搜してゐる2人に、石の上から片手を挙げて答えます。

周囲を見張つていた、リューイの頭の中でピキーンっと警報がなりました。

続いて、目の前に半透明のレーダーのスクリーンみたいなものが展開されます。そのスクリーンに左下の方向から急速に接近する赤い点が3個あります。

（生体監視に何か、引っ掛けたみたいね。）

（便利な機能だけど、何かまではわからないのか？）

（経験は反映するわ。最初の接触までは不明なの）

「作業中止！！何かが来る！」

リューイは2人を大石の上に上げて敵が来る方向に立ちケースから鎌改を取り出します。

「・・・姿が見えないけど・・・草が倒れて移動方向が分かるわ。

・・・草蛇ね。」

「草蛇は太さは私の胴ぐらいで、3人分ぐらいの長さがあるよ。毒は無いからね」

2人が敵を確定してくれますが、あまり嬉しくはありません。

(・・レギオン・・)

(えー やるの?)

(ここなら、安心して使えるわ。貴方も、一度試しといた方が良いと思うでしょ!)

リューイは、草蛇のやつて来る方向に体を向け、鎌改を頭の上に掲げます。

【レギオン!】

ドッカーン!と轟う音が響き渡ると、ぐらぐら右側の空間が歪ます。

からからと歪んだ空間から(ウラーーー)というときの声が響くとともに、抜刀したローマの戦士風の鎧を着た集団で飛び出します。戦士達は凄まじいスピードで草原を駆け草蛇とすれ違いながら剣を振り下ろします。

バシュ!バシュ!と何かを切りつける音が立て続けに響きます。血飛沫で、あたりを霧のようです。

戦士達はそのままの速度で、左側に発生した空間の歪みに消えて行きました。最後の1人がこちらを振り向きピースサインを出します。

あつけに取られていた3人ですが、

「お姉ちゃん・・・あれ、なに?」

ライムの素朴な疑問に、(レギオン・・・大勢なるが故に・・・)と答えます。

「すごいね!今まで見たことも、聞いたこともないよ!」
(ゴメン、俺も初めてなんだ・・)使ったことを少し後悔している

みたいです。

「ほら!行くわよ。草蛇の牙は良い値段で引き取ってくれるわ!」

突然、草蛇の報酬に気が付いたサンディが2人を促します。

3人は草蛇の受難の場所に近づきます。そこには、細切れになり、

原型を留めていない肉塊がありました。何体の草蛇なのか判断できないほどです。

「あつた！あつた！！」

サンディイが、肉塊を棒でつついてましたが、目的のものを見つけたようです。

「この量なら5、6本見つけられると思つたけど・・・」

どうやら3本見つけたものの、不満そうな顔付きです。

さて、メルル草球根狩りの続きです。さつきの騒ぎで投げ出したスコップを使い片つ端から球根を掘り出していきます。

「こんなものかしら？ライムいくつある？」

サンディイはそう言いつと、片手で顔の汗を拭います。

「えーとね。60個はあるよ！」

サンディイが持っていた籠の球根を数えたみたいです。

「それでは、これで終了！村に帰るわよ！」

3人は泉の水で顔を洗うと森の小道に戻りました。

リューイの技

森の小道を村に戻ります。

初めてのクエストは問題なく終了しました。つとこんな気分でいると何かが必ず起ころるものなのです。

キュピーン！

リューイのレーダーに何かがひつかかつた模様です。

（うん・・何だ、何だ？）

（リューイもてるねえ、またなんか来たみたいよーでも、分かんないところみると、これも新型ね。）

目の前のスクリーンには近づく赤い点があります。でもリューイ達が進んでいるのですから、相手はまだこちらに気付いていないと考えられます。

「ストップ！前になんかいるみたいだ！」

「ストップって？」

「また、蛇かな？」

とりあえず止まりました。ストップとは止まれの事だよつてライムに説明します。

「判らないけど・・・いるみたい。こっちにはまだ気付いていないと思う。」

「でも、この道を抜けないと村に帰れないよ。道をそれると森は移動し辛いし、魔物や獣がうじやうじや居るし・・・」

「じゃあ、不意を突いて仕留めよう。」

作戦が決まったようです。サンディは杖を持ち直し、ライムは十字弓を背中から降ろして最初の矢をセットします。リューイも鎌改を左手でケースから取り外して構えます。

そして、そろそろと小道を進みます。

すると小道の先に、大きなそれは大きな猪がこちらを睨んでいます。

(オッコヌシ様みたいだ!) それぐらい大きいのです。

「来るわよ!」

かなり遠くから駆けて来るように地面が振動します。

「火炎弾!、続けて火炎弾!!--」

サンディが魔法を連射します。

「ツテー!」

ライムの十字弓から短矢が飛んでいきます。

巨大猪の顔面に炎が上がり、矢が突き刺さりますが、そんな攻撃はものともしません。さらに突進してきます。

リューアイが前に出ます。左手で鎌改を持ち刃を下側にして構えますが、持つた手はブルブルと震えてます。

(逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ・・・) 繰り返します。

(・・加速装置!・・・)

(え? なにそれ?)

(いいから早く、唱えて!)

(加速装置!・・・)

リューアイの頭の中の何かが力チリといったような気がします。途端に、周囲の音が消えました。木立から落ちる葉が空中で止まつているように見えます。

(あなたの運動能力等を100倍に高めたわ。今回は一気に最大まで上げたけど、練習すれば自分に合った能力に任意に設定できるから・・)

(これって、時間を止めてるの?)

(いいえ、周囲の時間経過は変化しないわ。あなたの能力が上がったことで時間が止まったように見えるの。その2人には、一瞬であなたが消えたように見えるのはずよ。)

よく周囲を観察してみると、空中で停止したように見えていた木の葉も少しずつ回転しながら落下しています。

(これなら、あの猪も怖くないでしょう? がんばってね!)

猪の突進がスローモーションに見えます。

リューアイは駆け出ると、猪の左側に回ると擦れ違いやが、鎌改を下から上に切り上げます。

切った感覚はあります、が音はありません。しばらくすると重低音の悲鳴が上がります。

リューアイは急いでサンティの方に駆け出します。

左の首付近から血飛沫がゅっくりと舞い上がっていますが、突進の勢いは変わりません。

猪の前に出ると、鎌改を刃を逆さにして構えます。そして駆け出して猪の頭に振り下ろします。

ボキッというような手ごたえとともに猪の頭は地面に落ち、牙が地面に突き刺さりました。

突進したエネルギーが全て猪の首に集まり、猪の体は首を支点に回転します。ゆっくりと回転しながらやがて背中から地面に落ちていきました。

(加速装置、解除 !)

リューアイの周りの音が復活します。

「お姉ちゃん！」ライムが駆け寄ります。

「急に居なくなつたと思つたら、いきなりドサツと猪がひっくり返るんだもん、ビックリしたよ。」

「あなた・・・何をしたの？ジックリ聞かせて貰うからね。でも、その前に！」

「分かつてるよ・・・！ライト！それにフライ！」

ライムの魔法により巨大猪は首を下に近くの木に縛り付けられます。最後に出刃包丁をリュックから出して猪の腹を上下に切り裂いて内臓を出します。

内臓は、前もってリューアイが掘つた穴にボタボタと落ちていきます。

「お姉ちゃん、ちゃんと埋めるんだよ。血の匂いで別のが来ると困るから・・・」

血抜きは1時間程度かかるとの事です。

「さて、話して貰いましょうか。あなたの不思議な魔法のことを・」

リューイは、こことは違う世界から来たこと、魔法ではないが魔法みたいな科学の応用した不思議な能力のことを。

最初はそんなバカなと思っていた2人でしたが、無詠唱で電撃を飛ばしたり、加速装置により2人の前から一瞬で消えたりするのを見て信じないわけにはいきません。

「それじゃあ、お姉ちゃんは町みたいな大きなどこでも一瞬に破壊できるの?」

「出来るよ。でもやらないよ。」

「それにしても・・・隕石落とし・・・恐ろしい技ね。」

技能としてリューイの能力を認識したみたいです。魔法だつて、結構恐ろしいと思いますけどね。

そんな話をしている内に、猪の血抜きが終わつたようです。

ヨイショ!とリューイが担ぎます。

森を抜け、段々畠の小道を歩き村に入ります。

3人の姿を見て、門番がビックリします。だって、3人目の若者風女の子がデッカイ猪を担いでいるんですからね。

「こつちよ!」

村の十字路でサンディが真直ぐに進み、リュウエイを呼びます。

「ここが獵師さんの家だよ」

先に入つたサンディが獵師と交渉しているようです。

「リューイ、入つてきて!」

ドアが小さいので、猪を肩から降ろして引きずりながら中に入ります。

家中では獵師のおじさんがそれを見てあごを落とします。

「おいおい・・いつたいどうしたらこんなをお前らが仕留められるんだ!俺ら獵師でさえ罠でも張らにゃあ仕留められねえぞ!・」

「あの娘がバカ力で、猪の首を折ったのよ。一瞬だつたわ。」

「何ッ！あのにいちゃんは娘つ子？」

おじさんの驚きはさらに増したようです。

「ところで私達は獵師じゃないから、分担が分からんんでここに来たんだけど・・・」

「ああ・・・そうだったな。分担割合は半分だ。獵師の取り分が2割、配分が3割、残り5割が仕留めたものの取り分だ。・・しかし、これだけの獲物だと、5割をお前ら食いきれぬ。ハム5本と獵師株20枚でどうだ。当然この毛皮はなめして後で持つていぐが。」

「毎週お肉食べられるね。」

そんなライムを微笑みながら見ていたリューイは、あらかじめ取引をサンディに一任しています。

「それでいいわ。」

「よし、取引成立だ。今、株を発行するからな。来期の株だ安心しな。」

さらさらと書類が書かれていきます。

書類とハムを受取り、獵師さんとの交渉は終了です。

帰り際に大物を狩る時は手伝ってくれつてリューイは頼まれてましたけど・・・

次にギルドに向います。

依頼完了手続きをし、買取窓口で草蛇の牙を換金して本日は終了です。

夜になり、リューイのベッドにライムが侵入します。

「ねえ、お姉ちゃん。泉でのお話、ライム良くわかんない。」

今夜はそれにしようとしてリューイはお話を始めます。

「昔、昔。あるところに、正直なキコリが住んでました・・・」

洗濯と次の依頼

（姫さん～。おーい姫さん！）

（呼んだかな？）

（・・・レギオン・・とんでもなかつたぞ！・・まあ、威力はあつたけど・・）

（それよ、それ！船中大騒ぎよ！海兵隊の連中つたら【西く行つたゼイ！・イエイ！】つてどんぢゃん騒ぎの最中なの。次はどんな衣装でやるか懸賞金を出してるみたいだし・・それを横目で見ていた連中も次は俺達だつて一緒になつて騒いでるのよ。）

（おかげで兵の士氣は鰻登りだけど・・・將軍は胃潰瘍で寝てるわ。）

（・・・大変なんだ。偉い人つて意外と大変なんだね。）

（まあ、それは置いといて、広域殲滅用が提案されたわ。【我命じる星の屑】：直径50mに、船からパルスレーザー砲の一撃が届く。近接防衛隊の連中が考えたみたいなんだけど、意外と使えるかもよ。）

（気が向いたらね。）

（それと、加速装置の練習も大変だろ？から、ターボ1・2・3の3段階に加速を設定しといたわ。1で10倍速、2で50倍速、3で100倍速ね。）

（ありがと。正直あれが無いと猪に殺されてたかも。）

（じゃあ、今日も頑張ってね！）

何時もの朝が来てリュートは「おじさん」と起き上がります。

（今日一日が平穏でありますよつて・・・）珍しく祈つたりします。

でも、そういうのつて必ず裏切られるんですね。

朝食を終えた時にそれは起きました。

「おねえちゃん。洗濯物出して！今日は赤い靴の定休日でライムお洗濯するんだから！」

リューイはドキ！としました。

この世界に放り投げられてから、一度も着替えたこともなく、一度もお風呂に入つたこともありません。トイレは・・必要有りませんでした。

「ライム・・俺・・着替えもつてない。」

「ええ！！今までずーーっと着たきりだったの？？」

2人は驚いてます。口に手を当ててジックリします。

「出かけるわよーー！」

サンディがリューイのてを掴むと、有無を言わせずに表に出ます。

「ライムも行きたかったな。」

拉致されていくリューイを、残念そうにライムは見ていましたが・

・諦めたのか後片付けを始めました。

家を出てターボ全開爆走モードでサンディが走ります。右手で掴んだリューイの足が地面に着いていないかのようです。

それでも、道行く人に（おはよう）って挨拶しますけど・・・挨拶された方は、（だれだっけ？）って立ち止まって振り返ります。

細工師の右隣が村の雑貨屋です。

雑貨と言つだけあつて、薬、食料、衣料何でもあります。

お店の前で急ブレーキを掛けずに、90度のドリフトターンをしてドアを打ち破るように雑貨屋に入ります。

お店のカウンターで急停止、リューイが0・2秒遅れて着地したみたいです。

若い女性が店員です。背中に服の上から汗をかいてます。

「この娘の服を中と外、下と上合わせて2セット頂戴！」

サンディが店員を睨見つけるように言いました。

「・・・あの「・・サイズは?」

サンティがリューイをジロー!と見ると、フルフルと首を振つてます。

「じゃあ、サイズを計りますね。こちらへ、エリザベス!」

店員さんがリューイにオイデオイデをします。

しぶしぶ店員さんの後について奥の部屋に向います。

(わあ・・脱いで脱いで!)

(両腕を開いて、次は上ね。)

(ふ〜ん。・・・あら?・・・ほほおー・・・)

奥からには店員さんの言葉と、リューイのジタバタしている音が響きます。

しばしばすると、げつそりやつれたりューイヒヤッタゼ!って感じの店員さんが出てきました。

「H-Hシ!~もう一度言つて頂戴!」

「はい。こちらの娘さんのサイズはあります!」

「でも、ここは村一番の品揃えだよ? 私のもライムのもサイズあるのに?」

「よく聞いてくださいね。娘さんのサイズはありません。男の子用のサイズは沢山ありますよ!」

「男物?」

「はい。沢山ありますよ!」

(う〜ん・・・確かにリューイを初めて見た人は男だと勘違いしてるようだし・・・胸はライム+だし・・・背は高いし、強いし、この際どうでもいいか。要するに洗濯してる間の着替えだし・・・

「男物、適当に上下と中と外。2セット頂戴!」

店員さんはテキパキと下着と上着を袋詰めにすると、リューイに手渡します。

「ありがとうございました!」

両手で大きな袋を抱えとぼとぼとリューイは歩きます。

料金はサンディが払いましたが、いへり・とはましつと聞せつりい状態です。

前を歩くリューイの足元を何気なく見たサンディは、あることに気が付きました。

「先にもどつて、私寄るとこあるかい。」

サンディは来た道を戻つて行きます。

「お帰り！どうだつた？」

ライムが抱きつきながらリューイに聞いてます。

「ああ、着替えて！お洗濯するんだから」

渋々部屋に戻ると、着ている物を脱いでます。

・・・これ、どうやつて取るんだ！なんて言つてますけど・・・

田を閉じて服を無事脱ぎ終えました。

サンディに買つて貰つた服を袋から取り出します。
男物です。袖のないシャツとパンツ・・・・懐かしさに涙が滲みます。

上着は黒のワイシャツ風のシャツと、黒のストレートパンツです。ちよつと学生風ですね。

下着とGシャツ、Gパンを一纏めにすると、部屋を出ます。

ドアの外で待っていたライムにおずおずと洗濯物を手渡しました。

「わあ！・・ラスカル様みたい！」

トテトテと自分の部屋に戻ると何かを持つて帰つてきました。

「ね！似てるでしょ。」

ライムの持つてきたパンフレットには、リューイににた格好でシヤツを少しひらひらさせた男役の絵姿がありました。

「王国で一番人気の歌劇団の人よ・・・ライムの憧れなの。」
はあ～という返事しかリューイには出来ませんでした。

バタンとドアが開きます。

「リューイ・・・着替えたのね！・・あ、出かけるわよー。」

突然の宣言です。

え？と返事をする間も無くサンディに腕をとられ連行されていきます。

「あ～あ・・・今度こそ一緒に出かけたかったのにー！」
ライムは残念そうに、洗濯物を抱えて台所に向います。

今度はゆっくりと歩きます。

リューイの腕を自分の腕に絡ませ、少しリューイにもたれかかって・・・
そうです！恋人気分の状態でゆっくりと歩きます。
そしてギルドに到着です。

「ちょっとね、買い物し過ぎて金欠状態なの。割のいい仕事を急いで探すわよ。」

サンディが小声で言います。
依頼用の掲示板を2人でひたすら探ししますが、なかなか良いのがないようです。

「御2人さん。ギルドでデートは関心しないな？」
振り向くと、妙齢の美人・・・それでいてスタイルはサンディに負けず劣らず・・・

皮の鎧を着こなし、両手剣ロングソードを持った冒険者がこちらを見てました。ロングの髪から尖った耳が少し覗いてます。

「エルフ？」

「ほう、珍しいか？いくら山村でもエルフくらいはいるだらうに。」

「

「リューイは、もつと田舎から来たのよ。それに私達は『デート』
やなく、仕事を見つけてるの！」

「そっちの男に、肩をあずけていては誰でもそう思つだろ？」
・で、見つかったのか？」

サンディイは首をふります。

「そうか・・・こんな話をするのも何かの縁だ。私とこれを受けないか?」

そう言つと右手の依頼書をサンディイに手渡します。

依頼：水の精靈に祝福された聖水の入手

場所：精靈は悲恋の洞窟に住む

条件：魔物数が多く1人での依頼は受け付けない

報酬：銀貨20枚

「やるわ!」

サンディイは即答しました。

「ちょっと待つた!魔物多いんだよ。やられちやうよ。」

「男が心配性とは・・・情けない。」

「この娘は、女の子よ!」

サンディイがリューアの肩をガシ!つとつかんでエルフの前に突き出します。

エルフはじつとリューアの全身を見ます。

上から下へ・・・もう一度、上から胸で止まりました。

「確かに・・・でも、エルフより・・・」

いつてはいけない事を理解しているようです。

「ところで、私は、ルミナと言つ。シルバーの星一つだ。そちらは?」

「私は、サンディイ、こいつはリューア、後、ここにはいないけどライムでパーティを組んでるの。黒の星3つ、2つ、1つよ。」

ここでは、詳しい話が出来ないとサンディイの家に移動することになりました。

悲恋の洞窟（1）

「小さいのに、感心だな。」

ルミナはライムの入れたお茶を美味しそうに飲んでます。

「ところで、今回の依頼は難しいの？」

ここは、きちんと確認しておく必要があります。危険ならばライムを置いて行くのも選択肢です。

「いや、それほどでもない。・・オーケーが多いのが玉に瑕だが・・

「オーケー・・・結構な相手です。あまり見かけない魔物ですけど、初心者殺しの異名をもつてたりします。」

「それならば、赤い靴からは、私とリューイってことで・・・」

「お姉ちゃん！・・・ライムも仲間だよ。それにお姉ちゃんつて攻撃魔法しか出来ないじゃない！！」

ライムがすかさず抗議します。

「俺も仲間はずれは良くないと思つた。こぞとなれば、昨日の猪みたいに・・・」

「さて！・・・昨日の猪とは、あの獣師宅の前で解体していた巨大猪のことか？」

「そうだよ。リューイお姉ちゃんが一瞬で刈り取ったんだからー」ライムは自慢そうに言つてます。

「そりゃ・・・なら、ライムとやらを連れて行つても問題ないと思つぞ。それに補助魔法は洞窟探査には欠かせないからな。」

ライムとリューイは嬉しそうに、ヤッター！なんていいいながらハイタッチなんかしてますけど、サンディの胸中はあまり良くありません。

でも、ライム一人を残していくのも気がかりです。

「ウーン・・・リューイがいるなら・・・ライムーOKよーー！」
サンディは渋々ながらも同行を許可します。

「・・・とこりで、リューアイ、私と試合をしないか？お前が倒したという猪は・・・私では無理だ・・その実力を見てみたい。」

「試合・・・でも、防具も木刀もないぞ！・・・それに俺の武器

は剣じゃないし・・・」

ルミナはリューアイを微笑ながら見ていました。

「もちろん、真剣でかまわない。」

だけど・・・何ていつているリューアイをサンティは立ち上がらせます。

けちよんけちよんにしちゃいなさい、なんて言つてますけど・・

今一つ、リューアイは気乗りしてないみたいです。

「こひちよ。裏庭なら誰にも見えないからね。」

ライムが台所の裏ドアを開けて2人を案内します。

裏庭は、家1軒分くらいの広さです。

庭の真ん中にルミナとリューアイが歩いていきます。

「さて、では・・・始めるぞ！」

そう言つとルミナ後ろ跳びして距離とり、同じようにリューアイも後ろに下がります。

ルミナが長剣を身をねじるよつにして右手で抜くと、リューアイは左手でケースを外し鎌改を取出します。そして、右手で腰から鉈改（鉈改造版）を引抜き、逆手に持ちます。

（逃げちゃダメだ！・・逃げちゃダメだ！・・でも、相手は刃の長さだけでも、1・2mはあるけど・・俺の鎌の刃長は30cm程度だし・・鉈だつて40cm程度しかないぞ。足しても相手の半分ぐらいじゃないか！）

ルミナが大上段に構えます。リューアイは映画で見たカンフーの応用です。左手を前下げ、右手を後ろに上げて、足を前後に爪先立ち・

（変わった武器と構えだが・・スキだらけだ。・・・そもそもみるか？）

ルミナの構えがハ双に変化し、半歩踏み出します。リューアイは半歩下がりながら軸足を中心に体の向きを入れ替えます。そして左右の腕を上下逆の構えに変えます。

（半歩で構えを入れ替えるのか・・スキではなく自然体？？・・バカナな！打ち込めば全てが分かる！！）

ルミナが3歩素早く前進しハ双の構えから、リューアイに向い斜めに振り下ろします。

（ターボ1作動！）

リューアイが半歩下がりながら体を回転させて長剣の軌道から身を逸らします。

長剣の軌道からリューアイが逸れたことを見て、さらに一歩リューアイの近づいて、今度は長剣を振上げます。

リューアイは左手の鎌の刃で長剣を受けると衝撃に屈することなく鎌を振上げます。そのままルミナに近づき鎌を首筋に突き付けます。

（ターボ解除）

「これで、いいか？」

「十分だ！」

2人は武器を納めます。

「ところで、あのよろくな戦い方は見たことがない。ビニで覚えた？師はまだ存命か？」

4人でまつたりとお茶をのんではいると、ルミナが突然きりだしました。

「自己流・・・師はいない。ただ、全ての動くは円を描く事を基本としている。」

「そうか・・・円の動き・・・確かに、始めもなく終わりもない、それに比べ私の動きは直線だ・・負けるわけだな。」

ルミナは自己嫌悪に陥っているみたいです。

「いついう時は話題を変えるのがベストですよね。」

「話をずつと前に戻すけど・・・洞窟って言つたよね。ビニ

へいくの？』

そうでした。今度は洞窟探検なのです。

『オークが居るって事は、結構深いと思うんだけど・・・』

『悲恋の洞窟よ。』

『それって、人間に恋した水の妖精が住むつていうあの洞窟？』
洞窟の名前からして、何かいわく付きの洞窟みたいです。

『歩いて半日、中も広くて、妖精の泉は一番奥にあるつて細工師のおじいさんに聞いたことがあるよ。』

『そうだ。そして、そこには沢山のオークがいる。』

『ライム、準備しなくちゃ！…』

ライムはそう言つと自分の部屋に帰つていきます。
残り3人で臨時パーティの役割分担を確認します。

洞窟内を歩く時は、ルミナが前、その後をサンディーとライムが歩き、最後尾をリューイ。

戦う時はなるべく壁を背にして、前衛をルミナとリューイ、後衛をサンディーとライム。

洞窟内で手に入れた宝や硬貨等はクエスト終了後に分け合つ。均等配分が基本。

食料、水等は赤い靴が確保。薬草、毒消し等の医薬品はルミナが確保。

初めての洞窟クエストです。ルミナという先輩冒険者からいろいろとアドバイスを受けることにしました。

悲恋の洞窟（2）

3人は朝早く家を出ます。

今日は、洞窟の調査なんですけど、3人の格好はトレッタ草原のクエストと同じです。

ライムが大きなリュックを背負つてますから、まあ、必要なものは全部有るんでしょうけど・・・

ルミナとの待ち合わせ場所はギルドのホールです。

先を歩く2人の足元に気付いたのは、十字路を過ぎたあたりでした。

（あれ？2人とも靴が新しくなってる！）

昨日まではパンプス風の靴でしたが、今日は、薄い赤に染められた、皮の半ブーツです。

（そういえば、俺たちのパーティは（赤い靴）だったよな。でも、俺のは・・・！）

俺は白いスニーカーだと下を見ると靴が何時の間にか薄いピンクです。桜色っていうやつです。

（サービスで色を変えてみました。）

（・・・ありがと・・・）

姫が色を変えたみたいです。

（ダンジョンへ行くんでしょ？空からサポート出来ないから、残念がってたよ。）

（ありがとう・・と黙つておぐけど、あまり遊ばないでね。）

ギルドのドアを開けると、テーブルで1人待つているルミナが居ます。

「おはよー・・・」ひちの準備はできたわ。」

「よし！それじゃあ出かけよつ。」

ルミナが席を立ちます。傍らの長剣を背負つと、もう片方の肩に

皮袋を背負います。

村を出て段々畠を下に下りていきます。

畠を越えて、橋を渡つてトレッタみたいな草原に出た所で道が分かれていきました。

「左の道を行けば町に行けるわ。今回の洞窟は右の道を進んだ森の中にあるの。」

サンディの言葉に従つてリューイは右に向かいます。
草原が灌木に変わり、立ち木が密集し始めます。森に入ったのです。

森の小道（・・・あまり人が通らないのでしょう、獸道みたくなつてます）をしばらく歩くと突然、前方が開けました。
石組が崩れて苔むした廃墟がありました。
アランがへえ～って感心しますと、ルミナが先行します。

「こっちだ！」

石組みを右に、左に、まるで迷路です。

3人は慌てて後を追います。

「あれだ！」

ルミナが指差す先には、大きな壁のよう石組みの中にぽつかりと開いた洞窟の入口がありました。

「ねえ、お昼のしようよー！」

これから、どんな冒険になるのか想像できませんが、（オークがいっぱい）つてことを考えると、ここでちょっと一休みは大切なことかも知れません。

日持ちするビスケットを食べ、水筒のお茶を飲んで休憩です。

「ところで、恋恋の洞窟つてどんな感じなんだ？」

「ほほ、一本道だ。横道もあるが直ぐに小部屋になる。」「宝物も、あるの？」

ライムが話に加わります。

「小部屋にオークが貯めこむことがある。誰かが取つても、直ぐにオークが補充するようだ。」

「だったら、オークを倒すのは不味くない？」

「無理に倒すことはない。しかし、水の精靈に合つには倒すしかないかもしれん。」

「祝福された聖水つつて、聞いたことないけど・・・」

「あまり一般的ではないからな。しかし、特殊な儀式には絶対に必要な物だそうだ。」

「さて、十分休んだことだし・・・行くぞ！！」

4人は腰を上げます。

洞窟の入口は2人並んで入れるくらいの大きさでしたが、少し入ると急に広く、高くなっています。

洞窟内は真っ暗ではなくところどころに小さな松明が焚かれています。

やはりなにかいるみたいです。しかも知能を持っているものが・・・

「我望む・・・ライトーン！」

ライムが魔法の明かりで周囲を照らしました。ライムの頭の上3m程度の所を、人の頭程の光の玉がふかふか浮いています。ほお～っとリューアイが周囲を見渡します。

魔法の明かりで洞窟内の水晶が輝き天井はまるで星空です。

「ライム、様様だな。松明ではこうはいかん。」

ルミナはライムの頭をイイコイイコしてます。

ルミナ、サンディ、ライム、リューアイの順に並んで進みます。

リューアイは最後尾ですが、念のために生体感知レーダーを作動させ、鎌改を左手に持ち臨戦態勢です。

(ピキーン！) とリューアイのレーダーが警報を発します。

「前方、右側に何かがいる。数は・・・まとまってる。」
ルミナはポケットから布切れを取り出し確認します。

「警備室か・・・そんな数にはならないはずだ。入つてみるか?」

サンディイが頷きます。

少し歩くと右側に行く枝道がありました。

「どうだ、気配がするか?」

「バツチリだ。4体いる。」

「よし、ドアを蹴破つて、爆裂魔法を叩き込む、そして私が左、リューアイが右だ。」

3人が頷きます。

物音を立てないようにそろそろと4人が進みます。
ドアの前に来ました。

リューアイがドアを前にサンディイの魔法のタイミングを計ります。
すると、ライムがチョコチョコとコヨーイのところにやって来ました。

ドアを少し開けて鍵がかかっていないことを確認します。

(ライム。なにするの?)ってリューアイは見てます。

ライムはリュックを『そぞろ』始めるとい、小さな玉を取出しました。
玉にはわっかの付いた紐が出ています。

玉を握り、わっかをもう片方の手で握るとリューアイとルミナの顔
を見て頷きます。

2人が頷き返すのを見ると、ドアをちょっと開けました。
玉のわっかを勢い良く引つ張るとドアの隙間から中に投げ込みます。

そして、ドアを閉めました・・・。

(ドオムー!)

低い音が響くとドアの隙間から鋭い光が漏れ出ます。

悲恋の洞窟（3）

シユウラー・・フと薄い煙が漏れ出でているドアをリューイが蹴飛ばします。

バタンとドアが吹き飛び中には、ふらふらしながら立ち上がるうとしているオークがいました。

「右だ！」

ルミナがそう言つと部屋に飛び込み、背中の長剣を振り抜きながら手前のオークを斜めに両断します。

リューイも、遅れてなるか！と鎌改の刃裏でオークを殴りつけます。殴られたオークは勢いあまって壁に叩きつけられます。残り2体も武器を取る暇を与えずにはそれ葬りました。

「もう大丈夫だ！」

リューイは外にいるサンディイ達に声を掛けると、2人は素早く中に入ります。

外で2人きりはちょっと心細かつたりしたみたいですね。

「あらら・・派手にやつたのねえ。」

へやの中のスプラッタな状態を見てサンディイが言います。

「ライムが一番過激じゃないかと・・・」

「でも、いい判断だ。広場ではこうはいかないが、狭い部屋だと効果的だ。」

そんな会話を我関せずな姿勢で、ライムは獲物を漁つてます。

「何かあった？」

「何もないよ。銅貨だけ・・・」

「何時も有るとは限らないさ。」

ちょっとがつかりしているライムをルミナが慰めたりしてます。

「何もないなら、さあ、先を急ぐぞ！」

しばらく休んで先に進みます。

トロトロと洞窟を進みます。

相変わらず天井は高く、道は曲がりくねっていますが、道はきちんとした石置です。

月明かりの夜の街道を歩いているような錯覚さえ覚えます。道が大きな岩を迂回したときです。

「さて、ここからは様子が変わる。十分注意するよ！」
ルミナが一旦歩みを止めてみんなに注意します。たしかに、風景が変化します。

「これって……」

「神殿……」

「だよね……」

「そうだ。かつて栄えた王国の神殿跡と言つたほうが正しいけどな。」

「だから、途中に門番みたいな部屋があつたのか。」

「・・今は、殆どここに謳でるものもいない・・

神殿は洞窟内の岩壁をくり抜いて作られているようです。かなり遠くにあるのですが、ライムの作った（ライトーン）の明かりで神々しい姿を浮かべています。

神殿までの道は一直線で等間隔に列柱が並んでいます。

かつては、列柱の上に据えられていたであろう石像の破片が辺り一面に散らばっています。

「ねえ。なんでこの洞窟を（悲恋の洞窟）って言つの？」

「そうだよね。つてリューイも頷きます。」

「今では知る人もいなか・・・そつだな、いわれを話してやろうか？」

「うん！」

道の両側にある列柱の丘座に腰を掛けると、ルミナのお話が始まります。

昔、まだそれぞれの部族が独立して暮らしていた頃のことです。この森も、その頃はトレッタ平原の北にある森と一体となつた大森林でした。

そして、森にはエルフの王国があつたのです。

ある日、エルフの王様は夢の中でお告げを受けました。この森の岩山の中に大きな洞窟があり、そこには泉の精が住むと・

・ その場に神殿を造り泉の精を大切に守れと・・・

あくる日、王様は王国中に御触れを出し、岩山の洞窟を探しました。そして、見つけたのです。岩山の洞窟とその奥に湧き出る不思議な泉を・・・

王様は洞窟内の岩肌をくり抜いて、泉を守る神殿を建てました。洞窟の前にも、大きな神殿を立て皆でお参りできるようにしました。そして時は過ぎて行きます。

神殿には、代々王族から1人の女性を洞窟内の神殿に巫女として差し出していました。

ある国王の時代に、王族には1人の王女がありました。誰もが、王女が巫女になるものと思っていました。

でも、王女には・・・好きな相手がいたのです。

それでも、しきたりを破ることは出来ません。

王女は泣く泣く、結婚を諦め、洞窟内の神殿に向いました。しかし、相手の男は諦め切れません。

その夜、神殿に忍び込み、洞窟内の神殿に向つたのです。神殿で、残してきた相手の幸せを泉の精に一人祈つていた王女は、じぶんを呼ぶ声を聞きました。

あの人があなたに来てくれたのです。

王国も、しきたりも、2人には関係ありません。

2人で遠くに、誰も知らないような土地へ逃げようと神殿の列柱の道を走りました。

しかし・・・見つかってしまったのです。

警備兵は不審な2人に矢を射ちました。何人も、何回も・・・

そして、ついに矢は当たつたのです。

王女の胸を貫いたのです。

男は自分さえここに来なければ、と嘆き悲しみ、その場で王女を優しく抱いたのです・・・

そして、王女を貫いた矢は、男の胸に深く差し込まれたのです。国王は、いたく悲しみ、せめて来世では一緒にになれよ。と2人の遺体を矢を抜くこともせず、1つの棺に収めました。

その時、奇跡が起きたのです。

棺の蓋を閉める正にその時、棺から光が満ち溢れ、清浄な水が溢れ出しました。

そして、あふれ出た水の流れは、2人の棺を泉の奥底に運んだのです。

奇跡は続きます。神殿に湧く泉の水は不思議な働きをするようになつたのです。

それは、死んでいない限りどんな病気も怪我も一瞬で全快するというものです。

何時しかこの神殿の水を（祝福された聖水）と呼ぶようになったのです。

「と、まあこんな感じだな。」

「ふうん。」

「悲恋なのね・・・・・悲恋の洞窟つて・・・これ？」

「よくあるような、ないような・・・・

反応はいろいろでした。

悲恋の洞窟（4）

そうなんだ、悲恋なんだってリューアイは自分に言い聞かせてます。だつて、悲恋でしょ！つてサンディにポカリと実力を伴つた言い聞かせを受けましたから。

一人だけ、トボトボと列柱を進んでいきます。

何時の間にか、道の周りは池のようになつています。水の上に浮かんだ一本道を進んでいきます。

ライムがなにかいるかな？つて覗いてます。

何もいないうですが、かなり深いようです。

（ピキーン！）

警戒反応です！目の前に半透明の索的用画面が自動的に展開します。

（赤だ・・・でもまだ遠いな・・・）

「判るか？神殿の入口を見てみろ・・・2・3匹いつも伺つてゐるが、奥にはうじゅうじゅういるぞ。」

「何とか、一網打尽にしたいところだが・・・」

「私の魔法は単体用よ。」

「私だって、矢は一本づつだよ。」

無理は言わないでつてサンディ達が訴えています。

（協力したら全体攻撃が出来るかも！）

（えーどうやって・・・うん、うん・・・なるほどね。）

（うやら、アドバイスを受けたようです。）

「あの・・・提案があるんだが・・・」

皆にジロリ！つて睨まれました。

「いや・・・ひょっとしたら、全体攻撃出来そうなんだけど、協力してくれない。」

「リューアイって、全体攻撃できるの？また、（レギオン）使うの

？

「いや、あれは、もっと広いところじゃないと無理なんだ。俺の単体用攻撃方法なんだけど・・皆で協力すれば全体魔法と同じように使える方法を見つけたんだ。」

3人は、単体で全体？どうするの？って顔で見ています。

「ライムはさつきの爆弾みたいなやつ、まだ持ってる？」

「洞窟つて聞いたから・・後、10個位ある。」

「じゃあ、説明する。よく聞いてくれ。」

4人は頭を寄せ合つて、カクカクしがじか、フムフム！つて相談しています。

「じゃあ、判つたかな。タイミングが大事だ。」

神殿に少しづつ近づきます。

リューアイのレーダーには赤い点がどんどん増えていきますが、神殿の円柱の影から伺つているオークは2・3匹です。

「作戦開始！」

サンディイが（火炎弾）を神殿に向つて打ち込みます。

ドカンっと音がして、神殿の入口付近に火炎が開きます。

ワアー！！と神殿からオークが一斉に飛び出し、こちらに向つてきます。

「次！」

リューアイ達は逃げ出します。そして、ライムから貰つた小さな玉を道の両側の水面に投げ込みます。

ドムウ！と光と音がして、大きな水柱が道の両側に立ちました。

水しぶきが道に滝のように落ちてきます。

その中を何事もないようすにオークが向つてきました。

「いまだ。（ボルト！）」

リューアイの動力炉から大電流がバリバリと先頭のオークに走ります。

すると・・後ろのオークに次々と電撃が伝染していきます。

感電したオークは体から煙路を出しながら痙攣していきます。

リューイは濡れた床に両手を付いてしばらくバリバリと電流を流していましたが、オークがシュン！と消え始めたことを見て、やつと立ち上がります。

「うまくいったかな？」
「すごい！」

「こんな使い方もあるのね。」

「むちゃくちゃだ！！」

反応は色々ですが、とりあえず入口までの道は確保したみたいです。

オークの残した銅貨を回収しながら神殿の入口に辿りつきました。

神殿の入口の両側に小さな水路が掘られています。

神殿の奥から綺麗な水が流れています。この水が先ほどの道の両側にある池を作ったみたいですね。

神殿の中も両側に列柱が続きます。

外の道と違つて、柱の間に石像が安置されています。

どんどんとおくに入りますと十字路になつていました。水路には橋が架かっています。

「どうする？」

ルミナが確認します。

「行つて見ましょう。先ずは右側からね。」

道を右に折れて、石橋を渡ると扉があります。警備室はドアでしたが、やはり神殿の中は違います。

リューイは扉のノブを回して少し開きます。鍵は掛かっていないようです。

ライムを見て頷きます。

チョコチョコ♪とライムは例の玉を持つてやつてきました。

リューイとライムが見詰め合つことしばし・・ライムは頷くと玉の紐を引きます。

リューイが扉をそつと開くと、ライムは玉を投げ込みます。

ドムウ！一鈍い音がして、とびらの隙間から閃光が溢れます。リューイとルミナが扉を蹴破つて飛び込みました。

「・・・誰もいない！」

「しかし、見ろ！ここは食堂らしいな。」

ルミナが剣で示した先には、血にまみれた肉の塊・・・そして、鎖につながれた足の切れ端・・・

サンディが慌ててライムの皿を手で覆います。

「オークは肉食で、人を食べるって聞いてたけど・・・」

「そうだ。やつらは何でも食べる。人を襲えばこの通り、そして持っていたものを大事に蓄える。」

ほら！つて箱をサンディに渡します。

なに？つて箱を開けると・・・安ものの指輪や首飾り等が入っています。

「持つて行きな・・悪いものじゃない。」

サンディはそつと箱を籠に入れました。

「さて、次は反対側だ！」

部屋の惨劇を見てちょっと足取りが重くなりましたが、反対側の先にある扉を同じ用にして開きます。

部屋の中はさつきと同じで誰もいません。

いや・・いました。かつて人だったものが・・・壁の鎖に両手を縛られ両足を切り取られた遺体が・・・

宝物もありません。

がつかりしましたが、あまり時間を無駄にしたくありません。気を取り直して、4人は神殿の奥に向うことにしました。

泉の精

4人は、神殿の奥に進んでいきます。

通路の両脇に並んでいた列柱が無くなり、水路の幅が広くなりました。まるで、浅い川が流れているようです。

前方に数段の石段に縁取られた泉が見えます。

泉の傍には4体の石像

泉に向って微笑みながら手を差し伸べています。

清浄な、水晶のように透明な水が石段を濡らしながら水路に流れています。

「この石像・・ルミナに似てるね。」

「ヘルフ像だからな。ほら、耳の形が同じだろ。」「

ルミナは近くの石像を指差してライムに説明します。

「ここで、終わりだよね・・依頼はどうなるの?」

「ここで、いいんだ。」

ルミナは泉の前に跪きます。

光球に照らし出された泉の風景とルミナの姿が合わさると神々しさが漂います。

3人は思わず、何時しかルミナの後ろに下がっていました。

「・・ヘル・ミハイラフ・サヌ・マアライカナ・・我は救いを求
めに参りました・・」

ルミナの不思議な詠唱が始まります。

「・・サヌア・マヌエト・ミク・リモカナ。我に姿を御見せ給わ
んことを・・」

何が始まるの…って感じで3人は見ますが、言葉を出すことは
ありません。

突然！・・泉の奥で何かが光りました。

泉の水はぐんぐんと溢れ出します。

バシャーン！・・と泉の水がはじけ飛びます。

3人が思わず目を閉じます。再び、目を開いたその先には・・・神々しい光を放ちながら泉に浮かぶ少女の姿がありました。泉の精です！

絶対にそうです。だつて少女の体は泉の水と一体になつた水で出来てますから。

「我を呼んだのは・・其方か？」

「はい。・・聖水を賜りたく。」

「フム・・・昔日のエルフ王国は潰え、この神殿はオークの根城と化した。その、オークどもを粗方滅ぼしきこまでここまで来たからには・・与えるに吝かではない。」

「しかし、それには代償を必要とする。瀕死の重症を負つても飲めば必ず全快する力を持つ聖水に、そなたはは何を捧げるのじや。」

ルミナは黙つてしましました。そんなことは聞いてないぞ！って顔に書いてあります。

「あのう・・・ちょっとといいでですか？」

リューアイが間に入ります。

「ホオ〜、面白い者が同行してあるな。何じや？」

(リューアイ、彼女私達のこと知つてゐみたい、気をつけたね。)姫がこつそり耳打ちしてます。

「代償つて、どんなものですか？」

「別に、命をよこせ。とこようようなものではない。・・珍しいもの。宝と呼ばれるものじや。」

「宝は持つていません。これまでの道でもオークの宝はありふれたものです。」

「そのようなものは、我も欲しくはない・・・そうじゃ、其の方の腰にあるもので良いぞ！」

泉の精はリューアイの鎌改を指差します。

まあ、確かに珍しいものです。形は何ですが・・・材質はドワーフのおじいさんも判別不可能！冶金工学の賜物ですからねえ。

「ルミナ。聖水は必要なんだな？」

「ああ、それが無いと・・・私は部落に戻れん！」

リューアイは腰に差した鎌改を取出します。

泉の精の許にゆっくりと歩いていき、鎌改を渡しました。

「ふ～む、やはりか・・・」

泉の精はジッと鎌改を眺めています。

(私に好く似た、形を持たぬ者達よ。貴方はどこから来ましたか。この世界で何をするのですか？)

リューアイの頭に、姫以外の思念が飛び込んできました。

(この世界の外から、そして何かをするために・・・)

(私の願いを成就させるためよ！)

姫も思念の会話に加わります。

(・・・その願いはこの世界に害となりますか？)

(害・・・善と悪はある意味で等価値だから・・・定義立てるには・・・)

(害にはならない。少なくとも俺はそう思つ。)

(それが貴方の目的に向う姿勢ならば・・・目的は詐索しません。・

・困っている者を最後まで見捨てないで下さいね。)

「良からう・・娘よ。これが、求めるもの、祝福された聖水じや。

」

泉の精の手には何時の間にか小さな小瓶があります。

ルミナの前に進むと、その手に小瓶を渡しました。ガラスの小瓶の中には透明な光を放つ水が入っています。

「・・・私はこの泉を去る。ここにはオーク達の住処になつておるからな。」

エツ！つて感じで4人は泉の精を見ます。

「そんなに驚くこともあるまいに・・とこりで、人間の娘よ。お前達は悲恋の洞窟を知つておつたか？」

2人はふるふると首を振ります。

「悲恋の洞窟はエルフの昔話・・・しかも知る者も少ない伝説じや。ここは無くとも構わぬ。」

「でも、それでは・・・」

「聖水が手に入らぬか・・心配せずとも、日の当たる神殿の神官に頼めば聖水は手に入るだろうに・・それに、人の生死を左右する物は本来あつてはならぬ物。これが最後と知れ。」

「でも、それじゃあ、死にそうな人を助けられないよ。」

「生死は人の定め。無理に乱すことはない。・・今までそのようないい物があるとは知らなかつたであろうに・・・」

3人は頷く。

病気や怪我を治療する薬や魔法はあるが、瀕死の者を救つような代物は聞いたことが無い。

「だから、無くとも構わぬのじや。帰るがよい。お前達が立ち去つた後、この神殿の入口を閉ざし、我也立ち去るとしよう。・・洞窟は、オーク達の住処じや。残しておこう・・・」

4人は礼を言つと足早に神殿を出ます。

列柱の中ほど迄来ると、神殿の方から大きな音が響いてきます。振り返ると、天井から巨石がどんどん落ちているのが見えます。しばらくの間、落石は続きます。やがて神殿はその中に閉じ込められ、見えなくなりました。

道の曲り角にあつた巨石まで辿りついた4人はちょっと休憩です。

ライムの美味しいお茶とお菓子を頂きます。

「すまない！これのために、お前の大切な武器と交換してしまつて。」

「いいよ。そもそもあれは鎌で武器じゃないし……これも有るし。」

「リューアに頭を下げるルミナに、いいよいによつて手振ると、腰の鉈改を見せてます。」

「でも、伝説の武器だつたんだしょ。ドワーフのおじこさんもやんな事言つてたし……」

「いや、あれはたまたまおじこさんが見たことが無かつたからだよ。問題なし！」

たしかに、この世界の材質ではありませんが、泉の精が鎌を持つて戦う事は想像出来ませんし、したくもありませんから特に問題は無いでしょう。

今頃は、壁に飾つてお茶でも飲んでるのかも知れません。

「実は、この依頼は私が個人的に出したものだ。ギルドは通つていない。」

「しかし、依頼は依頼。ちゃんと報酬は払う。全額、赤い靴の取り分で構わない。」

「厚かましいが、一つお願ひがあるのだが……いいだろ？」「どんな？つて3人は聞きます。

しばらく考えていたルミナがリューアに顔を向けました。

「リューアをしばらく貸して欲しい……そうだな、一ヶ月位だ……」

「「「ええーーー！」」」

3人は思わず叫びました。

ようやく依頼が完了したのですから、報酬たんまり、寝て暮らす。をしようと思つてたみたいですね。

「理由は、聞かせてくれるよね。」

「ああ・・この聖水を持ち帰るためだ。そこには私の部落がある。」

そして明日をも知れない妹がいる。」

「大切なものをこれと引き換えにしたリューアイの顛末を見て貰いたい・・」

「ルミナの部落つて遠くなの?」

「山を2つ越えた先にある。・・・エルフの隠れ里だ。あまり、人には知らせたくないがな・・」

「リューアイはどうなの?」

構わない。トリューアイは答えます。まだ目的が見えてきませんから広く世界を知る必要があります。

「それじゃ、一旦村に帰つて明日出発ということでいいわね。」

荷物を纏めると、4人は洞窟の入口を目指し歩き出しました。

悲恋の洞窟から帰つた翌日、リューアイはサンディーの家の前にいます。

「ほら、ハンカチ持つた？忘れ物ないの・・・」

サンディーが母親のようにリューアイの持ち物を確認しますが・・まあ、問題はないと思います。なんてたつて、リューアイは改造人間食べるのも飲み物も本来必要ないですからね。

「お姉ちゃん、これあげる。」

ライムがそういつて渡してくれたキビダンゴ・・いや、爆光球のほうがありがたいと思つたりしてます。

娘3人？姦しくしていると、ルミナがやつてきました。

「準備は出来ていいか？だいたい、10日位山道を行く。人間に結構きついぞ！」

3人は改めてルミナの装備を見てみます。

皮の鎧にかわのブーツ、背中には長剣。そして、肩に担いだ小さな皮袋。

少し露出過剰なところもありますが、3人があこがれる冒険者の正装です。

今度はリューアイをサンディーとライムが見ます。

GシャツにGパン。腰につけたポーチに鉈のセット。手には身長程の木の棒、先端には金具とワッカが何個か付いてます。これは、鎌改が無くなつたので代用品を買つたみたいですね。最後に肩に斜めに背負つた布袋。

ちょっと、冒険者には見えませんね。どちらかと言うと旅人です。

「山は物騒だぞ、大丈夫か？」

ルミナの念押しです。確かに街道を歩くよつた格好ですからね。

「問題ない！」

リューアイが答えます。

「では、出かけるとじょう・・サントイすまんがちょっと借りるぞ！」

ルミナが歩き出します。リューイはライムに頑張るからね、なんて言つてましたが、急いでルミナを追いかけます。棒の金具がカシヤンカシャンと音を立てます。熊避けにはなるかも知れませんね。

「行つちやつた！」

「もう直ぐ、お母さんが帰つてくるわ。それまでにすることがいっぱいあるから・・・ライムも手伝うのよ！」

「うん！」

ルミナ達が村の十字路を曲がり見えなくなると、残念そうに家に入つていきました。

村を出て、段々畠を森に入り、トレッタ草原に向つた小道を進みます。

トレッタ草原の分岐路を山の方に向つて進むと、段々小道が小さくなり、終いには獸道のようになります。

それすら、何時しかなくなり、2人は深い森の木立を進んでいました。

2人の行く手を灌木やツタが阻みます。ルミナは長剣を抜いてエイ！、ヤツ！と、邪魔な枝等を払つて進みます。

「フウ・・疲れるな。お前がエルフなら楽なんだが・・」
なんで？って聞いてみると、エルフは枝渡りが出来るのだそうです。

リスか猿のように枝から枝へと飛びこじよつて平地を歩くように森の中を移動できるのだそうです。

「まあ、無理なことは仕方が無い。」

ルミナは再び長剣で行く手のツタを払い始めました。

(できるよ！)

(え！どうやって・・・)

(貴方の身体能力は人間の10倍。ジャンプすれば、垂直で5m

は軽いし、体重も十分の一に減らせるし・・・それに半重力場を体に形成すれば、長時間の飛行は無理でも、枝から枝に飛ぶことは簡単、簡単。)

(具体的には?)

(イメージして実行かな? 細かいところは貴方の電腦と私がサポートするから大丈夫!)

「あのさ・・さつき枝渡りって言つてたよね。ちよつと見せて貰えるかな?」

親の敵のような形相で枝を払つていたルミナに恐る恐るリューアイが聞きました。

「ああ・・そうだな。長い旅だ・・ちよつとまで、見せてやる。ルミナはそいつと長剣を背中に戻し、体制を整えます。

ひょい! とルミナが真上に飛び上りました。

リューアイの真上にある枝に降り立ちます。垂直に5m以上ジャンプします。

すると、その枝から10m程はなれた木の枝に飛び移ります。さらには次の枝に移りました。

リューアイは生体レーダーで確認すると、青い点がピョンピョンと移動しているのが解りました。

「じゃあ、俺も!」

棒を紐で背中に斜めに背負つと準備完了です。

(確か、イメージつて言つてたよな・・ようじー)

「猿飛び!」

リューアイは垂直にジャンプします。ルミナより高く、そして、他の枝にひょい! と飛びます。

生体レーダーでルミナの位置を確認すると、その方向へ枝から枝へ飛び移つて行きます。

ルミナはしづらペローン、ペローンと枝を飛んでいましたが、高

い木の梢を見つけると、ちょっと休憩することにしました。

「さて、戻るとするか・・・少し移動しそぎたな・・・」

ルミナが戻ろうとして姿勢を変えたその時です。

ルミナが立つ梢にフワリ！ つとリューアイが降り立ちました。

ビックリして足を滑らすルミナを慌ててリューアイが抱き抱えます。

「・・おま、お前は・・枝渡りができるのか？」

ビックリしたルミナはそう言つのがやっとです。

「枝渡りと似た技だよ。」って誤魔化します。

腕の中でモガモガ動いてるルミナに気が付いて、腕を開放します。赤みが差した顔でしたが、なにやらほっとした表情です。

「ちょうどいい。ここで一休みしよう！」

そう言つてルミナは梢に腰を下ろします。

リューアイも向かい合ひの形で腰を下ろすと、背中の布袋を開き、水筒の水を飲みました。

(いやー大変だったよ。今静止軌道上にGPS衛星を12個ばら撒いたから貴方の位置は常に把握できるからね。位置が特定できないと色んなバックアップできないからね。)

(GPSつて・・・)

(気にしないで、これも、船の連中の精神衛生上のためだから、あなたの手助けをしたいって連中が多くさるのよ。常に作戦スクリーンに貴方を捕らえていないと安心できないって参謀本部も言つて来るし、次はまだか? って色々な部署の輩が来るしね。)

(大変なんだね。)

(とにかくなるべく厄介ことに巻き込まれてね。)

それは、違うんじゃないかとリューアイは思いましたが、幸いにも相手には伝わらなかつたようです。

「まあ、お前が枝渡りが使えることは確かなようだ。これで、これからのお前が枝渡りが使えることは確かなようだ。これで、こ

「まだ、先なの？」

「ああ、森の半分くらいか・・・森を抜け切る所で今日は終わりだ。木の上なら獸や魔物の心配もせずに済むからな。」

じゃあ、出発するぞ！ヒルミナは枝渡りを開始します。

ピヨンピヨンとたちまちリューアイの視界から遠ざかりました。生体レーダーのスクリーンを前方に展開します。

「猿飛び！」

フュン、フワリ・・リューアイもレーダーの青い点を追いかけました。

どこか別の場所で・・・

「ほらほら、サボつてないで手を動かす。大金払つてんだからちゃんと働いてよね。」

「みんなー、お茶が入ったよー」

大工の棟梁は冷汗をかきながら弟子達の仕事を見ています。この姉妹の仕事を請け負つたのが運のつき・・普段の倍のスピードで仕事が進んでいきます。

さりにどこか別の場所で・・・

「姫、位置精度をさらに向上させるべく周回軌道上にGPS衛星を新たに3基設置したいのですが・・・」

「許す！」

「姫、新たな技を考案致しました。カプセル封印型怪獣を用いた召還魔法なのですが・・・」

「やめとけ！」

エルフの隠れ里

2人は森の梢を飛んでいきます。

ピヨン、ピヨン・・フヨン、フワリ・・

流石、エルフは森の民です。優雅に華麗に枝から枝へと移っています。

リコーアイはとこうと、慣れてはきているんですが・・少しギロチないです。

でも、イメージしたのが（カム 外伝）の忍術ですからある程度力技になるのは仕方無いのかもしません。

そんな感じで、2時間ほど森を進むと、ルミナの移動が止まりました。

リューアイが急いでルミナの所に行くと、そこは大きな木の上です。降り立つた立ち木の先は、ゴツゴツした筋肌むき出しにした山がそびえています。

へへ～って感じで感心しながらルミナのいる梢にフワリと着地します。

「今日は、ここで野宿する。木の上だ、獣の心配もない。」

そう言って、背中の袋を下ろします。

確かにこのまま行つても中途半端な場所で野宿となリそつです。早速準備です。

袋からロープを出して、幹に結ぶと梢の方に斜めにロープを張ります。それを2本。

次に、斜めに張つてあるロープと梢を互い違いに編みこみます。

「この編みこんだ間に、2つに折った布を入れて・・・ほら、この中に体を入れて休むんだ。寝相が悪くとも、編んであるから落ちる事はない。」

ルミナは、作業を解説しながら即席のベッドを作りました。

早速、リューイも隣の梢で試してみました。

中に潜り込むと、ちょっと窮屈ですが、安定します。これなら高い場所から落ちないで済みそうです。

まだ少し明るいですが、2人は早々と眠ることにしました。

チュンチュン・・

朝です。まだ日が昇るには少し早いみたいですね。朝靄に森が包まれ手います。

インスタントベッド?を置み、1つの梢に座つて2人仲良く携帯食料を齧つてます。

もう直ぐ出発です。

「岩山も森と変わらん。ただ、不安定な岩に飛び乗ると崩れるから注意しろ。出来るだけ大きな岩を選ぶんだ。」

ルミナが岩山の注意をすると、ピヨンピヨンと飛んで行き、瞬く間に見えなくなってしまいます。

森と同じように生体レーダーでルミナの方向を確認します。大分離れてしましました。

「猿跳び!」

リューイもフュン、フワリ・・と後を追いかけます。

2人は岩山を飛んで行きます。

次の日は谷を越え、森を抜け・・・

野を越え、また谷を越え・・・

岩山の窪地に身を寄せ合つて眠り、谷川で魚を取つてバーベキュー

そんなこんな旅を続けること10日目で、ルミナの隠れ里がある森に着きました。

「ここだ!この森に私の部落がある。」

ルミナは、そう言つてますがリューイには、今までの森とどうが

違うのか判りません。

「森全体が結界に包まれている。森を見ても、森に入つても、人間には気配等判るわけが無い。」

キヨロキヨロとあたりを伺うリューアイを苦笑いしながら見てます。では、行こうか、ヒルミナが手近な梢に飛び乗ろうとしたその時です。

ヒュン！、ヒュン！！

ヒルミナの足元に2本の矢が突き刺さりました。

何時の間にか近くの梢にエルフの男性が立っています。奥にもう1人。

生体レーダーには黄色の点が段々増えていきます。

ヒルミナを男が指差しました。

「・・・よくも戻つてこれたものだな！」

ヒルミナは黙っています。

「お前が祠の封印を破つたのを見ていた者がいる。・・・言い逃れることは出来ないぞ！」

生体レーダーの黄色の点は8個、目の前の2人意外に6人が森に隠れています。

「・・・この村に未練は無い！・・妹に届けたいものがあるだけだ。隠れています。

「その妹、いや！巫女姫の病も・・お前が去つた後は悪化する一方だ。いまさら・・去れ！」

「後生だ！・・・届けるだけでいいんだ・・・」

どうやら、村でなんか仕出かしたようです。村の掟にでも抵触したのかかもしれませんね。

リューアイはただ、ただ状況を見守るだけです。
その時です。

リューアイの生体レーダーに急速に接近する黄色い点が現れました。みるみる近づいてきます。

そして・・・シユタツ！とリューアイの前に白い布に身を包み、長

い髪を組紐で結んだ1人の女性のエルフが降り立ちました。

ふかぶかとリューアイ達にお辞儀をすると後ろに振り向き梢のエルフに顔を向けています。

「シェイム……」これは通してあげなさい。長老の命です。」

「ですが・・その者は撃破り、ましてや、よそ者を村に連れ帰るという失態もしさでかしてあるのですぞ!」

「それを含めてです。・・長老はルミナの弁解を聞いても良いとまで言っています。」

「しかし・・・判りました。・・・帰るぞ!..」

シェイムと呼ばれたエルフが目の前の梢から消えると、他の反応の次々と消えていきます。

「申し訳ありません。彼は、真面目すぎるのですから・・」

「ライカ。もういい。それで、長老は申し立てを聞くといったのだな?」

「はい。でも聞くとは言つても許すとは申しておりません。」

「それはかまわない。撃は撃だ。何も無かつたことには出来まい。」

「そちらの方ですが、賓客としてお招きするよう巫女姫様より承つております。」

「また!妹は・・大病で臥せつてゐるはず・・」

「今は、でも、10日前、突然祠に御出でになり、姉と伴に来るお方を泉にお連れするよう告げられました。その後は昏睡したままでです。」

「そうか・・・」

『案内します。といつエルフに従い2人は森に入つていきました。

エルフの部落は隠れ里、深い森の中になつて周囲を結界に囲まれています。

用の無いものは入れない。入らせないのが村の撃。

だから村があるのか、有るとすればどのあたりなんか外部の者に

は判りません。

そんな森をよく知るエルフの後を追つてリューイは飛んでいきます。

しばらく進むと空地が見えました。

森の中に周囲100m程度の空地があり、そこにログハウス風の家が立ち並んでいるのが見えます。

その端に森の梢から、シユタツ！と降り立ち、一番大きな家に3人は歩いていきます。

「お入りください。」

長老の家の前でエルフが言いました。
ルミナは動ぜずにドアを開けて進みます。リューイも後を着いていきます。

室内は、以外と広く、長老職のエルフが数人壁を背に両側に座っています。正面に座っているのが、大長老という事でしょう。大長老の前には炉が切つてあって、小さく炎が燃えています。

ルミナは炉の前に座ります。リューイもそれに倣いました。

周囲からは、のこと・とか、よくもおめおめと・とか小声が聞こえましたがルミナは無視しています。

ルミナが、大長老にふかぶかとお辞儀をします。あわててリューイもお辞儀をします。

「祠の封印を破り、古の地図を持ち出した罪。今更弁解の余地はありません。甘んじて受ける所存ですが、その前に一度だけ、巫女姫に合わせて頂きたく参上致しました。」

「・・・・・」

「・・・今一度、妹に合わせて頂きたく・・・」

「ルミナが生まれた時・・時の巫女姫は、こう言った。(この者はこの村には過ぎた者・・)」

「どんな意味かは判らんかった。・・・だが、地図を持ち去り、戻ったということは・・手に入れたのか?」

「はい。・・しかし、これが最後ともう一一度はないと・・」

「そうか・・確かに一度は必要無からうて・・しかし、あそこは

オークの棲家、どんなにお前が武勇に優れていようとも単独では数に飲まれるのは必定・・」

「この者達の助けを借りました。その上、彼女の大切な武器を交換品として差し出しました。」

「・・泉の精の欲しがりし宝とは、この者の武器とはの・・」

「お客人、すまんことをしてしまった。お客人の武器はもう一度と手には入らぬじやろう・・・」

「ところで、聖水は何処じゃ。」

ルミナは懐から聖水を取出しました。

小さなビンに入った聖水は、聖水自体から透き通つた青い光を発しています。

長老達は思わずその光に見入つてしましました。それほど綺麗なのです。

そんな中、大長老が手を叩きます。

お呼びですか。と先ほどのエルフが入ってきました。

「その祝福された聖水をロミナに飲ませない。」

エルフは畏まって、聖水を受け取ると部屋を出て行きます。

「今夜はこの村に泊まりなさい。お客人もご一緒に・・・沙汰は明日でよからう。」

ルミナは礼をするヒューリイを伴い家を出ました。

今夜は、古巣・・昔住んでいた家に泊まるようです。

ロードナビゲーション

チチチ・・チヨンチヨン・・
朝です。エルフの隠れ里に、二コトリはいません。
村を取り巻く深い森に住む小鳥達が一斉に騒ります。賑やかで
すからエルフの人たちは皆早起きです。
ルミナはリューアイを伴つて村の共同井戸に向います。
こんこんと湧き出る石組みの井戸から水を桶に移して顔を洗いま
す。

「軽く朝食を食べて長老に家に行くぞ！」
布でゴシゴシ顔を拭きながらリューアイに告げます。

ベッドが2つだけの小さなログハウス、それがルミナの家です。
壁に組み込まれた暖炉の火を掻き立てポットを据えつけると、火
箸の先に干し肉を刺して軽く炙ります。

「ほら、出来たぞ。」

ルミナがパンに焼きたての干し肉を挟んでリューアイに渡します。
リューアイは、お茶の準備です。

「食べながら聞いてくれ・・昨日の件でおおよその察しあついた
と思つが・・」

リューアイは頷きます。

「私の家系は古いエルフ王家の末裔だ。この村の祠の巫女として
祭祀を受け継いできた。」

「母が無くなつた時だ、村の者は当然私が後を継ぐものだと思つ
ていたが・・・妹が名乗り出た。」

「私と妹は双子だ・・・しかし、妹は、妹の目は見えないんだ・・

「

「お姉さんは世界を見てきて・・そして私におしえてね。つて・・

「

「私は、村を出た・・たまに帰つて、村や町、クエスト、珍しい食べ物・・いろんな事を妹に話した。」

「そして、今年の若草の月に、村に帰つて来たら・・・妹が重病と巫女より聞いた。」

「村に生まれ、外に出ることかなわず、まして世界を見ることもなく・・私には耐えられなかつた。あまりにも不憫でならなかつた・・」

「私は、訳もわからず駆け出した。・・・気が着いた時には・・・

祠の前にいた。」

「幼い頃の母の話を思い出した。祠には、エルフ王国の神殿の地図がある。その神殿にはどんな病も治す不思議な聖水がある・・と。

「私は・・祠の結界を壊し中についた壺の中から古い地図を見つけると村を飛び出した・・・」

「だから、私は罰を受ける。しかし、顛末だけは確認したい。それだけだ・・」

ルミナは温くなつたお茶を飲みました。

リューイはなんと言つたらよいか悩んでます。自分に兄弟がいたら・・なんて考へてるのかもしれませんね。

「ルミナ！長老が御呼びだ！」

家の外で誰かが怒鳴つてます。

「シェイムか。今行く！」

「さて、御呼びだ・・出かけよう！」

昨日のエルフに先導されて長老の家に向います。

朝早い時間ですが、村の中は賑やかです。

数人連れ立つて森に入るエルフ達の背中には弓矢が背負われています。狩に行くのかも知れませんね。

「シェイムです。連れてまいりました。」

エルフの男はそう言つて、リューアイ達を中心に入れます。

昨日と同じように、村の長老が揃っています。

リューアイ達は大長老の前に座りました。

「揃つたか・・・」

「さて、ルミナよ。 そこの客人を連れて、祠に行くがよい。」

「それと、お前の沙汰じやが・・村払いとする。祠から村に帰るに及ばず！立ち去るがよい。」

「そして、御客人・・戦士の魂とも言うべき武器を聖水の代替にして頂き、重ね重ね礼を言う。・・これを受けて欲しい・・」

大長老は後ろから長剣を一振り取出しました。

「エルフ王国健在しころ、国王がドワーフに打たせた長剣じや・・銘を（おにぎり）という。貰つてくれ・・そして孫を頼む。」

ショイムが大長老より名剣を受け取り、恭しくリューアイに捧げ渡しました。

でも、リューアイの武器って元は唯の鎌です。貰つていいのかな？
つてルミナを見ると、貰つとけと目が言つてます。

「このような名剣を私が持つても・・」

少し遠慮して見せます。日本人は謙虚さが売りですからね。

「良い良い。村においても意味が無いもの。そなたに貰われてこそ意味があるというもの。」

では・・とリューアイは受け取りました。

「さて、祠は男子禁断・・・巫女がご案内します。」

「では、参りましょう。」

何時の間にか2人の後ろに白いフードをまとった女性が立っていました。

長老の家の裏手にある小道を3人は進みます。

村には不釣合いな敷石で舗装された小道です。

うねうねとした道を歩いていくと、石造りの建物が見えてきました。

た。

「祠の巫女が住まう館です。祠はもう少し先になります。サンディーの家の2倍程の館を過ぎると、石造りの小さな祠がありました。」

「しばらくお待ちください・・・」

巫女が立ち去りました。

祠は直径1m程の泉を中心に据えて、4方に石柱を組み、その上に薄い石を敷き詰めて屋根とした簡素な造りでした。石柱には文字を書き綴った布が張り巡らされており、おそらくそれが結界となるのでしょうか。

泉の奥には石で出来た祭壇があります。古い材質不明な壺が祭られています。

村はログハウスなのにして石造りってちょっと変だな?なんて考えていた時です。

「お姉さま!」

リューイが振り返ると、そこにはもう一人のルミナが立っていました。

ルミナが駆け出し・・もう一人のルミナに抱きつきます。

「ロミナ・・直つたのか・・よかつた、よかつた。」

2人、抱き合ひながら再会を喜んでいます。
でも、すぐに、ルミナは気がつきました。

「ロミナ・・・田は・・」

ロミナの両田は包帯が巻かれていたのです。

「病は直ぐに良くなりました。・・そして私の田も・・でもありますに眩しくて・・しばらくは見ることを控えろと・・」

「そうか・・それならよかつた。」

「いいえ。良くありません。聞けばお姉さまは、このままこの村を去るとか、一度と村には戻らないとか・・」

「おねえさまの姿を見ることが出来ないなんて・・」

(リューイ。ちょっとよいか。)

(今、いいとこなんだから、手短に・・・)

(私の所の、早期警戒管制部隊がね・・今日の話を聞いてたよう
なの。・・もう、涙を滝のように流してんのよ。それで、これを贈
れつて言つて来てるんだけど・・・)

(なにを贈るの?)

(携帯通信機!・・今座標セツトしたからあと少しで着くよ。空
みてて!)

「2人とも、ちょっとといいかな?」
ルミナとロミナが振り向きます。

「なんと言つたらいいか・・とにかく、2人を哀れと思い天が贈
りものをしたいと言つていて。ほら、空から白い花が落ちてくるだ
らう。あればそうみたい。・・とつて来るね。」

リューイの言い訳じみた話の最中に、青いそらから白いパラシュ
ートが降りてくるのを見つけました。

それには及びません。と巫女がシュタッフと枝渡りで回収に行き
ます。

「お姉さまのお連様は、神託をなされるのですか?」

「いいや、ここつはリューイというただの娘さ。私より強いかも
な。」

「戦士様ですか。この度はいろいろとありがとうございました。」
ロミナは改まってリューイに丁寧にお礼を言います。

「何時までも居ると別れが辛くなる。2度と会えないかも知れな
いが幸せに暮らせよ。」

「お姉さまもお元氣で・・・」

改めて2人抱き合つてます。これで、最後ですからね。リューイ
もちょっと涙ぐんでます。

「これで良かつたのでしょうか？」

巫女さんがパラシユートを回収したみたいですね。小さな包みが結んであります。それを開けると・・・ 2つの携帯電話？と手紙が入っていました。

「なになに・・・コンパクトの蓋を開けて赤いボタンを押すと相手のコンパクトに音がなる・・・どれどれ・・・」

ルミナとロミナにコンパクトを渡して確かめてみます。

「次に、音が鳴ったほうのコンパクトについている赤いボタンを押すと音が鳴り止んで通話が出来る。その時鏡に相手の顔が映る。鏡を写したい方向に向けると相手にそれが移る・・・できた？」

「やめる時は、青いボタンを押す。そしたら消える・・・ホントだ！」

これさえあれば、遠く離れた2人が顔をあわせて話し合いつつも出来ますし、ロミナに遠くの町や村を紹介することも出来ます。

ルミナとロミナは天の神様にお礼を言いました。

船の連中もちゃんと聞いてるんでしょうね。

「これで、思い残すことは無い・・・」

「ロミナ、しあわせにな！」

「お姉さまも・・・リューイ様、姉をよろしくお願ひします。」

ルミナはシユタツ！と枝渡りで祠を去ります。もう2度と戻りません。でも、村の様子は何時でもわかります。

安心したルミナはどんどん加速して故郷を離れていきます。リューイもルミナの存在を生体レーダーで確認しながら（猿跳び）で追いかけます。

黄金の月が終わり、灰色の月も半ば近くになりました。

サンディ達が住む山の村も段々畠の収穫が終わり、出稼ぎに出でた者達が次々と帰ってきます。

サンディのお母さんは月初めに帰つてきました。若草の月に出かけてから二ヶ月ぶりです。

ただいま。つてお母さんが帰つてきた時、ライムは真っ先に走つていつてお母さんに抱きつきました。甘えんぼさんですね。でも、ライムはまだ12歳。お年頃ですから仕方ありません。その後、お帰りなさいつてちゃんと挨拶も出来ました。

「あら? サンディはどうしたの?」

お母さんの素朴な疑問です。

「お姉ちゃんはね~、大工さんのお仕事見張つてるんだよ。」

「え? ?」

何があつたのかしら。とお母さんは考えました。でも、家は小さいですけど頑丈な造りです。修理する場所など思い浮かびませんでした。

「あらーお帰りなさい。もう少し後かと思つたけど・・・」「苦労さまでした。」

サンディは町で働いているお母さんを一度見たことがあります。小さな宿屋の台所で、それは忙しく立ち回つていました。

「ところで、この家に修理するとこりつてあつたかしら?」

「何處にも無いわ。」

「だつて、大工さんが來てるんでしょう?」

「あ~・・それね。いいわ。話したげる。でも、その前に荷物を置いて来て。ライムお茶を頼むわね。」

そうです。お母さんは未だ荷物を持ったままでした。

「そう・・そんなことがあったのね。」

「そんな訳で、お母さんが帰ると、リューイの泊まるところが無くなるの。だから、納屋を改造して寝室を作ってるのよ。」

「よく判りました。ところで、何時帰つてくるの?・私もお礼を言わないとね。」

「それが・・一月ほど前のクエストで同行したエルフとエルフの故郷へ行つてゐる。もう直ぐ帰つてくると思つわ。寝室は後2日で出来上がるから、お布団も用意しなくちゃね。」

家族水入らずでお茶をのんびり飲みながらお話は続きます。だつて、半年以上合つていませんでしたから。

2日たつて、リューイの寝室が完成しました。大工の棟梁に気前よくサンディイが給金を支払います。

お母さんは、何処で稼いで来たんだろう。って思いましたが、聞くことはしませんでした。

だつて、昨日、猟師さんの家に猟師株を買いに行くと、(お前さんちには、20株を渡してくるからそれで十分だろ)って言われました。そんなにお金があるはずないのに(って考えてたら、サンディイと一緒に娘が仕留めた大猪と猟師株を交換したと教えて貰いました。だとしたら、寝室の改造費もなんとか自分達で調達したに違ありません。

「これで、お姉ちゃんが何時戻つても大丈夫だね。」

お母さんの手を握りっぱなしのライムが言いました。

「ライムはお姉ちゃんが大好きなのね。」

お母さんはそんなライムを微笑んで見てます。

「うん。だつて、強いし、綺麗だし、そんでもつて、ライムが寝る時に何時もお話してくれるんだよ。一度もライム聞いたこと無いお話だよ。」

きっと遠くから来たのね。娘達も懐いているようだし、ずっといてくれたらいんだけど・・・お母さんは、まだ見ぬリューイにそ

んな感じを持ちました。

そんな日々送っていた時です。村の中を誰かが狂ったように鐘を鳴らしながら通りすぎました。

早鐘です。

サンディイが慌てて通りに出ます。そして左右を先ず確認。・・火事では有りません。

駆け出します。そしてギルドに駆け込みます。

そこには既に、大勢の者達が集まっていました。サンディイもその中に入つて行きます。

「・・・とこんなところだ。今一度言つぞー盗賊団が村外れで目撃された。今は黄金の月が終わり、この村が一番満ち足りた時だ。やつらはそれを狙つて来たに違ひねえ。・・」

普段は奥まつた事務所にいるギルドマスターがギルドのホールにあるテーブルに載つて皆に告げています。

（こまつた。）とか、（今ここに冒険者は何人いるんだ。）とか、いろんな人が一斉に話し始めます。

「だまれ！！ とりあえず奴等が襲つてくるとすれば、今夜だ。昼にはこねえ。今から段取りを決めるからそこで大人しくしてろ。」「サイズ、カルアちょっと来い！」

集まつた中の2人を連れてマスターは事務所に入つていきました。

「おお、サンディイか。例のねえちゃんは来てねえのかい。」

「それが、エルフと一緒にエルフの里に行つてるのよ！」

「そうかあ・・残念。と獵師のおじさんが言いました。

その娘っ子つていうのは例のあれか？ そうだ・・なんか有名になつてます。

しばらくワイヤー・ガヤガヤやつてますと、マスターが2人を連れて出来ました。

「いいか、手はずを伝えるぞ！よく聞けよー！」

「村の入口は2箇所だ。南側をサイズに、北側をカルアに任せる。2人とも銀3つだ文句はあるめえ。」

「残りの銀持ちは6人だ。4人をサイズに2人はカルアだ。人選は任せる。」

「そして、残った黒は星3つ以上が14人。ここは7人づつ分ける。」

「最後に黒の星2つ以下だな。屋根に上って援護しろ。何処の屋根でもいい。」

「最後に、質問はあるか？・・よし、じゃあ準備にかかるーー！」

サンディとライムは自宅の屋根に上り、村に入ってきた盗賊団の迎撃はやらなければなりません。

でも、村人の殆どがこんな時は同じようなことをするはずですか、ある意味戦力外通知に等しいものですね。

サンディは自宅に駆け込みます。

「お母さん・・・」

お母さんは、ギルドでの話しを聞くと早速準備です。

必要なものは、夜食と水筒、魔力補給の小瓶、薬草、毒消しですね。小分けして小さなかばんに詰め込みます。

武器は、おかあさんがフライパン。サンディが杖、ライムが十字弓とボルトそれに爆光球をポケットに入れます。

家に戸締りをして、家の裏に梯子を掛けます。

水を汲んで屋根に上り、屋根に水を満遍なく掛けます。こうすれば火矢を受けても直ぐ燃え上がりませんからね。

さらに、水が入るものに全て水を入れます。

最後に通りの真ん中にかがり火を準備します。

これで準備終了です。後は、夕食を軽くとつて連絡を待つことにします。

夕暮れが訪れ、村の家々からほのかな明かりが漏れる時でした。昼間と同じように早鐘を打ち鳴らしながら誰かが走る抜けます。盗賊団の襲来です。

3人は、ゆっくりと立ち上ると、裏にある梯子を上ります。最後にお母さんが登り終えると、梯子を3人で屋根に持ち上げました。

ナナイ村の危機

屋根に梯子を持ち上げると、屋根の影に隠れて通りを覗います。幼い子供を持つ母親は早くから裏山に獵師さんに付き添われて逃げています。

通りは、シーンと静まつてます。時折、犬が吠えてますが、緊張感が伝染したかもしませんね。

待つのはイヤなものです。

お母さんは、ライムが小さい時を思い出しました。

あの時も、盗賊団の襲撃があつて、私はライムを背負つてサンデイと伴に裏山に隠れただわ。

でも、あの人は銀2つ・・門の所で盗賊と戦つて・・亡くなつたのよ。

今回は、何事も無いといいんだけど・・・

突然村の門の方が明るくなりました。

門の方を見ると、空から炎が降つてきます。

火矢です。盗賊団の襲撃が始まったのです。ワアー！…という声が聞こえきます。

また、火矢が空を彩ります。

「盗賊団はね。部隊を3つに分けてるんだよ。新しい連中は、切り込み隊で、中堅が弓を使い、古株は最後の略奪をするのよ。切り込み部隊は消耗品なの。彼らやられてても盗賊団に入りたい者を切り込みに使つから。そして、見所のあるものを中堅、古株と変えていくのよ。」

「じゃあ、後になればなるほど強くなるの？」

「そうね。そうなるわね。」

門の方の戦いが激しくなつてきました。ワアー！…という声に混じつて、ガシャガシャっという鎧や武器のぶつかり合つ音が大

きくなっています。

サンディは杖を握り直しました。ライムは十字弓を引き絞つてボルトを装着します。

「一人行つたぞー！！」

十字路にある民家の屋根から叫び声が上がります。

サンディが通りを見ると盗賊団の男が大きな斧を持つて走っています。

サンディの向かいの家の屋根から火炎弾が発射され、男に当たります。大きな火柱が上がり、その場に男は倒れました。。

サンディは小さな火炎弾を作ると、家の前の松明を燃やします。それを合図にあちこちの松明が燃え上がります。

これで、しばらく通りを明るく照らすことができます。

「今度は、2人だー！」

また、門を越えた盗賊が走ってきます。

サンディが火炎弾を発射します。ライムはボルトを発射しました。盗賊はそれを身を捩つて避けると、短剣をサンディ達に投げつけます。

カキン！とお母さんがフライパンで弾き返します。

サンディが継ぎの火炎弾を発射しようとしてる間に、周囲の家の屋根から火炎弾やボルト、矢等が次々に盗賊に飛んでいきます。たちまち盗賊はその場に斃れることになりました。

「火矢が来るぞー！」

その声に空を見上げると、火の玉のように一団となつた火矢が飛んできます。

火矢はサンディ達の屋根にも突き刺さりましたが、お母さんが水に浸したボロ布を棒の先につけた道具でパタパタと消していきます。さらに次の火矢がとんできます。ライムも手伝つてパタパタやつ

てます。

でも、上手く消すことが出来なかつた家もあるよつで、離れたところで火の手が上がりましたが、この状態ではどうしようもありません。

どんどん火矢が打ち込まれます。3人は懸命にパタパタを繰り返します。

「火矢が近づいたつてことは、中堅の連中がいよいよ出番つてことよね。」

「そう。これからが本番よ。絶対に躊躇しないでね。相手は人の形をした魔物つて考えればいいわ。」

「ライム、頑張るよ！」

3人が決心を固めたその時です。

「破られた！！！・来るぞーーー！」

そう告げた男の人の体に次々と矢が突き立ちます。

ワアーーー！という大声をあげて十数人の盗賊が道を走りながら手当たり次第に物を壊していきます。

十字路に近い家のドアを斧で叩き壊し始めました。周囲の屋根からたちまち矢が飛んで行きます。

「絶対に当たる距離まで待ちなさい！」

十字弓でボルトを撃とうとしたライムに注意します。

家のドアを破る音が近づきます。

パシュー！つと音がしたかと思つてドアを破つて行った男のわき腹にボルトが突き刺さります。

サンディイが振り返るとライムが真つ青な顔をしてます。

「ありがと。私もがんばるからね。」

サンディイが励ますとライムは小さく返事をし、十字弓に次のボルトを装着します。

次の一团がやってきました。

今度はサンディも火炎弾を立て続けに発射します。ライムの十字弓は狙いは確かなのですが、連射する」とは出来ません。一人づつ確実にがモットウです。

お母さんはそんな2人を見守ることしか出来ません。だつて、武器はフライパンですからね。でも、屋根に盗賊が上がってきたら、これでパカンってやつつけるつもりです。

サンディ達や周囲の家々の屋根からの猛射により盗賊はサンディの家の数件手前までしか来る事が出来ません。

でも、盗賊達はこれも作戦の内なのです。

何回か決死隊を投入することで、サンディ達が疲れるのを、魔力が尽きるのを、矢やボルトが尽きるのを待っているのです。

門からの声や、剣戟の音が小さくなっています。

銀板を持つ冒険者の技量は半端ではありませんが、人間です。疲れもします。・・やはり防ぎ切れないのでしょうか。

こんな時に居ないなんて・・・リューイをちょっと憎めしくなり涙を堪えるために上を向きました。

「え！・・・

空から何かが降つてきます。

たしか、屋根に上がった時は星空だったよねえー。なんて考えてます。

空から降つてきたもの・・流星のように一直線に村の外に落ちていきます。

プシュ、プシュっと短い断続音がします。

ほんの一瞬でしたが、確かに流星が落ちてきました。そして、流星は盗賊団の上に降り注いだのです。

(姫様～～これ以上高度を維持できません。落ちますよ～！)

(それを何とかするのが操船部門でしょうが・・・それでもプロなの！)

(近接防衛用ガトリングレイザー発射！！）

(回頭いそげ！！)

(左舷ガトリングレイザー発射準備よし！・・テツ！！)

(姫様ほんとにやばいですよ～！半重力機関がレッドゾーンです！！）

(それじゃあ、軌道位置にシフト移行・・開始！）

姫の後ろで成り行きを見守っていた將軍は冷や汗をかいてます。

(姫、この船で成層圏まで降下するのは、関心しませんが・・・半径2Kmの大型船ですぞ。)

(しうがないでしょ。リューイから緊急依頼がきたんだから・・・)

(まあ！衛星軌道シフト完了したら宴会よ！！）

(そうだ！今日は俺達が主役だ！海兵隊だけにいい思いはさせないぞ！！）

(（（オオー！！！）））

確かに士気は上がってるんですが・・・

星の屑

リューアイ達は野を越え、山を越え、ナナイ村を目指して走ります。ピヨン、ピヨン・・フヨン、フワリ・・走ると言うより飛んでるんですが・・・

最後の岩山を越え、森を抜ける時には夜を迎えていました。このまま村に帰るか、それとも森で一夜を明かすか悩みながら村を眺めた時です。

大きな火の塊が村に向って飛んで行きました。

「盗賊共の襲撃だ！行くぞ！！」

ルミナがそれを見て叫びます。そして、段々烟を駆け下ります。慌ててリューアイも追いかけます。

村の手前まで来ると、盗賊団が手勢を3つに分けて陣取っています。

先頭の集団は村の門辺りで激しい戦闘をしているようですが、まだ村には入り込めないようです。村から100m程度の所にいる集団は、盛んに火矢を村に放っているようですが、まだ村に火の手は上がつていません。時間の問題かも知れませんが・・・

最後の集団は人数は少ないですけれども・・酒盛りしてます。

「リューアイ、良く見る。あれは、盗賊の襲撃の仕方だ。新入りは一番危険な前衛。それに何度か生き残ったものが中衛で、火矢を担当。最後の連中は古株だ。最後の略奪だけ参加する。しかし、前衛、中衛を生き残った連中だ。銀3つの実力以上だぞ！・・さて、どうする？」

リューアイは考えます。

リューアイの身体能力とターボ加速を使えば、ある程度の敵は倒せ

るかも知れません。

でも、ルミナは銀3つ以上の連中が大勢いると言っています。打ちもらしたものが村に逃げ込んだりしたら大惨事になります。それにルミナは銀の星一つ、実力差が有りすぎます。

(姫!いいかな。頼みたいことがあるんだー!)

(な)に?・あらら、大変なことになつてるね。)

(この前、狭い範囲の全体攻撃があるつて言つてたよね。あれを、盗賊団の後ろの奴らに出来るかな?)

(星の屑ね。出来るわよ・・ちょっと間が開くけどその辺は臨機応変にね。)

(では・・星の屑よろしくー)

(OK!—)

「後ろの連中は何とかする。ルミナはサンティ達をお願い!」

ルミナの返事も聞かずリューアイはおもむろに立ち上がり、天辺にわつかがついた杖を構えて走り出します。

ルミナはリューアイの後ろ姿に頷いて村の門に向つて走り出した。

(ターボー!)

リューアイは加速して走ります。走つて、盗賊の中衛と後衛の中間にやや離れて急停止。

急に姿現したリューアイに盗賊達はビックリしましたが、姿は十代の女の子です。とりあえず逃げ出さない内に確保しようと。つてな感じで数人が近寄ってきます。

リューアイは叫びます。

「この村を助けるために!」

「この村を守るために!」

「ナナイよ！ 私は、帰つて來たぞ！！」

リューアイは両手を天に大きく伸ばして大きな声で叫びます。

「我願う・・星の屑！！」

リューアイの叫びになんじや？つてな感じで盗賊が見てますが・。その中の一人が星空を指差します。

その時！

大空から沢山の光線が断続的に降り注ぎます。まるで流星が盗賊団に向つてきました。

最初の一撃はほんの数秒に満たない時間でしたが、ちょっと間を置いて再び流星が降りそそぎます。

（作戦終了！あとはよろしく…）

姫からの連絡です。

どんな方法で実行したかは不明でしたが、その威力は甚大です。まだ動ける盗賊が居るのを見たリューアイは、討伐するため駆け出しました。

ルミナは流星雨を門の戦闘の真っ最中に見ました。

リューアイが判らないことを大声で叫んだ途端の出来事です。

門に到着すると、門の中の冒険者と連携してたちどころに3人程倒しましたが、前衛は必死に向つてきます。ルミナはたちまち防戦する側になりました。

そんな時です。

「あれは何だ！」

その場にそぐわない叫びに皆が後ろを振り返ると、流星が雨のように盗賊団の後衛が居るあたりに落ちてきます。

それを見た盗賊達に動搖が走り、戦闘は一気に逆転します。

「ルミナじゃないか！遅かつたな。それより今のを見たか？」
門を守っていた、サイズがルミナを見つけて声を掛けます。

「あれは、リューアイの技だ。今後衛の方に行つて。何とかしてくれ！あいつは・・黒三つだ！！」

「判つた。ここは、頼むぞ！」

サイズは、後衛に向つて走り出しました。

サイズは走ります。

後衛は盗賊達の古株。その実力は銀3つ以上と言われています。そんな連中の所に、黒3つが挑んだとしても翻り殺しにされるのは火を見るより明らかです。

中衛の盗賊が立ちはだかるのを一撃で葬りつつ走つていきます。そして、ようやく後衛まで辿り着いた彼が見たものは衝撃的なものでした。

リューアイは杖の中ほどを両手に持ち斜めに構えます。

太つた盗賊は、大きな両刃の斧を片手で肩の上に構えています。

リューアイが杖を回しながら、胴を撃とつとすると、盗賊は簡単に斧でその一撃を払います。

払われた杖を体とともに回転させ次の攻撃に出ました。

今度は、斧で杖の中間を打たれリューアイは杖を落としてしまいます。

盗賊はニヤリと笑うとリューアイに斧を振り下ろしました。

しかし・・リューアイは素早く片足を下げ半身の体制で斧の一撃を避けました。

と、同時に腰の鉈改を素早く抜くと、斧を持つ腕に振り下ろします。

ズバツ！と鈍い音がして、盗賊の片腕が切断されます。

切断された腕を慌てて押さえた盗賊の腹に回し蹴りを叩き込みました。

太つた盗賊ですが、リューアイの一撃で体をくの字にしながら水平に飛ばされます。

鉈改を腰に戻して、杖を拾います。

村に向おうとして、こちらを見ている男に気が付きました。

杖を構えます。

すると、男が慌てて手を振ります。

「お前が、リューイか？」

「そうだけど・・・」

「ルミナに頼まれたんだが・・・必要なかったみたいだな。まだ、

門は戦闘が続いている。まだ戦えるか？」

それを聞いたリューイは村に駆け出します。サイズも慌てて後を追いかけます。

盗賊団壊滅

リューアイは、盗賊の後衛を討伐しましたが、村の門付近はまだ戦闘が続いています。

段々畠の続く道を駆け抜けます。
サイズが後に続きますが・・なにせ、門から走ってきて再び駆け上るのです。幾ら若いといつてもキツイことは確かですから、段々と離れてしまいました。

門の付近は、喧騒と剣戟の音が入り乱れています。
盗賊の後衛は消えましたが、中衛の連中が混じったことにより門の防衛は難しくなっています。

数人、十人の単位で村の中に入り込まれてしまいます。

村の一部に火の手も上がっています。

そんな中にルミナは盗賊を相手に剣を振るいます。

「ヤア！」

叫びと伴に振り下ろした長剣に盗賊がまた一人倒されました。
次の盗賊に向うルミナの長剣は刃こぼれでボロボロです。だつて、
盗賊達は両刃の斧を使いますし、皮鎧は一部に金属板が使われてま
す。はつきり言ってルミナ達よりも装備が良いんです。

「ダア！」

横薙ぎに振るつた長剣は盗賊の胸に食い込みます。

「ギヤアー・・！」

盗賊は叫び声をあげて斃れます。

バキ！

嫌な音がしました。

ルミナの長剣が根元から折れます。長剣の先は・・斃れた盗賊の片腹に食込んだまででした。

剣が無ければ戦えません。いい獲物です。

倒した盗賊に駆け寄り彼の持つ両刃斧を取り上げようとした時です。

「ルミナ！・・・これを使え！！」

リューアイの声です。

声の方を向くと布で来るんだ物が飛んできます。

受取つて・・中を見て・・ビックリしました。

だって、そこにあるものは・・エルフの宝物「オニギリ」です。でも、今は戦闘中。すかさず装備すると戦いに身を投じます。それまで使っていた長剣よりも少し短いですが、バランス、重さとも申し分ありません。

「やア！」

袈裟懸けに切り下ろしたオニギリは鎧まで断ち切りました。

いまは亡きエルフ王国の伝説となるほど長剣です。今までの長剣とは切れ味が全く違います。斬りたいと思つものが切れるのです。

「大丈夫？」

リューアイが心配そうに声を掛けます。

「ああ・・ところで、これは返すぞ！」

ルミナがオニギリを鞘に入れてリューアイに渡そうとしました。

「それは、ルミナが使って！・・俺には剣が使えないし・・もともとルミナの村のもんだし・・・」

「しかし、これはお前の武器の代わりじゃないか。」

「そう言ってたよね。だから、僕の好きに使っていいわけだし・・あげるよ。」

たしかにそうかも知れません。リューアイが貰つたものですから、どう使おうとリューアイの自由です。

「ありがたく頂くことにする・・・」

いいのかな？って感じでしたが、オニギリは名剣です。このままではリューアイが誰に渡すか判らないと思い、ありがたく頂戴することにしました。

「ここは、任せていいかな？サンディ達が心配だ。」

確かにそうです。結構な数の盗賊達が村に入っています。

「早く行け！」

その言葉を聴くが早いカリューアは村の中に飛び込みました。

「お姉ちゃん・・助けてよお～」

ライムが通りに座り込んで助けを求めています。

盗賊の一人がはなつた矢を避けた時にバランスを崩して屋根から落ちたみたいです。

幸い、オシリを打つたぐらいで怪我はありませんでしたが、今は非常時です。通りは一番危険なのです。

直ぐに救助作戦が開始されます。お母さんはフワリと屋根を降りるとライムを抱えます。身近な屋根に上るうと見渡した時、盗賊の一人と目が合つてしましました。

「Wオー！」

雄たけびを上げながら走りよる盗賊に、サンディは必死に火炎弾を放ちますが、気が動転しているため中々当たりません。

「オオリヤア！！」

叫び声と共に振り上げた両刃斧を見て、お母さんはライムに覆いかぶさりました。

・・でも、何時までたつても体を分断されるような痛みが襲つてきません・・

怪訝な顔をしながら振り向くと、盗賊のお腹から棒が斜めに突き出しています。盗賊は事切れていましたが、棒が支えになつているのか倒れることが出来ないでいるみたいです。若者が十字路の方から走ってきます。

「大丈夫だつた？」

若者が助け起こしてくれました。

ライムが若者を見て抱き付きます。涙目上目使いは反則です。

「お姉ちゃん・・ライム怖かつたよーーー！」

「もう大丈夫だぞ！・・・ルミナも門の方で頑張つてゐし、もう少しの我慢だよ。」

リューイはそう言つなりお母さんとライムを小脇に抱えてシユタツー！と屋根に飛び移ります。

そこには、涙で顔をクシャクシャにしたサンディがいました。

「遅かつたじやないのよおー。」

『ご免』『免と謝りながら、2人をサンディに引き渡すと通り飛び降ります。

盗賊から杖を引き抜くと通りの真ん中で仁王立ちになりました。かつこいいわね。つてサンディが見とれていると、お母さんが近寄ります。

「あれで・・・女の子なの？ 確かに、体形は女の子だけど・・・

「そうだよ。ラスカル様みたいでカッコいいんだよ。」

強いとは聞いてたけど・・・桁違ひの強さね。それに、優しい心の持ち主だわ。

この娘達と何時までもいてくれたら、心強いのだけど・・・

また、盗賊達が通りに走りこんで来ました。

サンディ達は屋根の上から迎撃します。

そして、よれよれになつたところを、リューイが杖でバシ！っとやるとそれでいちこりです。

門の方の喧騒が小さくなつてきました。

先ほどの盗賊達を最後に通りに走りこんで来る者はおりません。やがて、門の方から一段と高い勝どきの声が上がります。サンディ達3人はほつとして屋根の上に座り込みました。勝つたみたいです。何とか乗り切つたみたいです。

リューイは屋根の3人に待つて！と声を掛けると、通りを門の

方に走つて行きます。だつて、門にはルミナが盗賊と戦つていたんですね。

一夜明けて

盗賊団の襲撃は取り合えず何とかなりました。・・・って言つが、はつきり言つて、殲滅です。

でも、むらの被害はゼロではありません。
家も何件か燃えてますし・・死んだ人もいるのです。

村の一番の激戦区である、南門にリューアイは走つて行きます。
途中参加とは言え、ルミナがそこで戦つていたんですからね。

「あら～リューアイ君。今頃どうしたの。」

服のあつちこつちに返り血を付けたルミナが走りこんできたりューアイに絡み付きました。

正直言つて、お酒臭いです。

南門を守つっていた人たちの犠牲はそれなりにあつたみたいですが、一段落付いた今は誰が持ち込んだのか皆で酒盛りの最中でした。
そばには、十数人の盗賊が縄で蓑虫みたいになつてます。
かなわないと見て降参したみたいですが、酔つ払つた冒険者につけんつんされて呻いてます。

「おおー、お前か。・・しかし大したヤツだなー。」

「お前ら！こいつだー。盗賊の頭を討ち取つたヤツは！！」

サイズが酔つ払いに言つと一斉に（ウオーー）と声が上がりました。

「飲め！」

マスターが大きなカップでお酒をリューアイに渡します。
クンクン匂いを嗅ぐと・・・アルコールたっぷり、悪酔いしそうですが、周囲の人たちに囁き立てられ・・・「クリーと飲み干しました。

エライ！って一斉に声が上がります。拍手もしてくれます。
何時までも此処にいるととんでもないことになるかも！と思い、

ルミナを小脇に確保すると戦略的撤退を図ります。

まあ・・早い話が、逃げ出しました。

明日ギルドに来いよーって誰かが言つてますけど、下手に返事なんかしたら大変です。

一旦散にサンディの家に走ります。

「リューイさんありがとう。もうだめかと思つたわ。」

サンディの家に着くと戸口にお母さんが待つていました。
そんな事無いです。つて謙遜するリューイを中にいれると、すか

わずライムがお茶を運びます。

リューイから開放されたルミナは椅子に座るとテーブルにバタン
です。

「わたしは・・酔つてなんかいないぞ〜」

つて言つてますけど、これは酔つてる人が言つ言葉です。

「私達リューイのお部屋を造つといたんだよ。」

「エッ！』

ライムの思わぬサプライズにリューイは吃驚しました。

でも、リューイはずつとお母さんの部屋に泊まつてしましましたから、
今日からは宿屋泊まりだな。つて思つていたんです。

「今日は遅いからお休みなさい。」

でも！つと傍らのルミナを見ます。

「それなら、大丈夫。ちゃんと2人が泊まれるようにベッドは2
つ置いてあるから！」

サンディのありがたい言葉です。

ヨツコイシヨー・つとルミナを持ち上げます。

「ひっちょー。』

サンディの後を着いていきます。

「今日は・・ダメかな？」

「なにが、ダメなの？」

「お姉ちゃんのお話・・』

「おかあさんが話してあげる！」

「ワイ! つて喜んでいるライムは、お年頃の12歳で赤い靴のメンバーです。

次の朝、と言つても昼に近い状態です。村中が寝坊した状態ですがこれは仕方ありません。昨夜あんなことがあつたんですからね。リューイ達は4人揃つてギルドに向います。

ギルドのホールにはもう人が一杯です。

ガヤガヤと煩い状態ですがギルドマスターと連れの騎士が登場すると、急に静かになりました。

マスターがテーブルに飛び乗りました。

「おめえら、良く眠れたかー？」

「「「オオー」」

「昨夜は大変だったが、村に大きな被害は無かつた。そして、盜賊団は壊滅できた!!」

「「「オオー」」

「ここに居る騎士は盗賊団の討伐を国王より受けた騎士団の代表だ。彼らからの感謝と礼金をたっぷり頂戴した。」

「「「オオー」」

「そこで、謝礼の分配だが・・・昨夜の騒ぎで、死んだヤツもいる。怪我したヤツもいる。村の家も何軒か焼かれている・・・そこだ。これらの費用を差し引いて、平等に分配するが文句のあるヤツはいるか?」

マスターは周囲を見渡しましたが誰も文句をいう人はいません。

「じゃあ、一人銀貨一枚になる。足りない分はギルドから補助しよう。」

「それと、昨夜の戦闘でレベルが上がったヤツもいるだろう。力ウンターで確認しながら受取るんだ。いいな!!」

「「「オオー」」

一斉にカウンターに並びます。

お姉さんが一人づつ箱に手を入れさせてレベルの確認をしていきます。

上がった！とか同じだ・・とか声がします。終わった人は別のお姉さんから報酬を受取ると帰っていきます。

リューイ達の番になりました。

サンディーとライムは共に黒の星3つに上がりました。

ルミナも銀の星2つです。

ところが、リューイは・・・銀の星3つに一気に上がったのです。周囲が騒然としましたが、サイズの一言（こいつが頭をやつつけた・・）を思い出して、それだけの実力があるのか・・なんて自己完結してます。

「お姉ちゃん、強いもんね！」

ライムの言葉に頭を搔いてます。

報酬を受取り帰ろうとしたところを騎士の一人に呼び止められました。

「これをお前に進呈する。」

騎士は一振りの長剣を差し出しました。

「おれは、剣を使えないんで・・・お気持ちはだけ受取ります。」

騎士はしばらく悩んでましたが、代案を提示することにしました。

「では、此処でお前が使える武器の代金を我々が負担することにしよう。マスターにその旨伝え置く。」

それならば、とありがたく受取ることにしました。

早速武器屋に出かけます。

でも、リューイには、剣は使ったことがありません。さて、どうしようかと悩みましたが、今持てる杖は振り回したり、殴ったりと結構使いでが良いことに気が付き、杖を作つて貰うことになりました。

木の棒ではなく、鋼の棒です。棒の上には、飾りを付けて其処に

4個の鉄のわつかを入れます。杖を付くと、チャリンッて良い音がするんですよ。

リューイは昔見た山伏が持つてた杖を頭に描いて、注文をつけます。

あの杖を悪者に向つてエイッヤッ！つて構えたらちょっとカッコ良いな。って思つたりしてゐみたいですね。

武器屋から帰る道では、盗賊達の亡骸を投降した盗賊達が台車に乗せています。

傍には冒険者と騎士が目を光らせて彼らの監視をしていました。別の台車では盗賊達の武器や鎧を回収しています。

「盗賊の亡骸は川沿の広場で荼毘にするの。墓は作らずその場に埋めるのよ。回収した金属は村の物になるんだけど・・多分、町に売りに行くはずよ。」

サンディイが彼らの仕事を見ながら説明してくれました。

「投降した盗賊はどうなるの？」

「それは、罪状次第だ。盗賊行為を1回すれば、鉱山で5年の重労働。2回で10年。3回以上は死ぬまでだ。」

ルミナが答えてくれます。

獵師さんの依頼（1）

サンディイ達が家に戻ると直ぐに毎食の時間です。

お母さんが簡単な料理を作つて待つてました。

（「れ！パスタに似てる。）ってリューイは思いましたが、意外と小麦が取れるところでは、同じようなものが食べられているかも知れませんね。

「皆に、報告があるので。」

えつ何々？って感じでパスタを頬張るのがちょっと止まります。

「ええーとね。お母さん、この村の食堂で働くことにしたから…

」

サンディイとライムは吃驚します。

「銀色の月が終わつても町に行かなくてもいいの？…ずっとライムと居られるの？」

ライムはそう言つてお母さんに抱き付きます。

何時も家の事をキチンとしていますけど…やはりお母さんと一緒に良いに決まつてます。

「でも、良く仕事があつたわね。」

サンディイは現実的です。やはり気になりますよね。

「なんでも、村から遠くないところに洞窟が見つかつたそつよ。

オークばかりらしいけど、冒険者の初心者向けにちょうどこいつで、村を訪ねる人が多いらしいの。」

（（（悲恋の洞窟だ！）））

最深部の神殿は崩れで埋まつてしましましたが、洞窟自体は残すつて泉の精も言つてました。

初心者用の洞窟として有名になつたみたいですね。でも、オークが集団で出てきたらどうするつもりなんだようか。

そこは、あまり気にしないことにしました。だって、泉の精はもうござませんし、赤い靴が一度と行くことは無いと考えたからです。

「何時までも続くと良いわね。」

お母さんに甘えるライムを見てサンティが優しく微笑んでます。

リューアイ達の部屋を作ったために、悲恋の洞窟での報酬は余り残つていませんが、盗賊の討伐で赤い靴は銀貨4枚を手に入れました。でも、銀色の月を過ぎには少し足りません。少し家族？が増えましたからね。

何と言つても、ナナイ村は山村です。銀色の月は、その名の通り深い雪に包れます。そうなつては、狩りもギルドの依頼もすることができません。

冬越しの仕事をするならいまの内です。

そんな訳で、早速次の依頼を探すことにしてました。

早速、次の日、朝早くからギルドに4人で出かけます。でも、その前にちよつとより道して、リューアイの武器を取りにいきます。

武器屋はギルドの隣です。昨日頼んだ時に、明日には出来ると言つていました。

「おはようござります。・・・頼んだものは出来てますか？」

「おお、出来取るわ。これで良いのか？随分と重いものになつたるが・・・」

ドワーフのおじいさんが壁に立て掛けてある金属棒を指差します。

「これね！・・・重いい・・・」

ライムが棒を持つてみましたが、ビクともしません。

「そんなに重いのか？」

ルミナが持つてみます。片手では無理・・両手でようやく持ち上げました。

そんなに重くなつたのかな？と少し心配意しましたが、リューアイ

が持つと片手で楽にもつことが出来ます。

グルグルと回してみましたが、大丈夫です。

「どうもありがとう。いい出来だよ！」

棒を杖のように床に付くと、上に付いてるわつかがチャリンとなりました。

武器を受取り、今度こそギルドに出かけます。って言つても、隣ですけど・・

ギルドに入ると、何時もと違つて数人の冒険者が依頼用の板に張られた依頼書を眺めています。色々と決めかねているようですね。サンディ達が近づくのを見た冒険者が声を掛けます。

「ヨオー！ 確か・・リューイとか言つたな。俺達のパーティに入らないか？ 俺達は皆銀だ。ここで稼いで、来年は王都に行く。どうだ。付いて来ないか？」

「リューイは赤い靴のメンバーなの！ 変な勧誘しないでね！！」

サンディがピシャリと言いました。

サンディの剣幕に男達はスゴスゴ引き下がります。そして、再び依頼の検討です。

サンディ達も依頼書を見て回ります。

なるほど、男達が悩むのも無理ありません。

薬草探しと獣の討伐だけしかありません。薬草は報酬が安すぎますし・・・獣は熊や狼ばかりです。ルミナやリューイだけなら可能でしょうが、サンディやライムには荷が重過ぎます。

ここは、地道に薬草かなあ・・なんて考えているサンディの前に新しい依頼書が張り出されました。

「えっと・・獲物の番求む！・・山で狩猟の獲物を獣に取られな
いように番をして欲しい。期間は5日、報酬は銀貨5枚とハム5本。

サンディは張り紙を剥がすと受付のお姉さんのところに持つて行

「

きます。

「ああ、これですね。詳しくは猟師さんに聞いてください。」

猟師さんの家に行くと数人の猟師さんが猟の準備をしています。弓矢の弦を張り替えたり、矢じりを研いだり、罠のバネに油を差したり大忙しです。

「あのおー・・・獲物の番の依頼を受けたんですが・・・
サンディがそう言つと猟師さん全員にギロツつて睨まれてしましました。

タジタジでどうしようかな?って考えていると一人の猟師さんが奥から出てきました。

「こらあ、脅かしてどうするんだ!・・すまないね。・・お前達この間の娘つ子かあ?」

「はい。獲物の番の依頼を受けました。」

「すまねえ・・明日から狩りなんで若いやつら氣が立つてるんだ。お前達なら問題ねえ。お前ら、こいつらだぞ。あの大猪を狩ったのは!」

どうやらこの間の猟師さんは猟師達の頭領だつたようです。

その言葉に、全員の顔つきが変わります・・サンディ達をジックリと眺め、嘘だらう?って顔で見てます。

「明日の早朝、夜明けと共に山に向う。5日間の間、俺達は狩りをする。その獲物は一箇所に集めておいて、次々に狩りをする。お前達はその獲物の番をすることだ。匂いに釣られて肉食の狼等が繰るかも知れんからそのつもりで準備しな。それと、山に4泊するからその準備もな。」

「判りました。明日の朝、ここに集合で良いですね?」

「それじゃあ、よろしく頼む!」

家に戻ると早速準備です。

冒険者の食事は自前が原則ですから、4人分が5日分。それと飲

料水です。料理に使う鍋と食器も必要です。

着替えも1式用意し、毛布も4枚持つていきます。それに魔力補

給の小瓶を4本、薬草と毒消しも準備します。

こんなものか・・とテーブルにそれらを並べ、4人に分配します。ライムは大きなリュックに入るだけ入れて、残りを3人が布の力バンに詰め込みます。後は武器を持つだけですが、リューアイはサンディに背中に背負う大きな籠を持たされました。途中で薪を入れるんだそうです。

獵師さんの依頼（2）

次の日の朝早く、まだ星が出てる内に4人は家を出ます。出かける時にお母さんが早く帰るんですよ。って言つてましたけど、まるでピクニックに行くような雰囲気です。

先頭のルミナは皮の鎧にオーギリを背負つて布のカバンを肩に掛けています。

次のサンディーは、普通の町娘の服装で、魔法の杖を持ち、肩には布カバン。

ライムも服装はサンディーと同じで大きなリュックを背負つてます。リュックには十字弓を乗せてます。リュックは重量軽減率百分の一ですから、重くはありません。

最後のリューイは、GシャツとGパン。腰に鉈改と腰に小さなバッケ。そして、鋼の杖です。今回はさらに、籠を背負つてます。

獵師さんの家に着くと、家の周りが騒音で溢れています。漁師さんと漁師さんの荷物を運ぶ沢山の人でいっぱいです。そして、皆それからつてに話してますから、騒々しつたらあります。よく近所から苦情が来ないものです。

「オメエらー! 静まれ!!」

頭領の一喝で、一瞬に喧騒がシーンと静かになりました。

「準備は出来たか!!!」

「「「オオー」」

「よし、出発だー!、獵師、荷駄、冒険者の順だ。いいなー!」

ぞうぞうと獵師さんの家を離れ村の門に行列を作つて出かけました。

一列に並んで、段々畑を通り、森に入り、山に向います。

ルミナと一緒にルミナの故郷へ行つた時にも森を通つたんですが、途中から道を変えていました。

獣道を通つているようです。そこは、灌木も、ツタも少なく歩きやすい道でした。

森を抜けると、岩山です。

大きな岩の陰で、皆で昼食を取ります。リューイが岩の上に上つて周りを見ると下の方に村が見えました。

岩山を少し登ると、また森が広がります。ここが目的地でした。大きな岩が小さな岩に張り出して屋根のようになっています。村人は荷物を其処に纏めて帰つて行きます。そして、5日後に獲物を運ぶためにまた戻つて繰るのだそうです。

「今日から5日、ここで獲物の番だ。まあ、今日は獵がねえから、実のところは明日からだな。ゆっくり休むのも仕事の内さ。」

頭領の言葉に従い、荷物の傍に赤い靴の基地・・寝る場所を確保します。

獵師さん達は厳つい男達ですので、基地の傍に小さな焚き火を作り早めの夕食です。

「お姉ちゃん・・お話して！」

ライムのおねだりにじょうがないなあつていいながら昔話を始めます。

リューイの昔話は、サンディやルミナでさえきいたこともありません。3人とも真剣な面持ちで聞いています。

次の日の朝早く、獵師さん達は5人づつ、2組に分かれて狩りをするみたいです。

「じゃあ、俺達は行つてくるが、食料の番を頼む。それと、獲物が取れる度に一旦戻るから、その時に一服出来るよう、湯を沸かしておいてくれ。じゃあな！」

そんなことを言いながら、沢山の薪を抱いで森に入つていきました。

食料を入れた荷物は岩棚の奥のほうに押し込んであります。

取り合えずは、焚き火用の薪の確保と水の補給ですが、薪は昨日ここに来るまでにリューイ背負い籠一杯に集めてきました。

ルミナのもう少し確保すべきだ！との意見で、再度リューイが籠を背負つて出かけて行きました。ついでに谷まで降りて水を確保するつもりです。

サンディ達も仕事です。先ずは焚き火の番、これはサンディが担当です。ルミナとライムは周囲に簡単な杭を打ち、杭と杭の間に糸を張り巡らせます。其処に鈴を所々に付けると、立派な警報装置になります。獵師さんが引っ掛けられないように所々に赤いリボンを結びました。

サンディは、焚き火の周囲を周りから石を運んで炉のように組んでいきます。

次に、膝ぐらいまで石を積み、横に棒を渡してポットを載せてお湯を沸かします。これで、獵師さんが何時戻つてきても大丈夫です。

こんなものかな？つてサンディが周りを見渡していると山のような薪を背負つて両手に水桶をぶら下げたリューイが戻つてきました。「苦労様。つて言いながらサンディが水桶を受取ります。

リューイは全く疲れていなかつたんですが、ライムに指示された席に座ります。席と言つても手ごろな石の上に畳んだ毛布を置いただけなんですけどね。

焚き火の岩棚側に4人が座り、外側はリューイとルミナです。

ポットを焼き火に移動して、大鍋に適当に野菜とお肉そして塩とハーブと水を入れます。炉にかけてしばらくすればスープの出来上がり！ですね。

昼過ぎに獵師さんが2人獲物を抱いでやってきました。鹿のよう

ですが頭がありません。

大まかな解体と血抜きはすんていふとの事で、岩棚の隣にある窓に入りました。獲物の上に枝を渡して、葉の多い枝をかけて置きます。こうすれば日に当たりませんし、夜露に濡れることもありません。

せん。

後は、よろしく。つて少量を手に出かける猟師にスープを勧めます。

こりゃいい。あつたまるーつてよろこんでお椀からスープをかきこみます。

猟師さんが帰つてしまふと別のチームの猟師さんが獲物を持ち込みます。

やはり、獲物の解体等は終わつていて前のチームの獲物の上に重ねます。

猟師さんによると今年は獲物が多いとのことです。

でも、こんな時は獲物を狙う獣達も群れを作つて移動していくそうですから、油断するなーつて念を押されました。

お茶を飲んで、やはり食料を持つて仲間の所に帰つていきます。

猟師さん達は、今夜はこの場所に戻りません。罠を仕掛けた場所の近くに皆で野宿をするんです。

そんな訳で今夜から、獲物の番の本番です。

まだ夕方にも成つていませんが、ルミナとリューイは一眠りすることになりました。夜更けに起こして貰い、サンディイ達と交代するためです。

「じやあ、おやすみなさい」

リューイ達がサンディイの後ろで毛布に包まると、サンディイとライムは薪を手近な所に積み上げ、魔法の杖と十字弓を何時でも使えるように準備します。

「お姉ちゃん・・ちょっと心配だね。」

「

「イザとなれば、2人を起こすから大丈夫よ。」

「

山は、日が暮れると急に静かになりました。

「

渡り狼の襲撃

山の夜は暗く静かに更けて行きます。遠くで無視の鳴き声が聞こえます。

でも、サンディ達の周りは違います。目の前の炉には焚き火が燃えていますし、頭上にはライムの作った光球が2個クルクルと回っています。

昼間ほど明るくは無いですが、十分周囲の状況は確認できます。

「お姉ちゃん。まだ起こさないの？」

「もうちょっと、寝かせてあげましょう。ほら、あの星があの岩に隠れたら起こしましょ。」

「うん！」

2人ではちょっと寂しいみたいです。周りが静かですから、岩ねずみの動くガサガサと言つ音にも、思わず武器を構えてしまします。

そんな話をしていると、チリリン・・って鈴が鳴りました。え！って感じで2人は鈴の鳴った方を見ると、鋭い目が光球の光を反射しています。

そして、その数は少しづつ増えています。

「ライム。2人を起こしなさい！…」

「わかつた！！」

ライムが後ろを振り返るとリューイとルミナは既に身支度をしています。

なんで？つて2人を見てますが、リューイは元々寝る必要がありません。ルミナは剣士ですから、獣の殺氣を感じ取ったみたいです。

「ルミナ。左を頼む！」

焚き火の前に移動して襲来を待ちます。

獸の光る目は更に数を増していきます。もう20匹以上いるみたいです。

やがて、1匹が光球で照らされた岩場に現れました。

狼です。でも普通の大きさではありません。ヤギ位の大きさの狼です。

「渡り狼だ！リューイ油断するなよ。」いつ等の大きさで群れで狩りをするんだ！！

余りの大きさにちょっと引き気味の3人にルミナが注意します。サンディとライムは岩棚近くに移動して杖と十字弓を構えます。前に焚き火が盾代わりです。

ルミナは焚き火の左側に立ちオニギリを肩に担いで構えます。リューイは焚き火の右側の獲物を保管している岩の窪みの前です。焚き火に薪を追加して、鉄の杖を斜めに構えています。

何時でも来い！の状態ですが、狼は中々襲ってきません。相手を焦らして隙が出るのを待っているようです。

「ガウォン！」

一匹の狼が、ルミナに飛び掛ります。

「ウオッ！」

ルミナは、氣合の入った声と共にオニギリを狼に向って振りぬくと、ズシャーっと狼の頭部が2分しました。

「次！」

と言つてますけど・・狼は遠巻き状態です。

「ライム。混戦になつたら爆光球を投げて岩棚にサンディと避難しろ！」

リューイが怒鳴ります。これね。つてライムはポケットのふくらみをポンポンと手で確かめます。

「ガオオン！」

一際大きな遠吠えが響くと、狼が一斉に襲つてきました。数匹が1つの群れで襲つてきます。

リューアイは鋼の杖を風車のように回します。ガツン！、ガツン！と狼に鋼の杖が当たりますと、重さと遠心力が合わさった衝撃力で狼をへし折つてしまいます。

1つの群れを始末すると次の群れに向つて体制を整えます。ルミナは身の軽さとオニギリに切れ味の良さで、動きに隙を生じないように長剣を振るいます。

ズシャー・・・シユバツつていう感じです。

サンディーとライムの姿は焚き火の炎の影になつてゐるためか、狼は襲つません。

それでも、ルミナを狙う狼を火炎弾と十字弓の発射するボルトで1匹1匹倒していきます。

4人協力して渡り狼と死闘を繰り返している時、それは起こりました。

1匹の他の狼より巨大な狼が、ガオー！とライムに飛び掛りました。焚き火を全く怖がりません。

そして、狼の体には、ライムの放つたボルトが2本も刺さっているのです。

わあー！とライムは頭を抱えます。その声に皆がライム見ました。ズシャー・・・重い音がしました。

ライムが恐る恐る頭を上げて前を見ると、子馬程の狼がリューアイの投げた鋼の杖で岩に縫いつかれています。

杖を手放したリューアイに、また群れが襲い掛かります。リューアイは腰の鉈改を左手に持ちます。

(姫！分身する。コントロールよろしく！)

(「了解！・・ター・ボ₂でOKよ！」)

「ター・ボ₂！・・

リューイが叫びます。体の何処かで、カチツ！・・とスイッチが入ったのを感じます。

「分身！・・

リューイが叫ぶと同時にリューイの姿がぶれていきます。そして・・2人に分かれました。別れた2人がまたぶれると・・・4人になりました。

4人のリューイが別々に鉈改を構えます。

走りこんできた狼を4人のリューイが1匹づつ対峙します。

1人のリューイは横薙ぎに狼を弾き飛ばし、別のリューイは狼の頭部に鉈改を叩き付けます。更に、別のリューイは・・・

サンディ達は開いた口が塞がりません。

それでも、襲つてくる狼を個別に倒していきます。

更に、4人のリューイが同時に4匹の狼を倒しました。そして、それ以降は襲つてくる狼はありませんでした。

やつと、短いようで長い渡り狼の襲撃を退けたのです。

3人と4人のリューイは座り込んでしまいました。

すると、リューイの数が4人から2人に、2人から1人に数を減らしていきます。ブースト2の効果を姫が切つたのです。

3人はそんなリューイを不思議そうに見てました。

「リューイ！前から変わつてると思つてたけど・・今のはなんなのよ！・・

何かサンディが怒つてますけど・・

「ああ・・分身ね。・・体の移動速度を究極まで上げると出来るんだ。でも疲れるかえら余り使いたく無いんだけどね。」

「なるほど・・体術の一種か。4人に別れたのではなく、4人に

見えるように高速で動くのか・・考えただけでも疲れるな。」

ルミナが一人で納得してます。似たようなことが出来る人がいるのかも知れませんね。

「お姉ちゃん。ありがとう!」

ライムは感謝のハグです。内心リューアイが一番嬉しかつたりします。

「でも・・これどうするの?」

ライムは死屍累々の渡り狼の群れを指差します。

取り合えず一箇所に集めます。明日来る獵師さんに報告すれば、どうすればいいか教えてくれるかも知れません。

一難去つて・・・

山に朝日が昇る頃、サンティ達は朝食の準備です。

昨夜は殆ど寝てないんですが、お腹は関係ありません。

焚き火に鍋を乗せて、とりあえずスープとお茶の準備です。

皆でモグモグ食べていると、岩陰から一匹キツと獵師さんが首を出しました。

「おっ！ いい時に来たみたいだな。」

獲物を担いできた獵師さんは早速ご相伴にあやかります。更に、獵師さんが、獲物を担いできます。

「いやあー今年は大漁だぜ。」

結構、罠に掛かる獣が多いみたいです。

そんな中。

「だれだー！ これを殺ったのは！！」

頭領の大きな声が山々に木霊します。

岩陰を指差しながら此方に近づいてきます。余りの威圧感にライムは半べソかいてます。

確かに、そつちは・・例の狼よね？でもあれだけ怒るとほ・・・ひょつとして山の神？

「そつちの狼なら俺達皆で殺つたけど・・・」

「狼じゃあなくて・・・いや、狼だな・・・とにかく、あのトッカイ狼を殺つたのはだれだ？」

リューイが恐る恐る手を上げます。

「おめえか・・・頼みがある。あの毛皮を譲ってくれ！」「え・・・？」

話を聞いてみると、狼の毛皮を身に着けていると、他の獣に襲わ

れないという言い伝えが猟師仲間にはあるのだそうです。

実際、頭領も擦り切れていますが、確かに狼の毛皮のよつなものを着ています。

今まで、危険な獣に襲われなかつたのもこのせいだ。と断言しますが・・

そんな訳で、昨夜の狼の襲撃で倒した狼の毛皮を貰いたい。中でも、一番大きな狼の毛皮は頭領自身に譲つて欲しいということのようです。

特に、通常の狼より大型の渡り狼の毛皮は猟師達の間では垂涎の品なのだと教えて貰いました。

そして、あの巨大な狼に至つては、持つているだけでも尊敬されるのだとさうです。

「いいよ。譲つてあげる。」

「ありがたい。何れこの礼は・・・」

「礼もいいよ。特に困つてないし・・・。それより、あんなのが末だ来る可能性はある?」

「いや、今までの目撃例からはあの群れで終わりのはずだ。」

なら、問題ないです。また来たら大変ですけど、これで終了」と聞いて少し安心してます。

「オラア！狼の毛皮を剥ぐぞ！　じつちへ来い！！」

頭領が若い猟師さんに指示して、サツサと毛皮を剥いでいきます。

「な、何なんですか！このでかいの！？」

「おれんだ！傷を着けるなよ！！」

シユツ、シユツと短い音が連続して聞こえます。

次々と猟師達が獲物を扱いでやつてきます。
来た傍から頭領は毛皮を剥ぐ作業に参加させます。だって、数が
数ですからね。

粗方毛皮を剥ぐと岩山の方に穴を掘つて狼を投げ込みます。そのままにしてると場合によつては別の獣がやつて来ることがあるそうです。

いや、疲れた！って言つてる獣師さんに簡単な食事を提供します。だつて、もうお昼近いんです。野菜ごつた煮に干し肉を入れた簡単なものですけど、皆さん美味しく頂いたようです。

後を頼む！って言いながら獣師さんは自分のパーティに戻つてきます。

また、赤い靴の4人になりました。

「薪を取つて来ようか？水も残り少ないし・・・」

そう言つてリューイは籠を担いで、森に入つていきました。

3人は、昨夜の来襲で破損した警報器の修理です。

それが終わると、森からルミナが数本の木を切つてきました。3m程度にそろえると横木を渡し、簡単な柵になるようにツルで縛り上げます。

「これをお石棚の前に置くから、危険だと思つたら後ろに隠れるんだ！」

「わかった。昨夜みたいな時だよね。」

ライムとサンディイがちょうど入れるぐらいの大きさです。

リューイが戻ると少し早い夕食です。

今夜はリューイとライムが先番を勤めることになりました。

満天の星空の下、焚き火を前に、毛布に2人包まって、リューイの昔話にライムは耳を傾けます。

そんな健気な姿に天は味方をしたのでしょうか、サンディイ達と交替しても特に何も起こりません。

今夜は静かに時が流れます。

夜がけると、また、猟師さん達が罠に掛かった獲物を担いできました。

やはり今年は獲物が多いようです。岩の窪みは獲物で溢れ雨露を防ぐ木の枝を押し上げています。

「おめえら、今夜が最後だな？？？今朝、罠を調べてたら4箇所も何かに襲われた後だった。他の連中が仕掛けたのもそんなのがあったそうだ。渡り狼とは違う。もっと大食らになヤツだ。ここには、まだ狼の匂いが染み付いてるから大丈夫とは思うが、気を付けるに越したことねえ。」

「忠告ありがたく受け取つておべ。せいぜい熊だとは思つが・・・

「いやー熊じゃねえ・・・俺には判る・・・」

そう言いながら頭領は去つていきました。

頭領は猟師のプロです。そのプロが熊じゃないと言つたら・・それは何なの？つて疑問を持ちましたが、この山にそんな獣がいるなんて聞いたこともありません。

でも、今夜は最後だから、盛大に焚き火をしてお肉を焼いて、お茶を飲みながらコーヒーのお話を聞こいつと云つことになり、準備を始めます。

「・・・というわけでみんな幸せにくらしました。めでたしめでした。」

「なるほど・・・罠に掛かつた鶴を助けると、服を作ってくれるんだな・・覚えておこい。」

「お嫁さんになつてくれるんだ。・・・お婿さんばびじついたら来るのかな？」

今夜は（鶴の恩返し）みたいですが、ちゃんと伝わったんですかね。疑問です。

「ねえねえ・・次は？」

ライムは面白かったのか、次のお話をリクエストします。
え～とね・・なんてリューイが考へていた時です。

「大変だ！！直ぐ来てくれ！」

獵師さんが息も絶え絶えに走りこんできました。
サンディが水を飲ませると少し落ち着いたのか、ぜいぜい言いながらも仲間が襲われていることを話はじめました。

「どつちだ！」

ルミナが叫びます。

「この方角だ。焚き火があるからそれが目印だ！」

ルミナが走り出そうとするのをサンディが止めます。

「みんなで行くわよ！」

知らせてくれた獵師さんに後を頼み、皆で走り始めます。
ライムが造った光球が周りを照らすので足元は万全です。

遠くに明かりが見えます。多分獵師さんが言つた目印の焚き火で
しう。

近づくとバキバキと木が折れる音がします。
熊とは違う。ルミナは確信しました。

銅竜との戦い

獵師さん達の野宿する焚き火が遠くに見えるようになった時です。周りの森の木が、バキバキと折れる音がしました。熊なら精々ガサガサです。もつと大きな何かが居るようです。

【アクセル！】

ライムがルミナに加速の魔法をかけたようです。アクセルだと・・大体2倍速ぐらいですかね。

「ありがとう。体が軽くなつたぞ。」

ルミナが後ろ手に手を振り、オニギリを抜いて構えます。リューアは鋼の杖を持って、恐る恐る焚き火に近づいていました。

その時、森の中から又一つと大な顔が出てきました。

「キヤー！！」

サンディーとライムは思わず尻餅を着いてしまいました。だつて、そこに現れたのは大きなトカゲだったからです。

「氣をつける。トカゲのようだがこいつはドラゴン！銅竜【アンバードラゴン】だ！！」

ルミナが叫んでます。

素早い身のこなしでドラゴンを翻弄しながらオニギリで斬り付けますが、ドラゴンの鱗によつて剣の刃が滑るみたいで、深く斬ることが出来ません。

リューアはといふと、ターボで加速しつつ、鋼の杖で殴りつけているのですが、やはり有効打が少ないようです。

2人の邪魔にならない様に、サンディーの魔法が炸裂しますが、元

「ドラゴンの鱗は魔法低減の効果を持っているため、余り役に立ちません。ライムの十字弓はドラゴンの鱗には強度不足……」
はつきつてちよつと辛いなつて言つ状態です。

「ドラゴンの武器は長い尻尾を鞭のように使つた攻撃と、両手足の爪、そして大きな口から覗く牙です。

近づくと尻尾で牽制し、ちょっとでも隙を見せると口がガブンと来ます。

でも、ルミナとリューイが戦つている合間を見て、サンディ達は傷ついた獵師さん達を安全な場所まで運ぶことが出来ました。治療も、薬草で何とか成りそうです。

「お前の分身攻撃で何とか成らないのか？」

リューイは首を振ります。リューイの身体能力は10倍です。でも、その力で重い鋼の杖を振るつてゐるのですが・・鱗に跳ね返されているようです。鱗の弾力性が半端じゃありません。

段々とルミナのオニギリを振る様子に疲れが見え始めました。スピードはそれなりに保つていてるのでドラゴンの攻撃も何とか回避してますが、元々スタミナがあまり無いみたいです。

リューイは何を思つたか、鋼の杖を振りかぶり、槍のよじりドラゴンへ投擲します。

なんとか、鱗を破つて少し肉に食込んだみたいですが。
すかさず、駆け寄ると、両手で杖を掴み叫びます。

【ボルト!!】

ドオオオン!!と耳をつんざく音が響きます。リューイの動力炉から過大電流がバチバチと流れていきます。

【ギャオオー】

これには、ドラゴンと言えども耐えられなかつたみたいですね。

一聲叫ぶと体を振り回してリューイを振り解きました。そして、突き刺さった鋼の杖を手でひにか引き抜くと半分にへし折りました。

一瞬攻撃が緩んだと見たルミナがジャンプして傷口をオーギリで抉ります。

「グアア」

あまりの痛さのためでしょか【ドラゴン】身を捻りました。その動きでルミナが弾き飛ばされてしまいました。

次は、コミッターを切つて、ターboroで行くしかないかも……なんて考へている時です。

（腰のバックから、懐中電灯みたいなものを取つて！）

後ろ手で探すとそれらしきものがありました。早速取出します。

（左手で持つて、親指の所にあるスイッチを指で捻る！）

姫の言つとおりに捻つてみました。

「ギュワ・・・・

懐中電灯モドキの・・丁度光が出る所から、細い糸のよつな紫色の光が1m位伸びました。中心はそれこそ1mmにも満たないような強烈な光を放つ線ですが、周囲3cm位はボーッとした紫の光が染み出しているように見えます。

（プラズマ・ソードよー長剣のように使えるから。でも、物凄く切れ味がいいから自分と味方を斬らないようにしてねー）

「ギュオン・・ギュオン・・

プラズマ・ソードを振るたびに空気が電離される音が響きます。剣を振りかざし、素早く周囲を確認します。

獵師さん達はサンディ達が後方に避難完了です。ルミナはサンディの肩を借りて撤退中です。

周囲には誰もいないみたいで。

【ター・ボ2！】

リューイは加速するとドラゴン目掛けてジャンプします。そして、プラズマ・ソードを横薙ぎに一閃。

ドラゴンの背面に着地すると、目を閉じて残心です。

「ドサア！」

ドラゴンが振り向こうとした時・・大きな音がしました。ゴロゴロと何かが森を転げます。

ショウー・・と言ひ音も聞こえます。

リューイが残心を解いて、プラズマ・ソードを構えて後ろを見ると・・首から血を噴水のように噴出すドラゴンの姿がありました。頭はどこかに転げたようです。

プラズマ・ソードのスイッチを戻すと紫色の光はすうっと懐中電灯モドキに吸い込まれていきます。

それを腰のカバンに詰め込むとみんなの所に戻つていきました。

3人は呆気に取られて見ていました。

光で物が切れるなんて聞いたこともありません。光の剣なんて伝説の中にもありません。

大体、伝説の剣なら、ルミナのオーギリがそうなんです。それが切れないものを簡単に切り裂くなんて・・・

「何とか成ったよ！」

「お姉ちゃん！！」

戻つて報告するや否やライムのハグに危うく倒れそこになつてます。

「あれは、なんだ！」

「ああ・・あれね。魔道で作られたこの棒に【ボルト】の強力なヤツを閉じ込めるとなんな感じになるんだ。でも、【ボルト】回分以上の力を使うんで余りやりたくないんだけどね。」

適当に誤魔化します。

「私には・・使えんか。」

ルミナはガツカリします。

「リューイは・・見方だよね。」

サンディは念を押します。

「当たり前だろ。俺は、赤い靴のリューイだし!」

「そうだよね。」

騒ぎを聞きつけた頭領がやつてきました。

「何なんだ、この騒ぎは。トンでもないのが出たつて聞いて來たが・・・！」

サンディの指差した先を見て、頭領は仰天しました。
だって、そこには首の無いドラゴンが立っていたからです。

「これは・・銅竜じゃないか！・・・この山にはこんな物はないはず・・」

どうやら、銅竜は此処から北のほうへ出立つ以上離れた所に生息しているみたいですね。

「この間の渡り狼といい、今回の銅竜といい・・この山はおかしくなったかもしねん。」

ドラゴン・ハンターの母

銅竜との死闘を終えて、サンティイ達は元の獲物の集積所に戻りました。

怪我をした猟師さん達は別の猟師さんがおぶって運びます。

頭領は別の仲間の元に引き返しました。明日は早く戻つて来ると言つてました。

岩棚の所には知らせてくれた猟師さんが盛大に焚き火をしてました。

ライムはポットでお湯を沸かし、皆にお茶を入れてあげます。疲れた体にはお茶が一番ですからね。

お茶を飲んで一息入れたところで、交替で眠りうとしましたが・・・眠れません。眠りうとして目を瞑ると、ドラゴンのグア！っと開けた口が飛び込んでくるんです。

ここは、一つ・・・と言いつゝことで、リューイの昔話で紛らわせることになりました。

「昔、昔・・・あるところに・・・」

「何時も、昔だよね。そんでもって、あるところって何処なの?」
ライムの素朴な疑問ですが・・・それは、聞いてはいけない事なんですよ。

ほひ、リューイの顔が引きつりますし、変な汗もかいてる感じ。

「とにかく、昔の・・・それで、俺も知らない位遠いところだから、あるところって言つんだよ。」

逆切れ寸前です。

「話を戻すね。・・・あるところ、お父さんとお母さんと、お

兄さんと妹が住んでました。」

「今日はお爺さんじゃないのね。」

「うん。どうやら少し若い世代の話のようだ。」

と、こんな感じでお話が続きます。途中、ライムの質問攻撃や、ルミナとサンディの的外れな感想が入りますが、時間つぶしには丁度いいかも！です。

明け方近くになつて「ヘンゼルとグレー・テル」のお話は終わりましたが、サンディ達は白熱した議論を始めてました。

「最初に村に入るのはライムでいいな！」

「次は私で、ライムと村の中を搅乱すればいいのよね。」

「最後は、私がオニギリで一毛打尽！」

リューイはなんの作戦だろう？って聞いてます。

「魔女を全て倒したら、村の東半分は私が貢つ！」

「西は私が貢うわ。」

「そしたら・・・ライムの分が無いじゃない！！！」

どうやら村の襲撃の計画を練つてるみたいですね。でも、何処の村？・・3人の会話から少しづつ理由が判つて来ました。

昔は家だったんだから、今は村ぐらいに発展してるはずです。それは、お菓子の村。悪い魔女が一杯住んでます。だから、村の魔女を全てやつづけてその後で美味しく村ごと食べる計画です。

しかし、どうやつたらこんな展開になるのか不思議ですね。

ワイヤワイヤつてると何時の間にか朝になつてます。

今日は狩猟の引き上げの日です。昼ごろには村人が獲物を運ぶために山に上がつてきます。

サンディ達は残つた食料で朝食をたっぷり作ると早めに食べることにしました。

後は、獵師さんに振舞います。

昨夜助けた獵師さん達が朝食を終えるころに頭領達が罫と獲物を担いで帰つてきました。

先ずは一服とお茶を飲んでましたが、朝食が余つてると聞いた途端お碗を持つて焚き火の鍋に駆け寄ります。すっかり鍋は綺麗になりました。

「ほら。回収してきたぞ！」

頭領が銅竜の牙をリューアイに投げてよこしました。

この牙だけでもいい値段で取引されることがあります。更に、ギルドに行けば討伐の証拠とすることが出来ます。

「しかし、怪我は負つたが死んだ奴はいねえ。獲物も例年より多いし、何と言つてもこの渡り狼の毛皮は俺達獵師の宝物だ。全員に配つても余りある。いい仲間同士の取引に使えるつてもんよ。」

頭領は、焚き火の傍に座つて、年期の入つたパイプでタバコをブカリつて吸つてます。

お茶の入つたお椀を片手に持つて、見るからに終わつたぞ！ツて感じに見えます。

リューアイは曲がった鋼の杖を傍において隣に座ると、腰のバックからタバコを1本取出しました。

焚き火の薪を1本手に取ると、タバコの火を付けます。

スー・・・パ・・

思わず顔が綻びます。この世界に来る前、リューアイは真面目に勉強と仕事をしてましたが、唯一、悪友との付き合いで覚えてしまつたのがタバコです。

昨夜、懐中電灯モドキを掴んだ時に気が付いたみたいです。

それまで、吸いたいとも思つてみなかつたんですが・・頭領のパイプを見て思い出したみたいです。

ジーッ！つとライムが睨んでますが、リューアイは気が付きません。

でも一本でやめて吸殻を焚き火に放り込みました。

獵師さん達は忙しそうに獲物を木の棒に括りつけます。罠も纏めて担ぎやすそうに縛りつけました。

リューイ達は特にすることはありません。空荷の背負い籠を見た頭領がこれを運んでくれって、獲物を幾つか籠に放り込んでいます。だいたい終わつたかなつて皆で周りを見渡していると村人が大勢岩棚まで上がつてきました。

獲物を村人に託して、獵師さん達は罠を運びます。怪我をした獵師さんは仲間が肩を貸して移動開始です。

ゆつくりと岩山を降り、森に入り・・・ナナイ村に帰りました。

獵師さんの家の前で報酬を受取ります。

一旦家に戻ると、夕食にはまだ早い時間なのでギルドに向つてレベルが上がつてないか調べてみることにしました。
でも、その前に、武器屋さんに寄ります。

「おめえ、この杖どうやつたんだ?」

ドワーフのお爺さんが吃驚します。

リューイが訳を話すと静かになりました。

「そりや・・仕方が無いの・・・2・3日待つとね。」

曲がった葉がねの杖を持つて奥に行つてしましました。

ギルドに行くと何だか様子が変です。マスターが腕を組んで待つてました。

気にせずにおカウンターのお姉さんにレベルアップの確認をします。サンディとライムが1つ上がつて、黒4つです。ルミナとリュイは上がりません。レベルが上がるほどなかなか上がらないんだそうです。ちょっと残念ですね。

左手のカウンターにリューイがドラゴンの牙を乗せた時です。
それまで腕組みしながらジッと此方を見ていたマスターが近づいてきました。

「やつぱり、おめえか。銅竜とはいえ立派なドラゴンだ。しかし、
おめえの武器は杖だったはず……ドラゴンの鱗では弾かれてしまつ
んだが……」

「おねえちゃんは光の剣を使つたんだよ！」

ライムが答えました。リューイは変な汗をかいてます。

「光の剣？・・まあいい。それでだ、レベルは上がらなかつたが
おめえらに御褒美だ。カードを貸しな。」

マスターが皆のカードを集めると奥に入つていきます。
しばらく待つとマスターが戻つてきました。

「ほうよ。カードの下をよく見る。赤の小さな宝石があるだろ、
それがドラゴンを倒したチームの印だ。そして、これはおめえだ。
赤の宝石と青の宝石が並んでる。これがドラゴン・ハンターの勲章
だ。」

皆にカードを渡すと頑張れよーって言いながら事務所に入つてい
きました。

これが、噂に聞くドラゴン・ハンターの印なのかトルミナは感動
します。

サンディイ達は、そんな物かという感じです。経験の差がこうなる
のでしょうか……とりあえずは嬉しいです。

隣のカウンターに出したドラゴンの牙は銀貨10枚になりました。

これで、杖の修理が出来るつてリューイは喜んでます。

クロスボーグ改

ギルドで赤い靴のメンバーは、ドラゴン・ハンターの印を入れて貰いました。

家に帰ると、4人はテーブルに膝をついて眺めています。

「貰、王都のギルドで一度だけ見せて貰つた物と同じだ。」

「これって、役に立つの？」

「宿は割引してくれる。武器や防具もだ。それと、他の冒険者に一日置かれる立場になることだ。」

「私が、見たときは、酒場の喧嘩だったかな。壮年の剣士がギルドカードを見せた途端、喧嘩が収まつた。不思議に思つた私は剣士を問い合わせると、これと同じカードの印があつたんだ。」「ふうん・・でも割引は魅力よね。」

でも、他の冒険者とは違うんだぞ！ってことがカードの違いで表されていることに優越感を持つてたりします。

まあ、このメンバーなら悪用はしないでしょうし、少しごらう天狗になつても問題は無いでしょう。

（しかし、すごい切味だったな。）

（物質を構成する原子をプラズマ化するから、なんでも一応切る事が出来るわ。）

（切れないのも有るってこと？）

（靈体は無理。それに再生能力が高いものも無理かなあ・・・）

（ええ・・・オバケ居るの？）

（似たものは居るよ。）

ちょっと、ブルーになつてます。でも、オバケみたいなのは、

ルミナが役に立つかも…と考え気が楽になります。

ルミナ オニギリ オニが切れるなら、オバケもできるかも！連想ゲームみたいな考えですけど…以外とホントだったりするかもです。

「ちよっとリューアイ聞いてるの？」のカードなんか凄いものらしいわよ。」

「ああ、聞いてるよ。でもね、良いことばかりじゃ無いんじゃないか？って考えてたんだ。」

「確かに、それはある。ギルドランクを無視した依頼が舞い込む可能性が高い。積極的にドラゴン・ハンターの印を表に出すのは控えるべきだろ？』

「そんなん…・割引なのに…・・・」

そんなことでその日は終わりました。

数日後、リューアイは杖を受取りに武器屋に向います。ライムが一緒にです。

ライムは、十字弓をもう少し威力が上げられないか、相談したいつとリューアイに付いてきました。

「こんにちは。』

「オオ・・おまえか。出来取るぞ。』

そう言つてドワーフのお爺さんが取出したもののは…なんか、前と変りない鋼の杖です。

「そう、ガツカリするな。・・握つてみろ。』

リューアイは杖を握つてみます。

「うん・・あれ？・・太くなってる…』

「そうじや。芯の部分に魔法強化を施した材料を使つていて。強度は数段上がつとるはずじや。』

「そんな感じだね。』

リューアイはビュンビュンと杖を振る回します。

「あのう・・・」

「うん、どうした?」

「これ、もっと威力が上がりませんか?」

「どれ、貸してみる。」

ライムはお爺さんに十字弓を渡しました。

「フーム・・これは、初心者用か・・改造は無理じゃな。」

ライムはガツカリしてしまいました。だって、少し改造すれば威力はずっと上がると思っていたからです。

「まあ、そんなにガツカリすることもなかろうて。買い換えれば良いんじゃ。」

そう言つて、2丁の弓を取出しました。

取出した弓は、速射性を重視したものと威力を重視したものです。片方は一度の操作でボルトを連続して3本発射できますし、もう片方はライムの弓より威力が1・5倍ほどあがっています。威力が増したことで、特殊なボルトの発射も可能です。

ライムは悩んでしまいました。

これから、もう直ぐ銀色の月です。無駄遣いは出来ません。

「これって、幾らぐらいなの?」

「1つ銀貨4枚だ。」

「この2つを改造して命体できる?」

ドワーフは出来ると答えます。そして、弓の値段は銀貨6枚。

「じゃあ、鋼の杖の修理費と弓の購入改造費合わせて銀貨10枚・

・それにこれでどう?..」

リューイはタバコとマッチを取出しました。

おじいさんはタバコとマッチをしばらく見つめました。その用途を聞くと吃驚します。

「魔法以外の火をつける道具か・・そしてパイプの要らないタバ

「とは・・・」

「良いじゃね。明日取りに来い！」

家に帰るとサンティイが心配そうにリューアイ達を待つてました。

リューアイは銀貨10枚を持っていましたが、ライムは銀貨一枚で改造を依頼しようとしてましたから、多分お金が足りずガツカリして帰つてくると思つていたんです。

「ただいまー！」

とライムは元気にドアを開けます。

「どうだったの？」

「うん。凄いのが出来るよ。改造できないから新しいのを買って改造するんだよ。」

「ええ！・・そんなにお金持つて無いじゃない！」

「お姉ちゃんが払ってくれた。それでも足りないみたいなんで、お姉ちゃんの持つてる物を足したんだよ。」

「リューアイ。なにをあげたの？」

「ああ・・タバコとマッチかな。ここには無いみたいで喜んでた

「ドーラゴンの牙の代金も全部？」

「もう、何も残つてない。」

ホントにもう・・サンティイは少し怒つてます。でも、今後の事を考えるとライムの武器強化は必要です。

銀色の月がほんとに始まる前に、もう少し依頼をこなさなければ、長い冬は越せないかも知れません。

明日からは地道に薬草取りをしなければね。と思つたりします。

次の日、昨日と同じようにリューアイとライムの2人で仲良く武器

屋に向います。

「お爺ちゃん。できたー！」

「おお、出来取るぞ。ほれ、これじゃ。」

動滑車を使った複雑な弦の張り方ですが、使用方法は今までと変わりません。

簡単な、照門の前に細長い箱が有り此処にボルトを2個入れるのだそうです。連射は2個まで、しかし威力は十字弓の倍の性能だそうです。

しかも、威力が増したおかげで、特殊なボルトを打つ事が出来ます。

「『』のは・・・そうだな、クロスボーグと名付けるか・・特殊弾を撃てるや。サービスで、炸裂弾を3個と煙幕弾2個をつけてやるわい。」

「ありがと、」

2人で武器屋を出て家に帰ろうとした時です。
ギルドの石壁になにかの看板が出てました。

「当、ギルドで ドラゴン・ハンター でました！」
宝くじ・・・そんな感じの看板です。

サンディイ達のお婆ちゃん

本格的な冬が訪れる前に、もつ少し手許金を確保しようと。つて
ことで、現在ギルドの依頼掲示板と睨めつこの最中です。
この前も、依頼件数はあまり多くはなかったんですが、今回はも
つと少ないです。

「どれも、変りは無いわね。この辺から行こうか。」

「あれ? この依頼・・・お婆ちゃんからだよー。」

サンディイが掲示板の端から依頼書を取りうつしたら、下の方の依
頼書をみていたライムが何か気が付いたようです。

「ほら、村外れのお婆ちゃんからの依頼だよ。」

その依頼書は、冬支度の準備をして欲しい。報酬銀貨一枚。つて
書いてあります。

冬支度ってどんなのかなって思いましたが、銀貨一枚はこの種の
依頼では破格です。

「これ、お願ひしまーす。！」

サンディイは受付のお姉さんに依頼書を持っていきました。

お婆ちゃんの家は村外れにあります。前行つた悲恋の洞窟のあ
る森まで進み、手前にある小道を森伝いに歩くとお婆ちゃんの家が
見えてきました。

お婆ちゃんは、サンディイ達の父方のお婆ちゃんです。

でも、何故サンディイ達と離れて暮らしているのでしょうか。その理
由は・・・

「お婆ちゃんーん！」

小さな家に近づくとライムが大きな声でお婆ちゃん呼びました。

すると、扉が開き、中から、お婆ちゃん？・お姉ちゃんが出てきました。

「おお、ライムが、大きくなつたねえ。サンディもこの前来た時よりも確實に美人になつてゐるよ。・・うん！私の遺伝だ。」

リューアの頭にはでっかい疑問文が浮んでます。でも、ルミナは直ぐに気が付きました。

サンディのお婆ちゃんはエルフ族なのです。ライムを抱き上げて振り回している時チラつと髪が乱れ尖つた耳を見つけたからです。でも、見かけはどう見ても20代です。サンディのお母さんより遙かに若く見えます。

「まあ、中に入れ。依頼の話はそれからだ。」

お婆ちゃんの家は1Kです。小さなテーブルに椅子2つ。そして傍らにはベッドが置いてあります。

4人を適当に座らせると、お婆ちゃんがお茶を入れてくれました。

「ところで、そちらの2人は誰だい。1人は私と同じエルフ族らしいが、もう1人は見かけない種族だねえ。」

「リューアは、少し・・大分変つてるけど、人間だよ。」

「そうかい・・まあ、ライムがそう言つなら人間つてことにじといてやるよ。」

（俺のことバレてる？）リューアは冷や汗をかいてます。

「それと、もう1人のお嬢さんもいるみたいだけど・・（私のこともバレてる？）姫様も指輪状態ですが冷や汗をかいて

ます。

「や～ねえ・・ここ来たのは4人だけよ。」

「そうかい・・・そうしこうかねえ。」

久しぶりにお婆ちゃんに会えて嬉しかったのか、ライムが今まで

の冒険をお婆ちゃんに披露します。

お婆ちゃんは、そうかい、へへ、ほほーなんて言いながら聞いていました。

「リューアイとやら。随分と孫が世話になつたようだね。感謝するよ。」

「いえ、じちぢりそ・・ですよ。」

「ところで、貴方は冒険者なんですよ。」

お婆ちゃんの姿は村の婦人が着るような長いスカートにHプロンではなく、ロングパンツにシャツ姿だったからです。

「よく判つたねえ。なるべく判らないような格好をしてるつもりなんだが・・」

右手の剣ダコを見ればイヤでも判ります。とはいえない。

「ところで、依頼の件ですが・・薪割りではないですね。」

「ああ、その話だね。実は、町のギルドからの依頼なんだが1人では、ちょっと心細いと思って、依頼したのさ。」

「依頼の依頼ですか・・・」

「違う。依頼の手伝いだ。下の森に灰色熊がいるらしい。その討伐だよ。灰色熊1匹なら私一人でもなんとかなるが、どうやら夜叉が一緒にいるようなんだ。夜叉の討伐をお願いしたいんだが、どうかね。」

夜叉ってなんだ? っていう顔をしているリューアイに胸竜より小型のトカゲよ。ってルミナが教えてます。

「夜叉って強いんでしょ。できるかなあ。」

「お前達はどうgon・ハンターなんだ。十分可能なはずだ。」

「さて、仕度をするから待つててくれ。」

そう言つと、ベッド脇の木箱から鎖帷子を取出して着装します。また、木箱をゴソゴソやってましたが、杖を1つ取出すとサンディに放り投げました。

「この前ダンジョンで見つけたやつだ。サンディにあげるよ。」

受取つた杖をよく見ると、杖の天辺に大きな魔道石が金属製の爪でしつかり取り付けられてあります。

「これって・・この色だと、炎の杖！」

「そんな名前だつたかしら・・私が持つても使えないし・・サンディなら使えるでしょ。」

たしかに魔法の杖ですから、サンディには使えます。しかも、この杖、魔力を使わずに火炎弾を撃てるのです。そして、火炎弾の魔法をこの杖を使って行うと、1つ上の魔法、火炎球を打てるのです。火炎球はその名の通り、火炎が球状になつて飛んでゆく魔法で着弾すると数mぐらいの範囲で高価があるものです。

サンディはありがたく受取る事にしました。これで、赤い靴は結成当時より武器が全員上昇したことになります。

「さて、準備が出来たわよ。」

お婆ちゃんは、片手剣を腰の後ろに差し、金属性の銀の弓を持つています。

お婆ちゃんの家を出ると、みんなで森に向います。

リューイは生体レーダを起動しました。緑の点が森中に点在しますが、黄色や赤色はありません。

「結構人が森に入つてゐるみたいだね。あつちこつちから気配がする。でも殺氣を持つたのはいらないな。」

「よく判るね。その気配だが、この頃この森に初心者が多く入るようになつてね。煩くなつたよ。」

「では、もつと奥か。悲恋の洞窟まで行つて、そこで一休みしよう。」

ゾロゾロと悲恋の洞窟まで獣道を歩きます。たしかに、あつちこつちに人影を見るようになりました。

洞窟が何処にあるか判らずにうなづいてるみたいです。

朽ちかけた神殿に到着して此処で一休みです。

「ここが、悲恋の洞窟か・・ライム位の時長老から聞いた昔話が本当だつたとはな・・」

お婆ちゃんが考え深げに言いました。

「でも、お婆ちゃんはライム達と一緒に何で住まないの?」

「私が息子の嫁より若く見えるのは問題だらう。それに私は現役だから世界中を飛び回ってるしね。」

そんなもんかなあ・・ってリューアは考えてますけど、見掛けは結構大事なんですよ。

一休みが終わつた所で、再度リューアは生体レーダを起動します。探知範囲ギリギリのところに赤い点が集中しています。

数匹ではあります。数十匹が一箇所に集まつてます。

「見つけた!・・・數十匹いるぞ!-!」

リューア達はリューアの示した方向に歩き始めました。

灰色熊ｖｓお婆ちゃん

リューイの後をたぐたぐと並んで歩いてこきます。

お婆ちゃんとルミナとリューイだけなら枝渡りや猿飛びでヒョイヒョイで移動出来るんですが、サンディとライムはどちらかと言つと人間ですからそんな器用な真似は出来ません。

でも、リューイが先頭で、鋼の杖を使ってエイ！って灌木やツタを払ってくれるんで、そんなに疲れないですみます。

リューイが片手で止まれ！って合図をだします。

茂みからそつと覗くと、沢山の生き物がうじゅうじゅいます。

「手前の小さいのが羅刹、その後ろが夜叉だ。」

ルミナが教えてくれました。そう・・つてリューイは答えました
があまり嬉しくありません。だって、小さいつていう羅刹がリューイサイズ、夜叉はリューイの1・5倍です。そんなのが20匹ぐらい居るんですから、正直、銅竜1匹を相手にした方が楽なんじゃないかなって思つたりしてます。その上、何かの恐竜映画で見たラプトルとか言う恐竜にそっくりです。きっと獰猛何だろつなあ、って思つたりしてます。

「そして、奥に居るあの熊が、サンディのお婆ちゃんの言う灰色熊だ！」

リューイは声を出しあうになつて、慌てて口を押さえます。

灰色熊の大きさは、この間倒した銅竜程の大きさです。

(「どうじよつて言つんだ！このお婆ちゃんは！…）
(聞こえるわよ・・て、貴方の実力、見せて貰いましょうか

！）

「サンディとライムは木登りが出来る?」

「出来るよ。」

「じゃあ、この大きな木に登つて、木の上から援護してくれない。俺と、ルミナは枝を飛びまわることが出来るから、ヒット・エンド・ランで一匹づつ始末するから。」

「それが一番かもな。」

ルミナも賛成してくれました。

それじゃあ、つてサンディ達が木にするすると登つていきます。枝が大きく張り出したところにサンディ達は辿り着いて、そこに立ち上りました。背中を幹に押し付けてるので体制が崩れる事もありません。

サンディは杖を握り締めて火炎球の詠唱を始めます。ライムはクロスボウにボルトをセットします。最初のボルトは2本とも炸裂弾です。

2人が枝に辿りついたことを確認したルミナとリューアは素早く枝渡り、猿飛びで枝に飛び移りました。

「ホオー・・結構連携が出来てるじゃないか。どれどれ私も準備するか・・」

お婆ちゃんも枝渡りをして更に遠くの枝に飛び移ります。

羅刹も夜叉も未だリューア達に気が付いていないようです。リューアはサンディ達に手を振ると、目標を腕で示します。

2人は頷くと、サンディは魔法を放ちます。そしてライムはクロスボウのトリガーを引きました。

【火炎球!】、「ばしゅ!、ばしゅ!」

羅刹の群れに火炎球が炸裂します。数体が衝撃で吹き飛ばされました。続けて「ドカン!、ドカン!」と炸裂弾が群れを引き裂きました。

す。

「今だ！」

リューイは枝から飛び降りながら鋼の杖で夜叉を叩き潰します。その反動を利用して猿飛びで枝に緊急離脱、この繰り返しを続けていきます。

ルミナも同じようにオニギリを振るつて羅刹を葬つて行きます。

「へえ～・・やりますねえ。枝渡りはエルフだけかと思つたけど、出来る種族もあるんだねえ。長生きはするものねえ。」

遠くから、4人を見るようです。

「さて、あつちが終わらない内にこつちも終わらせないとね。」

お婆ちゃんは枝から高く飛ぶと、灰色熊目掛けて銀の弓で矢を撃つていきます。全て当たりです。

たちまち10本程の矢が灰色熊の背中に突き立ちますが、全く気にしてないようです。

「通常では、やはりダメね。貫通矢を使つしかないか。」

お婆ちゃんは銀の弓に魔法を込めると、銀の弓が変形していきます。・・それは、長弓に変ると周りに光の雲を散らしあはじめました。灰色熊の真上高く枝渡りを行います。その頂点近くで、銀の弓を引き絞ます。

【貫通矢・・2本！】

素早く呴くと矢を射掛けます。

「シユタ！、シユタ！」

灰色熊の体内深く矢が突き立ちます。矢羽がよじやく体表面に出るくらい深く刺さつてます。

「グワアッ！」つて灰色熊が叫び上を見ます。

どうやらお婆ちゃんが原因だと認識したみたいです。

お婆ちゃんが降り立つた木に体をぶつけて、お婆ちゃんを振り落

とやうとしますが、その前に次の枝に飛んでいきます。

【貫通矢・・2本！】

飛びながら次の攻撃です。

リューアイ達は地道に一匹づつ片付けて行きます。

夜叉を粗方片付けて、今は羅刹を相手にしてるんですが・・素早すぎて中々攻撃が当たりません。

【アクセル！】

ルミナが枝に飛び移った一瞬の合間に、ライムは加速の呪文を放ちます。

「リューアイお姉ちゃんには何故か効かないんだよね。」

「でも、リューアイは自分で出来るから・・」

同士撃ちの危険性から攻撃を一時中断してサンティ達です。

【ターボ1】

リューアイも自分で何とかしたみたいで、みるみる2人の攻撃スピードが増し、羅刹の動きに追従していきます。
たちまち2匹の羅刹が倒されました。

(キュピーン！)

リューアイの頭に警報が鳴ります。

(なんだ！)

素早く生体レーダで周囲を確認します。

特に異常は無い様ですが、ふと、気が付きました。お婆ちゃんに動きがあります。さっきまで大きな生体反応の周りをヒョイヒョイと動いてたんですが・・・

(不味い！・・【ターボ2】)

ヒュンッとリューアイの姿が消えました。

「これまでかもね・・まだまだいけると思ってたんだけど・・・
灰色熊の上を飛びまわって攻撃してたんですが、運悪く枯れ枝に

飛び移つてしまい、そのまま落下してしまいました。

落ちた衝撃で足を挫いたらしく立つ事も出来ません。

灰色熊には、十数本の貫通矢が体内深く突き立つて いるんですが、此方に迫る動きを見るとあまり効いていないようですね。

そのままの姿勢で銀の「J」を引き絞ります。

ショタツ！ と熊の顔面に突き刺さりますがやはり効いてません。

お婆ちゃんは腰の片手剣を握ります。

（最後はこれでね。）

田の前に迫つた灰色熊田掛けて片手剣を振り下ろします。

ドガ！ って大きな音がしました。

お婆ちゃんの片手剣は地面にめり込んでいます。

（？？）

何なの？ つていう感じです。確かに田の前にいた灰色熊に片手剣を振り下ろしたはずです。

でも、剣は空を切つて地面にめり込んでいます。

（ドガ！ つて音がしたわよねえ・・・）

改めて周囲を眺めます。

するとそこには、錆の杖を振り下ろしたリューイが立つて いました。

（確か、あの娘はずつと向うにいたのよねえ・・・でも此処に居る。しかも私が見えないくらいの速さで重い一撃を灰色熊に放つたときの・・・）

「大丈夫？ お婆ちゃん！」

「ええ・・大丈夫よ。灰色熊はどうなったの？」

「今の一撃でやつつけたみたいだよ。」

（とんでもない娘だねえ・・銀のドラゴン・ハンター伊達じやな

いつことかねえ）

「どれどれ・・・ほお～死んでるね。お見事！」

お婆ちゃんは銀の弓を杖代わりにして灰色熊を確認します。

「お婆ちゃん。リューイ。何処なのーー！」

「此処だよーー！」

サンディ達も羅刹を全て片付けたようです。大声で呼んでます。

お婆ちゃんの秘密

おおーい！ってサンディイ達を呼びます。

ガサガサ・・つと音がして茂みからライムが顔を出します。葉っぱや小枝が金髪巻き毛に引っ掛けたのは、まあ・・お嬢嬌つて所かもしれません。

後からサンディイ、ルミナが藪を避けてやってきます。

「お婆ちゃん！怪我したの？」

ライムは心配そうです。そんな孫娘に笑つて答えるのもお婆ちゃんの仕事です。

「大丈夫だよ。ライムを見て元気になつたから・・いちつ・・

でも、やはり痛いみたいですね。

「待つて！・・【ヒール！】」

ライムはお婆ちゃんに癒しの魔法を掛けました。
すーーーっと痛みが引いていきます。ちょっと杖無しで立つてみ

ます。大丈夫みたいです。

「やはり、としかねえ。枯れ枝に飛び移るなんて・・」

ルミナとサンディイは灰色熊を杖でつんづんしながら調べてます。

「でかいな。銅竜と同じぐらいだぞ。」

「ええ・・でも、この矢は？」

「ああ、これが。魔法弓で強化された貫通矢だ。今ではあまり使える者がいないはずだが・・とんでもない婆さんだな。」

「でも、結局、リューイが殺ったのね。」

「間違いない。背骨を折られる・・と言つが、体の真ん中を
鈍器で殴られたつて感じだな。あの杖で強引にぶん殴つたに違いな
い。」

「旨おいでー！」

お婆ちゃんが呼んでいます。

サンディ達は急いで戻りました。

「灰色熊を倒したから、これで依頼は終了だよ。一旦家に戻りますか。ところで、お前達、夜叉と羅刹の換金部位は確保したかい？」

「うん。たっぷり手に入れたよ。」

ライムはバックを手でポンポンしました。

「では、ここにはもう用はないね。帰るとしますか。」

テクテクと5人は森の道？を戻つて森の外に出ます。

森を迂回する小道を辿るとお婆ちゃんの小さな家に到着です。

早速、暖炉に火を起してポットを乗せるとお茶の準備をします。

お茶は何時ものようにライムが入れます。

とんでもない1日でしたが、暖かいお茶を飲むとそんな疲れも飛んでいきます。

「さて、そろそろ依頼の報酬を上げないとね。」

お婆ちゃんはそう言つと、服のポケットから銀貨を一枚取り出してサンディに渡しました。

「それでだね、今回の灰色熊なんだが・・倒したのは私でなくリューイだ。あの灰色熊の討伐報酬は銀貨20枚。でも今持ち合せがなくてねえ・・だから、銀貨20枚に相当するものを上げようと思ふんだが・・」

「いいですよ。サンディが貰つた杖だって、結構な値段でしょ。それでいいです。」

「そうかい・・でもねえ・・・うだ、あれを上げよう。ちょっと待つておくれ。」

お婆ちゃんはベッドの脇の木箱を開けると細い鎖を編みこんだ腕

輪を4つ取り出しました。

「これは、守りの腕輪だよ。付けると薄い魔法の防護幕が広がるんだ。そうだねえ・・鎖帷子程度かねえ。」

「それって、凄く高価なものだと思うのだが・・1個金貨一枚以上は確実だぞ！」

「でも、私には、此れが有るし・・」

お婆ちゃんは、着ている鎖帷子を指差します。その鎖帷子も魔法具ですから、確かに必要ないですけど・・

「それに、そんな魔道具は迷宮の深いところには結構あるんだよ。現に4つあるじゃろう。貰つとくれ。」

4人はありがたく受取りました。でも、リューイには必要ないんですよ。人間より遙かに頑丈・・いや柔軟ですからね。

「それじゃあ、これでしばらくお別れじゃ。もし、王都のギルドに行く事があつたら会う事もあるかも知れないね。あそこでは、『疾風エリア』と呼ばれてるから何かあれば呼んでおくれ。」

「またね。お婆ちゃん！』

4人はお婆ちゃんの家を出て村に帰つて行きました。

「さて、帰つてみたいだね。どれ、私も帰るとするか。』

お婆ちゃんは家を出ると玄関に鍵を掛けます。すると・・家は形を少しづつ変え始めました・・グニコグニコと形が変り、大きな岩に変化します。

「*baa - wif o mne!*」

聞きなれない呪文を唱えると、お婆ちゃんの足元に魔方陣が発生し短く発光し始めます。

次の瞬間、お婆ちゃんの姿は消えてしまいました。

どこかの部屋

「どうであった？」

「確かに噂の通りの実力です。」

「我が国に組込むことは可能か?」

「無理でしよう。彼・・いえ彼女を御するものほどの世界には居

らぬでしょう。」

「では、始末するのか?」

「それも、無理でしよう。」

「あすれば、どうする?」

「このままで良いかと。決して害には為らぬと思います。かえつてこちらの助けになるかと。」

「害がないのであれば、対応は任せる。」

「はい。」

サンディ達は村に戻るとギルドに向います。

ギルドの換金カウンターのお爺さんに夜叉と羅刹の換金部位を渡します。

ライムのバックからボロボロと牙が転がり落ちるのを見たおじいさんは吃驚します。

「これをどこで?」

「下の森の奥に一杯居たんだよ。」

「ちょっと、待つとれ。」

「? ?」

しばらくすると、マスターがやって来ました。

「おおー!おめえ達か。ところで、これなんだが・・この辺には居ない奴なんだ。」

マスターが夜叉と羅刹の牙を指で弾きながら言いました。

「お前達も気を付けた方がいい。この所、魔物の生息範囲が乱れている。今までの経験で判断したらとんでもないことになるぞ。」

「とりあえず、下の森には初心者注意の看板ぐらいは出すとする

か。」

お爺さんから受取つた換金額は銀貨5枚・・依頼額より大きいです。

家に帰り皆で楽しく夕食を食べ、暖かい暖炉の傍でリューアイの昔話を聞かせて貰います。

次の日の朝。ナナイ村に今年初めての雪が降りました。
これから若草の季節まで、ナナイ村の村人は深い雪の中で暮らし

ます。

ナナイ村の外へ

「行くぞ！」

「お姉ちゃん。がんばれ！」

雪国の楽しみといったら、スキーです・・いや、スノボーです。段々畠の道の雪を固めて畠の側面を曲線状に固めると丁度パイプを半分に切ったような形になります。畠をえつちらおつちら登ると、さあ、スノボーの始まりです。

リューイは少し心得もありましたし、姫のサポートもあります。たちまち村一番のスノボライダーになりました。

でも、なんでこの世界にスノボがあるのかって？

それは、とある冒険者が雪道を降りるのに、たまたま持っていた盾に乗つたという逸話があります。ですから、冒険者はスノボが出来る事が条件の一つになつてている、ギルドもあるということです。

リューイの後をルミナが、その後をサンディイが続きます。皆さん、まあまあの腕です。最後はライムですが、彼女はリュージュです。この方が凄いと思いますが、この村では評価の対象外です。

ひとしきり遊部と、皆さん雪だるまになつてます。

家に帰り、お風呂に入るとお母さんの夕食が待つてます。

この前の大猪で猟師株を沢山貰つてますから、お肉がたっぷり入ったシチュウを美味しく頂きました。

お茶を飲んだ後は、暖炉の前に輪になつてリューイの昔話が始まります。

「昔々、ある王国の王妃様に、赤ちゃんが生まれました。女の子です。そのお祝いに・・・」

今夜は「眠りの森の美女」みたいですね。

聞いてる方は相変わらずみたいでけど・・・

「そりゃー糸車の針を刺すと結婚出来るのだな・・・痛そうだな。

「一人だと相手が早く見つかるのね・・でも、ライムが居るから・

・」

「よかつたねえー」

お母さんも一緒に聞いています。そして、こんな話は聞いたことがない。この子は一体何処から来たの?って思つてたりします。

「そりだーお母さん。私達ね、ここの間、お婆ちゃんが仕事をしたんだよ!」

「え!・・・お婆ちゃんが村に来たの?」

「うん。お婆ちゃんからの依頼がギルドにあったの。」

「何か言つてた?」

「何も!・・でも仕事のお礼は貰つたよ。」

「そんなことあつたんだ・・」

「そういうえば、王都に来る事があればとか言つてたような気がする。」

サンディが話しに参加します。

「お婆ちゃんって冒険者だよね。強いの?」

お母さんはちよつと困ってしまいます。だって、とっても強いとは言えません。そんなこと言つたら、教えて貰うなんて言つ出せないとも限つません。

お婆ちゃんは冒険者ですが、もう一つの顔を持つてます。それは、

冒険者の監視です。

冒険者は強いのが普通です。でも、冒険者が悪事をしたら誰が止めるのでしょうか。

普通では止められません。それを止めるのがお婆ちゃんの仕事なのです。

国内のギルドを巡回しながらマスターと情報を交換し必要な措置を行うのが本当の仕事なのです。

やう言ひ意味では、冒険者〇冒険者なのです。

「そうね・・・ルミナさんくらいかな?」

当たり障り無いところを告げます。

「いや、私よりは上だ!」

「でも、リューイに助けられてたわよ。」

え!って感じでリューイを見ます。この子はお婆ちゃんより強い?信じられないって感じで見てます。実際強いです。多分この世界では最強でしょう。バックアップも頼る事ですし・・・

「どうひで、お母さん。お願いがあるんですけど・・・おずおずとサンディが切り出しました。

「あら?なにかな?」

「若草の月になつたら、私達・・・王都に行きたいんだけど・・・

「魔物の生態系が変化してるのでマスターが言つてたわ。裏の山でも銅竜が出るくらいだし・・・」

「お婆ちゃんも何かしてるとひだけど、私達も自分達で調べたいのよ」

多分そんな事だらうとは思つてたけど・・・
でも、村を出るなら、町や都市に行くよりも王都の方が心配ないかもしね。と思いました。

何てたつて、この子達のお婆ちゃんがいますから。

「・・・良いわよ。このまま村に居る方がお母さんとしては、心配無いんだけど・・たまには外も見た方が良いのかも。でも、2つ約束して頂戴。」

「一つは、王都に行つたら、お婆ちゃんに最初にこ挨拶する事。」

「もう一つは、毎年、銀色の月には村に帰る事。」

お母さんはサンディの前に指を一本づつ立てながら念を押します。

「判ったわ。約束する!」

「ヤツター!」

サンディ姉妹は大喜びです。

リューイもこの村しか知りませんので王都行きは嬉しい話です。

新しい情報が入ってくるかも知れません。

ルミナはその場では表情を変えませんでしたが、その夜、コンパクト型携帯通信機でロミナに王都へ行く事を得意げに報告してました。

次の日からは旅の支度です。王都まではずっと歩いていかなければなりません。馬車もあるんですが、4人分の馬車代はバカになります。

急ぐ訳ではありませんし、とこと歩いていく事にしました。

王都に続く街道は下の森に入る岐路を真直ぐに行けば出られます。街道に出れば、旅人目当ての宿場町があります。ほほ、1日程度歩けば次の宿場町に辿り着けるようになつていいようです。

宿場町のギルドで依頼をこなしながら旅を続ければ旅費の心配も少なくなります。

どんよりとした雪を降らせる雲が少なくなり、お口様が顔を出す日が多くなった、ある日。

サンディ達は未だ雪が解けきれないでいる通りに出ました。

お母さんは家の扉の前で4人を見送ります。

「「「では、行ってきます!」」」

「銀色の月前には必ず帰るのよ。それと、お婆ちゃんに宜しくね。

!」

村の十字路までは、振り返りながらお母さんに手を振ります。十字路を右に曲がるとそこは、もう新たな冒険の入口です。

女の子の依頼（1）

まだ雪が残る段々畠の道を4人はトコトコと降りていきます。森への岐路に差し掛かった時、皆で振り返ると雪山の麓にナナイ村が小さく見えました。

これから半年以上、冒険の日々が待っています。もう、後ろを振り向かずに、真直ぐ街道を田指して歩き出して行きます。

朝早く家を出て、ちょっと疲れたかな？って感じたころ、街道に出了しました。

さすが街道と言うだけあって、石畳が敷き詰められています。でも、車のわだちがしつかりと石畳を刻んでいます。此処まで磨り減らすにはかなりの年月が使われたでしょう。そんな、由緒正しい街道です。

「この街道を右に進めば王都に行ける。街道の出発点は王都だから、この道を辿つていけば間違うことなく王都に行けるのよ。」

サンディが物知り顔に話すのを3人は真剣に聞いています。

「後は、道伝いに歩いていけば、町にいけるはずよ。でも、その前に！」

ここでちょっと一休みです。

今回ライムは例のリュックを背負つてしません。皆と一緒に布製のカバンを肩から下げてます。

カバンの中から、パンを取り出し軽いお食事です。最後に水筒のお茶を一口、「クンと飲みました。

リューアイは、鋼の杖の上部のワッカにはハンカチを縛り付け、石付きには木の栓を捻じ込んでいます。でないと、杖を付く度にハン

ン、チャリンって音がするんですね。

他の3人も武器意外に木の杖をつきながら歩きます。身長より少し短い位の杖ですが、3本を組み合わせて布を巻くと簡易テントが出来上ります。

山裾の小さな丘を登ると今日の目的地となる町が見えてきました。放牧場の脇を通り、小さな小川の石橋を渡ると辺りは一面の畠です。今年の耕作が始まつたのか、畠の一部は耕された跡があります。

畠の中を街道は真直ぐに続いています。

所々に休憩用の広場が設けられています。馬車が数台程度休める
ような広場には、夏の日差しをさけるための数本の木立が立つてい
ました。

そんな休憩所を2回程利用して最初の町に辿り着く事ができました。

町の入口には、門番が数名待機しており、町へ入る旅人から税を徴収しているようです。

川ミナはそんなこと知らないよ
まして、風に通り抜けるとい

「ちよつと待て！・・・困るなあ、旅人の通行税は知ってるだろうに？」

「おいおい、何時から冒険者から通行税を取るようになつたんだ
い。後ろの3人も冒険者なんだが・・」

「…」 その言つてギルドカードを胸元から取り出します。

「・・・！ そ う な ら そ う と カ レ ド を 出 し て く れ れ ば 済 む も の を ・ ・

後ろの3人も行つていいぞ！」

門番さんはブツブツ言いながらも通してくれました。

「所で、宿は何処だい。」

「宿屋なら、この道を真直ぐだ。」

ありがとうつて門番さんに言いながら通りを真直ぐに歩いていきます。

「今のつて・・・」

「ああ、通行税ね。旅人が町に入る時の税金だよ。それで、町の石垣や、街道の整備をしてるんだ。町に入れば、とりあえず魔物や獸の心配をしないで済む。警護料みたいなものだと思つてる。」

「じゃあ、冒険者から税金を取らないのは何故なの？」

「町が襲われた時に役立つて貰いたいからさ。」

サンディとルミナの会話を、へへそうなんだ。つてライムとリュイイが聞いています。

旅はいろんな事が判るから勉強になるねーって、後ろの2人が話してます。

門番さんの言つた通り、宿は直ぐ見つかりました。酒瓶とベッドの絵の看板は結構目立ちます。

宿の1階は酒場です。まだ飲んでる人はいないみたいです。
カウンターの太つたおばさんのところへ行つて宿の交渉です。

「こんにちは。4人いいですか？」

「ああ、大丈夫だよ。1部屋ベッドが2つだから2部屋になるけどいいかね。」

「それでいいです。」

「じゃあ、朝飯込みで、1人銅貨30枚だ。」

ライムが4人分の代金を払います。

「部屋は2階だ。これが鍵だよ。」

おばさんはライムに2つの鍵を渡します。

「その前にギルドに行つて来ます。あと、夕飯を食べられる所はありませんか？」

「ここで良ければ、1人10エンタで食べさせるけど・・・」

「では、お願ひします。」

ライムが布のカバンからお財布代わりの皮袋を開けて銅貨40枚を支払いました。

ギルドは何処でも目立つ所にあります。流石、町のギルドだけあってナナイ村よりも大きな石造りです。

ギルドの扉を開いて中に入ると、中の構成はあまり変わりません。中央に広間があつて、テーブルと椅子が置いてあります。壁際には依頼板がありいろんな依頼書が張つてあるようです。広間の奥にはカウンターがありギルドのお姉さんがにこにこしながら4人を見てます。

「いらっしゃいませ。旅の冒険者ですね。カードを拝見しますので皆さん御提示願います。」

4人は胸元からそれぞれのギルドカードを取り出してお姉さんに渡しました。

お姉さんは4枚のカードを受取ると、何やら大きな日記帳みたいなものに書き込んでいます。

「・・・・！・！・これ、君達のよね。」

4人は一斉に頷きました。

「その若さで・・このランクで・・・今は緊急の依頼はありません。発生した時は真っ先に連絡したいんですが、宿は何処でしょうか？」

サンディイが場所を教えます。ああ・・あそこでねつて納得してくれました。

「最後に、この町を出る時に一度立ち寄つてくださいね。」

そう言つて4人のギルドカードを返してくれました。

4人は掲示板に行つて、適当な依頼を探します。旅はまだ続くのですから、短期、高額、簡単の3拍子が揃つたものを見つける必要があります。

「これなんか、どうかな?」

リューイが見つけたものは、猪退治です。畠を荒らして困つてゐみたいですね。

「これも、いいかも!」

サンディが見つけたのは、薬草採取です。でも薬草の周りに狼が沢山いるので取る事が出来ないようです。

「どれどれ、どちらの報酬が高いんだ・・・猪か。じゃあ決まりだな。」

その時、小さな女の子がギルドに入つて来ました。
カウンターまでとことこ歩いていくと、爪先立ちして、お姉さんにお話します。

「まだ、取つてくれるのは見つかりませんか?」

「まだ、ちょっとね。狼が沢山いる割には報酬が安いのかもね。」

「そうですか・・でもそれ以上は・・・」

女の子はしょんぼりしながら帰つていきました。

「何か、訳ありのようね。」

「お姉ちゃん。聞いてきてよ。」

サンディに残りの2人も頷きます。

サンディはカウンターのおねえさんの所に行つて訳を聞きました。

「あの子のお母さんが病気なんです。でもその病気には特効薬があるんですけど、あいにく町には切らしてまして・・・それで、依頼を出したんですけど、薬草の周りが何時の間にか狼の縄張りにな

つてゐるらしく、誰も取りに行かないんですね。」

「お姉ちゃん可哀相だよ。」

「健気な子供だ。」

反応はいろいろですが、此処はひとつ頑張らつかつて感じです。

「その依頼。赤い靴が受けます！」

「エツ！・・でもあなた達が・・・いえ！お願いします。」

早速お姉さんから場所を教えて貰い、明田早朝に出かけることにしました。

女の子の依頼（2）

ギルドから宿に戻ると夕食です。

根菜と燻製肉のじつた煮でしたが、今日一日歩いて来た4人には、とても美味しく感じられました。

でも、此処は酒場も一緒なんですね。

「おい、エエちゃん達こっちに来てお酌でもしねえか？」

そんな野次があつちこつちから聞こえますが、4人は完全に無視します。

「おいおい、何時まで待たせるんでい。おれはな、ドラゴン・ハンターのガイル様だ。冒険者なら敬意を示めせつてんだ！」

「そんな大そうなものなら、証拠を見せな！」

あまりにも煩いのでルミナがギロつて見ながら言いました。

「あ～ん？俺の言葉じゃあ信用できねえってか・・・これが証拠だ！」

いきなりルミナ目掛けて鉄拳が飛んできましたが、リューアにあっさりと拳が掴まれてしましました。

「へ～え。大した事無いのね。」

ルミナがそういった途端に、仲間の男が剣を抜いてリューアに打ちかかります。

その剣もリューアがあつさりと指2本で摘んだりします。

そして、拳の方はギュッと軽く握りホイつて手放します。剣の方は指で少し捻りました。もう鞘には戻らないでしょう。

2人は覚えてろつて言葉を浴びせると何処かに走り去りました。

食事の続きをすると、数人の男達が入ってきました。

「此処に、ドラゴン・ハンターを愚弄した奴がいると聞いてきた

んだが・・・

その言葉に、周囲で飲んでいた男達がサンティ達を指差します。

「お前らか？ドラゴン・ハンターがどうこいつ位置にいるか判つているのか？」

「判つてないけど・・・あいつ等本当にドラゴン・ハンターなの？」

「彼らがそう言つてゐるし、ギルドも今日ドラゴン・ハンターの一行が来たと言つてゐる。間違いないだらう。」

「じゃあ、ドラゴン・ハンターのライセンスはどうものか見たことがあるの？」

「知つてゐに決まつてゐ。カードの下の宝石だ。カードは偽造できねえから、カードで直ぐに判るはずだ。」

「じゃあ、これは？」

ルミナはリューアにおりでおいでをすると、近寄つたリューアの胸の中からギルドカードを取り出します。

そして、男達の目にひらひらと・・・

途端に男達の顔色が変わりました。

「これは、ドラゴン・ハンターの宝石。そしてドラゴンの討伐章・

・・間違いない！」

「失礼した。・・おい、あの二人組みを牢に入れとけ、とんでもない偽証だ。唯では出せん。」

大盛りに盛られたごつた煮をやつと食べ終えると今日はもうある事がありません。

早々と就寝です。疲れた体は直ぐに夢の世界に旅立たせてくれました。

次の日の朝早く、町から北の山に向いました。

宿屋のおばさんに簡単ながらもお弁当を作つてもらひ機嫌です。

「ねえ、薬草って何時もの薬草?」

「えーとね。・・・ケアやジギタじやないわね。・・クアル草つて書いてある。」

「どんなの?」

「待つてね・・膝ぐらいの高さで、茎は2本、葉は4箇所突起がある。つて書いてあるわ。」

それだけ特徴があるんだったら直ぐに判りますよね。

山道に入ると、ルミナとリューアに周囲を監視してもらい、サンディ姉妹はクアル草探しです。

特徴がある割には見つけづらいのでしょうか・・・でも、きのこなんかも、最初の1個は中々見つからなんですが、1個見つけると次々に見つけることが出来るんです。きっと同じなんですね。

「有った!」

ライムが飛びつくよにクアル草へ走りこむと同時に、ガアウ! つと何かがライムに飛びかかりました。

ブン! ドコツ! ・ バタ!

リューアの鋼の杖が一旋すると飛びついた何かが弾き飛ばされ近くの立ち木に叩きつけられました。

「狼だ。灰色じゃないが、群れがいるぞ!」

飛んでつた物体Xをジッと見てたルミナは皆に注意します。

ハウ・ガウ・ガウ・・

4人の周りに狼が段々と増えていきます。

「殺ル視かなさそうだぞ!」

ルミナはオニギリを構えます。

近くの大木を背にサンディ姉妹がバックアップ。前衛がリューアとルミナで防戦態勢です。

ガウ！・・・シユパツ！

飛びかかる狼をオニギリが両断します。

ハウ！・・・ドン！

横殴りにリューイの杖が当たります。

フュン・・グアア！

ライムのクロスボーグのボルトが狼の顔面を直撃しました。
狼は少しづつ後ろに下がると、キヤンキヤン・・鳴きながら茂み
の奥に逃げていきます。

「確かに、狼の群れが居るって言つてたけど・・ほんとに居たの
ね。」

サンディがそう言つて辺りを見ると・・有る、有るほんとに一杯
ありました。
とりあえず、両手に一杯取つてカバンに詰め込みます。
ついでに狼の牙も集めます。大事な換金材料ですからね。
そして、サッサと帰りました。また、狼が来るかも知れませんか
らね。

山道を降りて麓に出てきました。

この辺は眺めが良いです。遠くに町が見えますが、大分小さく見
えます。

ライムのお腹が、グーって可愛らしく鳴いたのを合図に昼食とな
りました。

葉っぱとハムを挟んだパンを食べ、水筒のお水を飲んでる時でし
た。

「・・・たすけて・・・」と遠くで聞こえます。

ルミナは慌てて、コンパクト通信機をパタンと閉じてカバンに入

れました。妹に景色でも見せてのかも知れません。

リューアイは生体レーダで周囲を探ります。

「追われるみたいだ。」

杖で右側を指しました。

林の中から、誰かが飛び出しました。

「助けてくれー！」

叫びながら、転がるように斜面を降りてきます。

グオオオオー！

林の木々を押し倒しながら大きな猪が飛び出しました。

背中に矢が2本刺さっています。

どうやら返り討ちにあつてるみたいです。

「ハッちだ！」

ルミナが男に叫びます。男は気付いたらしく、こちらに駆けてきました。

大猪も一緒に追いかけてきました。

サンディとライムは攻撃したくても男が邪魔で出来ません。
ルミナはオニギリを上段に構えた時です。

リューアイが男が躊躇して前のめりになつた僅かの隙を突いて、鋼の杖を投げつけました。

ビュ・ン・・・・ドス！！

ドオオオン！！

猪の頭を突き破り、杖の重量とスピードに負けた猪の巨体が一瞬浮き上がり転倒しました。
土煙が上がります。

サンディ達の頭の後ろには大きな汗がタラリと落ちてます。

「あの杖を真直ぐ投げるか？・・・普通出来ないぞ！」「

「あの時の猪よりは小さいね。」

「お姉ちゃん。凄い！」

お三方の反応にリューイはちょっと照れています。

「おめえさんが、やつたのか？・・・ありがたや、ありがたや・・・助かつた男に拝まれてしましました。」

男は散々4人にお礼を言つて町に帰つて行きます。
でも、リューイ達は、4人で猪の解体です。内臓はリューイが掘つた穴に埋めました。獸が来るかも知れませんからね。
リューイの杖に両足を結び着けて、ヨイショッと担ぎます。
そのまま、とことこ町に戻りました。

町の肉屋さんに行きました。

「あのう・・・これ、買つてくれませんか？」
サンディイがカウンター越しに話かけます。

「どれ？」

肉屋さんは秤を取り出しました。

ドン！

カウンターの前にリューイが大猪を下ろしました。

「ええーーー！」

肉屋さんが吃驚します。だつて、可愛らしい4人組みで取れるものはウサギぐらいだと思つてたからです。

「買い取れませんか？」

「買い取れる！・・・銀貨10枚でどうだ！」

「いいですよ。」

直ぐにお肉屋さんはお金を払います。だつて、どう見ても銀貨1

5枚以上はするのです。ちょっと低めに言つたのですが、それで相手は承諾したのです。気が変らぬうぢこ・・・です。

その足で、ギルドです。

ギルドのお姉さんに、クアル草を渡しました。

「量が判らなかつたので、この位で・・・」

「そんなには、要らなかつたのよ。でも助かつたわ。ありがとう。
・・はい。これが報酬よ。」

「これは、あの女の子へのプレゼントといつゝことで・・・」

「でも、依頼は依頼だわ。」

「では、依頼されなかつたことで・・・」

「そしたら、あなた達は1日ただ働きになるでしょ。」

「別の報酬がありましたので・・これ、換金してください。」

サンディは狼の牙を大量にカウンターに乗せました。

「ほんとに狼の棲家だったのね。・・・はい。これが代金の銀貨

3枚よ。」

「これでいいです。では女の子によろしく。」

4人がギルドを出て直ぐ、男がギルドに飛び込んできました。

「あの大猪を杖一振りで倒した奴がいるぞ。女4人で、その猪は
肉屋に吊るされてる!」

「何だと!」

ギルドの冒険者がぞろぞろと飛び出して行きました。

「別の報酬ね・・・確かに・・・でも、あれも討伐依頼があつた
はず。後で届けましょう・・・」

次の町へ

宿屋に帰ると、おばさんに宿泊代を払つて、もう一晩厄介になります。

早々と夕食を取つていると、ギルドのお姉さんが女の子を連れて入つてきました。

「あ！いたいた。この子がね。どうしてもお礼を言いたいって言うもんだからつれて来たんだけど‥‥」

「どうも、ありがとうございます。早速、お母さんに飲ませる」とが出来ました。見る見る熱も下がつて‥‥本当にありがとうございました。」

「そんなにお礼を言われると困るかな。‥‥よかつたね。良くなつて。」

皆うんうんと頷いてます。

「そうだ！貴方達が倒した猪なんだけど‥‥あれ、討伐依頼の対象なの。それで、これはその報酬よ。討伐の証拠が欲しかったけど、第3者の証言と肉屋のお肉で良しとします。」

ライムが受取った紙包みには銀貨6枚が入つていました。皆さんラツキー！って顔してます。

「ではこれで‥‥さつ帰るわよ。」

お姉さんは、小さな女の子を連れて帰えりました。

「お母さん元気になつて良かつたね。」

「うん。一石二鳥だね。」

「なにそれ？ライム判んないよ。」

「んーとね。鳥を取ろうと投げた石が、狙つた鳥に当たつた後で別の鳥にも当たつたんだ。それで、一石二鳥って言つんだよ。」

「へー・・偶然つて怖いね。」

そんな話をしながら夕食を終え、早々とお休みです。

「「」だ。」にいるつてギルドのねえちゃんが言つてたぞ！」

「おおい、酒だ。・・・それと此処にとんでもなく強い冒険者が居るつて聞いて来たんだが？」

「冒険者なら4人組みが泊まつてるよ。明日発つらしく早々とお休みだよ。」

「うりやー・・・遅かつたか。どうすりや強くなれるか聞きたかつたんがなあ・・・」

「おめえの頭じや、聞くだけ無駄じやろ。」

そうだそうだ、うるせいや・・・つと酒が入つた冒険者が騒いでいます。

そんな喧騒など気にせずサンディ達は眠つています。
もつとも、リューアイだけは起きています。だつて、睡眠不要に改
造されますからね。

(ねえ、姫さん。」に俺がいる理由つて何なんだ?・・・その内、
判るつて言つてたけど、まるで判らないぞ!)

(うーーん・・・説明するのが難しいので、もう少し待つて!でも、凄く切実な問題なんだよ。こんな世界が幾つもそのせいで滅び
ているの。今回は貴方が居るんで直接介入してるんだけど・・・)
(それと、姫さんの部下達はとりあえず大人しいの?)

(今んとこはね。・・・でも、虎視眈々と出番を狙つてるわ。機関
部の連中も何時の間にか小惑星に核パルスエンジン仕掛けたみたい
だし・・主砲部隊もメガ粒子砲の出力を制御するために徹夜続きで
シユミレーション繰り返してゐし・・樂観できない状態つてとこね。
)

(苦労してゐるね。將軍は大丈夫なの?)

(入院してゐる。頭痛に胃潰瘍に顎がはずれたみたいなの・・・)

(たいへんだねえ・・・)

「こんな話をしながら、夜を過ります。」

次の日、朝早く宿を出ます。また、おばさんにお弁当を貰つて満足そうな顔をします。

その足で、ギルドに行つて、町を出る手続きをしました。

「そう。行っちゃうのね・・・残念ねえ。」

そんな事をお姉さんは言つましたが、それはそちらの事情つてことです。

町の門で門番さんにお別れを言つて、次の町に向かいます。

まだ、若草の月が始まつたばかりです。遠くの山はまだ雪が沢山残っています。

朝日が昇るまでは大分時間が有ります。皆、マントの前を合わせて少しでも寒さを防ぎます。

街道を行く旅人はサンディ達だけです。

街道を歩き出して、最初の休憩所に着くころによつやくお口様が昇りました。

水筒のお水を飲んでいると、沢山の馬車が通ります。

その内の何台かは、休憩所で一息入れるみたいです。

サンディ達が座つているベンチみたいな岩の前にもう一台の馬車が止まりました。

太つたおじさんが降りて来ました。

「やあ、お嬢さん達は旅人かい。こんな朝早くから」「苦労さんだね。」

「のんびり歩くんで早く町を出たんです。おじさん達は商人なのならないからね。」

？」

「そうだよ。村や町を回る行商や。昨夜は野宿さ、宿代もバカに

そんな事を言いながら、広場のはずれのほうにコンロを降りして
これから朝食のようです。

サンディ達は商人と別れて、街道を歩き出しました。

次の休憩所は小川の近くにありました。

ここで、お弁当です。休憩所は、歩きの旅人に丁度良い間隔で設
えてあるようです。

すると、次の休憩所で休むと、その先に町が見えるはずですよね。
昼食を終えて街道を歩き出した途端、とんでもないものが眼に入
りました。

橋が壊れています。

川下に歩いて橋を探そうと思つたんですが、丁度良い物を見つけ
ました。

川岸に大きな立ち木があるんです。川幅は約10m程度。これな
ら、猿飛びで向こう岸に渡れます。

まず、サンディをお姫様抱っこにしてピヨンと立ち木の枝に飛び上
がると向こう岸にヒョイって猿飛びします。

次に体重を重力制御で軽くして走り幅跳びみたいに一気に川を跳
び越します。

そしたら次はライムの番です。同じ様にピヨン、ヒョイって対岸
に渡ります。ルミナは枝渡りの要領で同じ様に川を飛び越えました。
・・でも、行商のおじさんはどうするのでしょうかね。

街道を余所見しながら歩いていきます。

でも、一面畑であります、珍しいものはありません。遠くでお百姓
さんが牛で畑を鋤いてるぐらいです。

てくてく歩くとまた休憩所です。遠くに次の町が見えてきました。
ここで、しばらく休憩を取ると、また歩き出します。

今度は、町が見えるためなんとなく元気が出ます。

やつと町に着くと、前と同じように門番の人にギルドカードを見せて中に入ります。

とりあえずギルドに向いました。

ギルドで登録を済ませます。そして、街道の橋が壊れている事を報告します。

橋の修理はギルドの仕事です。依頼を出して誰かにやつてもらうのです。

依頼板を見て、明日の仕事を探しします。

「これなんか、どうだ。・・護衛求む。銀貨20枚。サムズ市まで。食事は当方持ち。」

「いいわね。でも用心棒って？」

「金目の商品が多いと商人は護衛を雇つんだ。基本は馬車だから、歩かないで済むぞ。」

「ライムはそれにしたいな。1日歩くと、疲れちゃうんだもの・・」

「

という訳で、カウンターのお姉さんに詳細を確認します。

明日の朝、さつき入った門と反対の門の所に集合ということです。商人は1人でなく、10台の馬車が連れ立つた商隊ということでした。もちろん、護衛の4人は馬車に乗る事が可能だそうです。早速宿屋に行き、後はゆっくりお休みです。

馬車の旅

次の日の朝早く、町の西側の門に出かけます。

今日からサムズ市まで移動する商隊の護衛を行つためです。

門の近くには大勢の人達が集まっています。

何人かで歩き出すもの、馬車を走らせるもの、様々な人たちがいました。

「あれじゃない！」

サンディイが沢山の馬車が集まつた一角を指差しました。

ルミナがスタスターとそこに歩いていきました。

「私達は商隊の護衛をするために来たのだが、依頼元は貴方達でよいのか？」

「ああ、ここでいいよ！」

恰幅のいいおばさんが馬車を降りてきました。

「お前さん、1人かい？」

「いいや、4人だ。」

ルミナはリューアイ達に手を振つて会図します。

3人はルミナの所に駆け寄ると、おばさんに挨拶をしました。

「へ～え・・女の子ばかりの冒険者かい。戦士が2、魔法使いが1、補助が1・・仲間としては問題無しだねえ。」

「それでは、よろしくお願ひするよ。ドルコイ、サイネスちょっとおいで！」

おばさんは大声で名前呼びました。

「なんだ。サミーネ。」

太ったおじさんとやせたおじさんがやつてきました。

「サムズまで護衛をしてくれるお嬢さん達だ。」

サミー・ネと呼ばれたおばさんは、リューイ達の紹介をしてくれました。

商隊は、3家族で編成されており、サミー・ネおばさんが取仕切つてるみたいです。

10台の馬車に夫婦、息子や娘達が分乗し、馬車を動かしているようです。

「それじゃあ、出発したいが……貴方達をどの馬車に乗せるかねえ……」

サミー・ネおばさんが迷つてているようなので、ルミナが経験から割り振ります。

リューイが先頭、ルミナが最後尾、サンディーとライムは一緒に真ん中です。

先頭馬車はサミー・ネおばさんが手綱を取っています。御者台にリューイは一緒に座りました。

高いところなので周りが良く見えます。

「みんな！・・・出発するよ！・・・」

御者台上に立ち上がり大声で後ろの馬車におばさんが叫びます。そして、石畳の街道を「トコトコト」と馬車は走り出しました。

街道を歩いている時は気になりませんでしたが、街道の道幅が所々広くなっています。

不思議そうに見ているリューイに、あれは馬車がすれ違つ場所だって、おばさんが教えてくれました。

馬車は徒步で歩く旅人の2倍程度の速度で進んでいます。

朝早く出発した徒步の旅人を追い抜いて行きます。途中の休憩所も2つ素通りします。

そして、3つ目の休憩所で昼食になりました。

「こんな食事で申し訳ありません・・・
ライムより少し年上の女の子がスープ鍋と硬いパンを持ってきてくれました。

「上等だよ。では、頂こうかな。」

ルミナはそう言って、バックの中からお椀を取り出すと、鍋からお玉でスープを掬います。

皆も同じようにスープを貰い、パンを頂きました。

「何も出ないといいね。」

「いや、その内なにかありそうだ。・・銀貨20枚はこの種の依頼では破格なんだ。街道の情報を知つて慌てて依頼したみたいだ。」

「何があるの?」

「そこまでは判らん・・でも商人達の情報は確かだ。」

そんなことを話しながら昼食を食べています。

リューイが休憩所の周りを見ると遠くに村が見えました。でも、この速度で進むと今日の宿泊場所は別の所になります。

「わあ、出かけるよー。」

サミニーネおばさんの声でまた馬車は街道を走り出しました。
街道をひたすら西に向います。さつき見た村に入りましたが、村の中央を走り抜けます。

次の休憩所も素通りです。そして村を出て2つ目の休憩所で馬車は止まりました。

休憩所の近くには泉があり、少しあなれていますが林もあります。

「今日は、ここで野宿だよ。女の子は水を汲みな。男の子は焚き木を取つて来な！」

サンディ達は食事のお手伝いです。リューイヒルミナはリューイ達より年下の男の子達と林に焚き木を取りに行きました。リューイ達が戻るころには野菜と干し肉のじつた煮が出来上がつてました。

取つて来た焚き木を焚き火の脇にどかつと置いて、夕食です。

その夜は、リューイ達と3家族の旦那さん達が交代で見張りを行います。旦那さん達とリューイが最初の番をして夜遅くにルミナ達と交替します。

基本、リューイは眠らなくても問題ないので、ルミナ達と交替した後でも目を閉じて寝たふりをしてます。

「リューイお姉ちゃんのお話が無いとつまんない・・・」

「そうだな・・・今後の為になると何時も聞いていたんだが・・・」

「でも、リューイの話つて、一度も聞いたことが無いのよ。一度ぐらい聞いた話が出てくるかなって思つてるんだけど・・・」

それはそうです。だって、リューイのお話はこの世界のお話では有りません。でも、理解出来るつてことは不思議ですね。そんな時です。

カサ・カサカサ・

何かが動く音がします。

リューイは目を開けると素早く生体レーダで周囲を確認します。

目の前に展開された半透明のレーダ画面に黄色の点が近づいてくるのがわかります。

黄色は、まだこちらに敵意を持たない印です。

サンディ姉妹は臨戦態勢ですが、ルミナはまだオーギリを持つてもいません。

「どうした？」

ルミナが杖を持つてキヨロキヨロと辺りを見ているサンディに声をかけました。

「何かいる！・・でも何処なのかわかんない！！」

「大丈夫だ。敵意は感じられない・・・」

ルミナも判つてゐるようです。攻撃を仕掛けられない限り、こちらから攻撃する必要は有りませんからね。

翌朝、野宿した周囲を確認すると、犬の足跡が見つかりました。

近くの村からでも夜になつて逃げ出して来たのかも知れませんね。
朝食をテキパキと取つてから出発です。昨日取つて来た焚き木の残りは馬車の下にある網に乗せてあります。焚き木が取れない場所で夜を明かすための準備みたいです。

昨日と同じ様に、休憩所を飛ばしながら進みます。

そして、お昼は、途中の村で取りました。

4人の昼食代はサミーネおばさんが払いました。食事込みの護衛報酬の1つですからね。

昼食休憩を利用してギルドに行つて情報収集です。

ナナイ村と同じ様に小さいながらも石造りのギルドです。

カウンターのお姉さんに、街道の情報を聞くと、この村と次の町の間で盗賊騒ぎがあつたとか、もっと先では魔物が積荷を奪つたとか、・・色々話を聞くことが出来ました。

いよいよ、護衛の本領を發揮せねばならないのかも知れません。

そんな話を聞かされたので、帰る途中の武器屋で炸裂ボルトを5本購入しました。しめて銀貨1枚です。

リューイ達が戻ったことを確認して、馬車は出発します。

「どうだつたね？」

サミーおばさんがリューイに尋ねます。どうやらギルドに行つた事を知つてるみたいです。

「この先が怪しいみたいだ。出来るなら夜は町に泊まりたいが・・

「やつぱりね。商人仲間も同じ様なことを言つてたよ。でも、この先はしばらく村が無いんだよ・・今夜も野宿だよ。」

サミーおばさんは馬車を早めます。少しでも条件の良い休憩所を見つけるために。

メギドの火

小さな村で昼食をとった後は、馬車をひたすら走らせます。街道のこの辺りは、林が迫っているので野宿するには少し物騒だからです。

馬車を驅るサニーおばさんは、もう少し行くと山裾を離れ、広い丘陵地帯になると教えてくれました。

ガラガラ～

突然、後ろの方で大きな音がしました。
リューイは御者台から身を乗り出すように後ろを見ると、馬車の1台が転倒して積荷を街道にばら撒いています。

「馬車が！」

「ドオーオ！！」

リューイの声で、おばさんは馬車を急停止しました。

馬車の車輪を固定して、後ろの様子を2人で見に行きます。

「こりや、時間がかかるねえ・・・荷も多いし、他の馬車に分配する事も出来きやしない。予備の車輪を積んでる馬車は誰だい？急いで修理するよ。」

リューイは、周辺を急いで確認します。

今の所は、生体レーダに反応はありません。

ルミナとサンディ達も馬車を降りてきたので、3人に車列の前と後ろの見張りを頼みます。

馬車の修理はの2人のおじさんが後ろの方の馬車から車輪をこじろ
こうと転がしながら持つてきました。

その間におばさんの指示で横転した馬車から荷物を奥さんと子供達が運び出します。

空荷になつた馬車を、リューイとおじわん達が一緒にになつて、エイーつて元に戻します。

最後はリューイ一人で馬車を支えている隙に、おじさん達が車輪を取り付けました。

「あんたが、力持ちで助かつたよ。」

おばさんから、お茶を受取つたリューイは苦笑いで誤魔化します。

「荷を積んだら出発するけど、どうやら車軸にヒビが入つてるよ。」

うだ。あまり早くは進めないねえ。」

がつかりした様子でおばさんが、子供達の荷上げの様子を見てます。

「随分頑丈な梱包ですね。」

「判るかい。あれは、東方から船で運ばれてきた食器だよ。土で出来てるらしいんだけど、ガラスの光沢があるのさ。貴族達に飛ぶように売れるんだけど、壊れやすくてね。運ぶのに苦労するよ。」

多分、陶器か磁器なんだろうとリューイは思いましたが、この世界にもあるんだ。つて少し懐かしくなりました。

ルミナが後ろから走つてきました。

「だいぶ、馬車が連なつたぞ。少し煩くなつてきたが、まだ掛かりそうか?」

「いや、もう直ぐ終わりだよ。・・そうだね、この先の街道が広くなつたところで先に行つてもうおつかね。悪いけど、後ろの奴らにそう言つとくれ。」

そんな事を言つてゐる内に荷上げは終わつたのです。

「それじゃあ、出発するよ。」

サリーネおばさんの合図で車列はのろのろと街道を進み出しました。

少し、進むと街道が広くなつたところにさしかかりました。

おばさんは馬車を道の端に寄せます。車列が全て道に寄ると、後の馬車が次々と追い越していきます。

だいぶ、後ろに馬車が居たみたいです。

すれ違つ馬車は、大丈夫かい？・・・気をつけてなーなんて声を掛けてくれます。

商人同士の連帯感といつか思いやりというか・・でも、知らない人達が心配してくれるのは嬉しく思つたりします。

後ろの馬車がいなくなつたことを、最後尾の馬車からルミナが手を振つて知らせてくれました。

おばさんは馬車を出発させます。

村を出る時は馬車の速度も結構速かつたのですが、今は歩くより少し早い程度です。

山裾に続く、森や林を真近に見ながらのりと馬車は進んでいきます。

リューイは生体レーダをずっと展開していますが、今の所反応はありません。

山裾を少し離れた所に休憩所がありました。

今日はここで野宿です。

近くの森はありますが、今のところ反応はありません。

でも、心配なので、男の子達が薪を取りに行く時には一緒についていきました。

その夜、サンディ達と交替してルミナと焚き火の番をしていると、生体レーダに反応が有りました。

「・・来たよ！」

「ああ・・・凄い殺氣だ。森からだな。」

「サンティ達を起してくれ。俺はおばさん達に連絡する。」

2人は手分けして皆を起します。

ドルコイとサイネスおじさんは小型の弓を持つてきました。おばさん達は鍋やフライパンです。

おばさん達は子供達を馬車から離れた藪の中に隠しました。

「相手は、森からやつてくる。数が多い。盗賊か、魔物かはまだわからない。」

リューイが状況を畳に説明します。

「方向が森なら、馬車を背にして戦えるわけね。」

「リューイと私が街道で戦う。サンティ達は馬車の影から援護だ。サミーネさん達も援護してくれると思うがたい。」

テキパキとルミナが指示を出します。落ち着いて指示を出すところを見ると、安心出来るんですね。でも、赤い靴の本当のリーダーはリューイなんですけど・・

焚き火に薪を沢山入れて少しでも周囲を明るくします。ドルコイさんが簡単な松明を何本か作ってました。

戦闘が始まつたら、街道に投げて周りを照らし少しでもリューイ達の戦闘が楽になるように考えてたみたいですね。

街道に出たリューイは鋼の杖を構えます。

「森の間際まで来てる！」

「ああ、盗賊じゃないな。・・魔物だ！」

ルミナがオーギリを肩を回すよつてしながら抜いて構えました。

ギャアー！！

手に棍棒や、小型の剣、斧等を持ったオークが、わらわらと森か

ら叫び声を上げて飛び出します。

「宝をねらつてきたのか？厄介な奴らだ。・・リューアイ皆殺しに
しろ。こいつ等、人は食べるし、女は慰みものだ！」

最初のオークをシユパツとオニギリで切り裂きながらルミナが叫
びます。

リューアイも鋼の杖を回転させながら次々とオークに、その杖を叩
きつけていきます。

馬車の後ろから、松明が街道に2本、3本と投げ込まれました。
明るくなつた街道に、オークが舞っています。

ズドオーン！と音がして何匹かのオークが吹き飛ばされています。
ルミナの魔法とサンディの爆裂ボルトのようです。

馬車に近寄つたオークはドルゴイさん達の「矢によつて倒されて
いきます。

「しかし、とんでもない数だな・・リューアイ何とかできないか？」

（姫さん・・姫さん。緊急事態発生！）

（状況は、判つてるわ。・・・メガ粒子砲で森の際を攻撃します。
後15秒後に攻撃可能！攻撃最終命令は貴方に任せます。）

（え！）

（艦首方向最終調整！・・メガ粒子砲、最低出力で発射シーケン
ス開始！・・目標GPSで最終補正！）

（ええ！）

（メガ粒子砲発射後の環境測定用無人探査機射出！）

（えええ！）

一生懸命、オークと戦いながら事態の進捗に着いていけないよう
です。

（メガ粒子砲発射オールクリア。リューアイ！合図よろしく！）

はあ～っと息を吐きます。一応、自分達の事を考えて準備してくれたみたいなんですけど・・どんなことになるやら考えただけでも気が重くなります。

「皆良く聞け！・・今までにない術を使う。森の間際を攻撃するから、とりあえず何かにしがみ付け！・・」

リューアイは大声で皆に注意します。

リューアイは急いで回りのオークを片付けました。次のオークがやつてくるまでに少し間が開きます。

「天、我の願いを聞き地上の悪を滅ぼしたまえ！・・【メギドの火！】」

「ドドオーン！・・

その言葉と同時に、天空から眩い紅蓮の光が降り注ぎ、森の一角が爆発しました。

「ドドオーン！・・・・・ドドオーン！・・・・・ドドオーン！・・

さらに、光が何度も振り注ぎ周囲を爆発させます。

ルミナ達は咄嗟に馬車にしがみ付きましたが、激しく大地が蠢きます。

「何なのこれ・・・・

サンディイが泣き声を上げてます。

おばさん達は地べたに尻餅をついて馬車の車輪にしがみついてます。くわばら、くわばらの状態です。

そんな中、リューアイは一人で動けずにいるオーク達を葬つてきます。

地面の振動が収まった時には、動く事が出来るオーク達はいません

でした。

リューアイは周りを見ながら生体レーダでも敵がないことを確認します。

完全にオークの群れを葬つたようです。

（残存放射能反応無し・・メガ粒子砲攻撃に伴う環境変化は認められず・・リューアイOKだよ！）

（ありがと・・・でも、次は穩便なやつでお願いしますね・・）

（考えとくわ。・・・わあ、皆一・宴会だよ。将軍は寝てるから飲み放題ね！！）

なんか、遠くからオオー！つていう声も聞こえています。

「痛たた・・何時もながらとんでもない術を使うな・・味方で良かつたよ。」

ルミナが馬車に肩でも打ちつけたのか痛そうに歩いてきます。

「お姉ちゃん・・・」ヒチが死ぬかと思つたよ～・・」

焚き火の方に歩いていくと、ライムが叩口叩口と馬車の下から這い出していました。

皆、体のあちこちを押さえながら、イテテテ・・つて言ひてます。どうやら、着弾と爆発の振動であちこちぶつけたみたいですね。

「イテテ・・いや～参つたよ。あんな魔法は始めて見るね。しかし、とんでもない威力だ。」

サミー・ネおばさんが腰を押さえながら言いました。

今は未だ見えてませんけど、明るくなつたら森の惨状を見てまた吃驚するんでしょうが、今はそんなことは誰も知りませんからライムが入れてくれたお茶を飲んで、とりあえず一息入れています。

サムズ市到着

次の朝です。

皆さん、眠りから覚めて・・そいいえれば昨夜は・・つて周りを見た途端、吃驚します。

だつて、昨日の夕方には休憩所の近くまで迫っていた森が跡形もありません。

でつかい穴ぼこがあちこちに開いてます。穴の周りにはオーケの骸があちこちに散らばっています。5体満足なものはあります。そして少し煙が出てるところもあります。

「あれって、夢じやなかつたのね・・

サンディが無表情な顔で言つてます。

「とんでもねえな・・王宮魔道師でもここまではしないぞ。確か【メギドの火】って言つてたな。どんな火なんだ?」

ルミナもブツブツ言つてます。

「まあ、とりあえずは良かつたよ。あんたがいなけりや、今こつして吃驚してもいられないからね。」

反応は色々ですが、とりあえずはOKみたいです。

みんなでオークの残骸を調べて換金材料を探しましたが、何も持つてなかつたみたいです。ちょっと残念でしたね。

馬車の調子も悪いのでぐずぐずしてゐるわけには行きません。みんなで朝食を食べて、次の村に出発です。

「コトコトと荷馬車は走ります。歩くより少し早い程度ですが、今所車軸の方は大丈夫みたいです。

昼過ぎには、次の村に到着しました。

早速、荷馬車の修理です。上手い具合に作り置きの車軸がそのま

ま使えるみたいで、修理に時間は掛からないとのことです。

とりあえず、リューイ達は村のギルドにオーク討伐の報告に行きました。

「ええーー！あのオークを全滅させたんですか？」

カウンターのお姉さんは信用してくれません。

「ああ、やつつけたぞ。ついでに地形も変ったけどな。」

「あのオーク達には報奨金が掛かってまして・・・」

「それは、要らない。他の依頼のついでにやつたまでだ。ちなみに使つた魔法は【メギドの火】だ。それ以外ではあるような惨状は起きない。森の一部を消しちまつたから、報奨金で相殺だ。」

呆気に取れれている内にギルドを後にしました。

馬車に着くとサミーネおばさんが馬車に弁当を配つています。サンディ達も受けとつて馬車に乗り込みます。

馬車に揺りながらお弁当を食べるのも気持ちがいいものです。遠くの景色を眺めながらパクパク食べているとおばさんがお茶をポットから出してくれました。

「いやあー女の子ばかりの冒険者だからどうなるか心配だつたけど、やるもんだねえ。後、1泊野宿をするとサムズ市に着くよ。そしたら、お別れだけど、チームの名は何てこうんだい。次も頼みたいからねえ。」

「・・赤い靴って言つんです。」

「女の子らしい名前だねえ。そういうばあ赤い靴を履いてるんだ。へへえ・・」

おばさんは昨夜のオークを退治出来て機嫌がいいみたいです。

街道と都市について色々教えてくれました。

そして、リューイ達が王都に行くことを知ると、カレミーという宿を尋ねるよう言いました。

「私の紹介だと言つんだよ。それで泊めてくれるから。」
きっと知り合いの宿だろうと思い、解りました。と答えます。

山裾を遠く離れた休憩所が今晚の野宿場所です。

明日はサムズ市に到着します。そんなことを皆さん考えているようで、ちょっとウキウキした雰囲気です。

でも、4人は昨晩のオーケ襲来を思い出して、しつかり焚き火の番をして夜を過ごしました。

次の日、朝早く馬車を走らせると、昼過ぎになつて、遙か彼方に大きな建物が見え出しました。

サムズ市にある教会の尖塔です。

夜は尖塔に明かりが灯り、遠くを通る旅人の目印になります。ちよつと灯台みたいですね。

サムズ市に近づくにつれ高い城壁が見えてきました。サムズ市は商業都市です。貴族は居りません。一番偉い人は市長でしかも商人なんだそうです。

貴族がないので兵隊もおりません。しかし、高価な商品はある。・・・ということで高い城壁に囲まれています。

夕方にはまだ早い時間にサムズ市の東門をくぐりました。
門をくぐったところで、門番による積荷の検査です。

やはり、違法な商品もあるらしく、馬車1台1台を入念に検査します。

検査が終わると、サミーネおばさんが通行税を払います。積荷はここが終点なので税がかかりません。リューイ達も冒険者の特権で税免除です。

サミーネおばさんは税を払い終えるとリューイ達の所にきました。

「『』苦労だつたね。オークの時はもうだめかと覚悟したんだが・・・いい酒のさかなさ。はい。これが報酬だよ。そつちが空いてる時はまた利用させて貰つよ。」

おばさんはそう言つてリューイに銀貨20枚を渡しました。

サミニーネおばさん達と別れると、リューイ達はギルドに出かけます。

さすがに市だけあって、いろんなお店が通りに店を出しています。きっと明日はサンディ達に連れられてショッピングになりそうです。十字路を2つほど過ぎると立派な石造りの2階建ての建物が見えてきました。ギルドの看板が扉の上にかかりています。

扉を開けて中に入ると、広いですがいつもギルドの風景です。カウンターのお姉さんのところに行つて登録を済ませると、依頼板のチェックです。

「西に行くような依頼は無いみたいね。」

「早々あるものじゃない。少しの間、このサムズで休息して、また旅に出よう。」

「ライムも歩けるよ。もう大丈夫だよ。」

3日程でしたが馬車の旅は結構楽でした。また歩くのかと嫌な気持ちもありましたが、目的地は王都です。まだ、半分も来ません。

「これなんか、面白そうだけど・・・

「どれどれ・・ジギタ草至急求む。20本以上必要。報酬は銀貨1枚。」

「率は良いけど、今時分生えてるのかな?」

「2・3日はサムズに居るんだし、気晴らしに出かけるのもいいかも。」

「でも、時期はずれだから依頼を受けないで出かけよ。」

ギルドを出て適当な宿を探します。

宿はギルドの田の前にありました。酒場と兼用の宿です。

2泊分の宿代を払うと、酒場の隅で食事を出してくれました。

「それでよ。森のオークが全滅した。つてことだ。」

「そんじゃ、あの森のあたりはもうあぶなくねえってことだな。」

カウンターでお酒を飲みながら男達が噂話をしています。

「しかし、どんな技なんだ。森が無くなるような魔法は聞いたことが無いぞ。」

「若い娘っ子の4人組みらしいぞ。ギルドの噂ではな。」

「ほう・・しかし、それは無いな。王国の宫廷魔道師あたりが出張ってきたんじゃないかと俺は思つぞ。」

「いや、ギルドの話だと、いやに具体的だったな。剣を背負った娘に、鋼の杖を持った娘だそうだ・・・丁度あの4人組みみたいに・・！」

リューライ達は食事を終えて、部屋にかえつてお休みです。
とんとんと階段を上がつていきます。

「あいつ等か？」

「あいつらだ。しかし・・魔法使いには見えんな」

使ったのは魔法じゃないんですけど、この世界の人には魔法と映るんでしょうね。

今夜は、久しぶりのベッドとフットンで寝られます。野宿と違つて安心して皆さんお休みです。

オバケ退治

トコトコと4人が森へ行く小道を歩いています。ジギタ草は森の木の傍によく生えています。そんな訳で近くの森に行つて探す事にしました。

途中で木こりのおじさんと会いました。

「おめえら、何処へ行くんじゃあ？」

「森に行って薬草探すんだよ。」

ライムが元気に答えます。

「森にや、でつかいオバケが出るんじや。おめえら、氣イつけてなあ。」

「「ハア～イ！」」

木こりのおじさんと別れ、4人は森に入つていきました。オバケって、あれだよな・・・この世界にもいるんだろうか?なんてリューアイは考えてます。

「オバケって何?」

リューアイは、ライムに聞いてみました。

「え~とね。いろんな種類がいるけど・・・大きくて、口がこんなので・・・目がドドーンとしてるんだよ。」

「?/?/?」

どうやら、リューアイの考てるオバケと根本的に違つてゐようす。まるで怪物です・・・あつてるかも!です。

「オバケつて倒せるの?」

今度はルミナに聞いてみます。

「ああ、倒せるぞ！いいか、上から下にじぶつた切るんだ。いいな。

」

此処まで来ると、サンディにも聞いてみたくなりました。

「オバケってどこにいるの？」

「ん~とね。いろんなところにいるけど、普段は木の上かな。」

絶対、お化けと違います。でも、今回はジギタ草を集めなければなりません。上手くいけばオバケに合えます。

森の木の根元付近をあつちこつち探し回ります。

でも、やはり季節が早いんでしょうが、なかなか見つかりません。

「もつちよつと、日当たりの良い方に行つてみる？」

サンディの提案に皆で少し東に移動しました。

まだ遠くの山は雪が残っていますが、この辺りはぽかぽかと暖かです。

「あつた！・・・でも小さいよ。」

最初の一本はライムが見つけました。

確かに小さいですがギザギザの葉はジギタ草の特徴です。

辺りを探すと・・・あるわあるわ・・・あつと言ひ間に20本以上が集まりました。

「この辺は暖かいのね。ナナイ村だと、新緑の月にならないと取れないんだけど・・・」

サンディは感心します。

「さて、昼も過ぎたことだし、引き上げるぞー。」

ルミナが号令をかけます。

皆、はーい！って返事をしてますけど・・・

ガサガサつて森の中を歩いていきます。西に真直ぐ歩けばさひきの小道に出るはずですからね。

ガサガサ・・ガサつて進んでる時です。

ピギヤー！・ピギヤー！・

「・オバケだ・・」

ダダダアーッて4人は逃げ出します。リューアイもオバケつてどんなの？って思つてますけど、付き合つて逃げ出します。

ピギヤー！・ピギヤー！・

段々と声が大きくなつてきました。

「逃げ切れんか・・・皆！殺るぞ！・」

ルミナはそう言つとオニギリを引き抜いて構えます。

サンディ達も覚悟を決めたようです。

リューアイは良く判らないけど、取り合えず鋼の杖を構えます。

ガサガサつと木立がざわめいたかと思つたら、木立の方から首がニユーッと降りてきました。

ピギヤー！・

二ワトリのでっかい頭ですが首が異様に長いです。

「ヤバイ！オバケの目が攻撃色だ。来るぞ！」

ルミナはそう言うなりオニギリを二ワトリの頭に振り下ろしましたが、首がヒヨイって曲がつて当たりません。

オバケが首を回しながらサンディに迫りましたが、サンディは魔法の杖で、えい！つて火炎弾を頭にぶつけます。

ボカン！ツて軽い炸裂音がしましたがオバケは気にした様子もあ

りません。

「ルミナー弱点はないのか？」

「こいつは、キメラなんだ。鳥と蛇とトカゲを合成した生き物だ。とにかくしぶとい。先ず、頭を落として、それから胴だ。胴は木立の上方にいるはずだ。」

リューイは猿飛びで木立の方の枝まで飛び上りました。

そこには、大きなトカゲが木々に足をかけています。首は蛇になって木立の方に伸びています。

「ドーザリヤ！」

鋼の杖をトカゲの背中に叩きつけましたがボヨーンと跳ね返つてしましました。

とんでもない弾力です。

(姫さん！聞こえる？)

(感度良好！！)

(あれ・・使いたいんだけど・・高いところでも大丈夫かな?)

(フンフン・・確かに使い所だわね。大丈夫よ。いい訓練になるでしょう。)

(それで、下に仲間がいるんだけど・・・)

(大丈夫よ。20m上空から出現。落下しながら長剣の一撃。しかしる後に地上2mで回収。これでいいでしょ。)

(OK!)

(では、最終命令はそっちでお願い。・・・てめえら、出番だぞ！準備はいいな！！ オオオオ！！！)

(だいじょうぶだよね・・・たぶん・・・)

「皆、一時避難少し離れる！――」

【レギオン！――】

ドッカーン！と音「うお」とが響き渡ると、（ウワーー！）といつときの声が上空から響くとともに、抜刀したローマの戦士風の鎧を着た集団で飛び出します。

戦士達は落下しながら、オバケの胴を作っているトカゲに、すれ違いざまに剣を振り下ろします。

バシュ！バシュ！…と何かを切りつける音が立て続けに響きます。血飛沫で、あたりを霧のようです。

戦士達はそのままの速度で落下するかと思いましたが、地上2mぐらいに発生した空間の歪みに消えて行きました。最後の1人がこちらを振り向きピースサインを出してます。

ドダーン！と木立の上からオバケが落下してきました。
リューイは走り寄つてまだギャピーつて鳴いているニワトリ頭に
鋼の杖をボガ！つて叩きつけました。

オバケ殲滅です。

あっけに取られていた3人ですが、サンディ達は一度見てるんですね。

「なんだ。あれは？」

「お姉ちゃんの魔法だよ。【レギオン】って言つらいいけど…」

「リューイは戦士を、1個中隊何時でも出せるのか？」

「いや・・・どうしようもない時は、出すけど・・・あまり出したくないけど・・・」

「戦士だか、魔道師だか解らないが、王都ではあまり使用しないほうが良いぞ。王宮魔道師でさえ今の技は再現できん！」

なんだかんだ言いながら、オバケの換金部位を探します。ニワトリ頭のトサカがそれです。ルミナがオニギリで切り離しました。

オバケを退治して少し進むと森の小道に辿りつきました。

少し疲れましたが、森の小道をサムズ市に向つて歩きます。

ト「コトコト」小道を辿り、サムズ市のギルドに行きました。
ギルドのお姉さんに交渉です。

「あのう・・依頼があつたんですが、いまの季節では無理だと思つて依頼を受けなかつたんですけど・・・どうやら手に入れたんを持つてきました。報酬は頂けますか？」

「ああ・・ジギタ草ね。でも難しかつたでしょ。いいですよ。・・・ちゃんとありますね。はい。報酬の銀貨です。」

サンディは銀貨を手に入れました。

次に左の換金所に行きます。

「あのう・・・これ、換金したいんですが・・・

「どれ・・・！」、これはオバケ・・・

「ダメですか？」

「いや、ダメじゃないが・・・お前達が倒したのか？・・・いや、倒さない限りこれは無理じゃな・・・ちょっと待て！」

ドワーフのおじいさんは奥の事務所に下がりました。

やがて、ヘルフのおねえさんがやつてきました。サンディが換金を依頼したトサカを見てます

「確かに、オバケのトサカですね。・・これには討伐依頼も出ています。依頼報酬と換金で金貨2枚ですが、よろしいですね。」

はい！ってサンディは返事をしました。ピカピカの金貨を2枚受け取ります。

またね！つてギルドのお姉さんに手を振つてギルドを後にすると、サムズ市内のウイング・ショッピングです。

いろんなお店がありましたが、旅はまだまだ続きます。町でお茶を飲んで、早めに宿に帰りました。

「それでよ。森のオバケが退治された。ってことだ。」

「そんじゃ、あの森のあたりはもうあぶなくねえってことだな。」

カウンターでお酒を飲みながら男達が噂話をしています。

「しかし、どんな技を使つたんだ。オバケを退治するってことは簡単じゃねえぞ！」

「若い娘っ子の4人組みらしきぞ。ギルドの噂ではな。」

リューアイ達は食事を終えて、部屋にかえつてお休みです。
とんとんと階段を上がつていきます。

「あいつ等か？」

「あいつ等だ。しかし・・そんな風には見えんがな。」

不思議なメイドさん

次の日の朝、リューイ達はギルドに向ります。

護衛の依頼があれば馬車に乗れますし、無くても出発前にはギルドに連絡しなければなりません。

早速、受付のお姉さんに出発の手続きをしてもらいます。

「あのう・・出発前にカードの更新をした方が良いと思つんですねが。」

「そうだな・・オバケも退治したし、ランクが上がつてるとかも知れんな。」

お姉さんの忠告にルミナは皆のカードを集めます。

お姉さんがドテンツとカウンターの下から出した水晶玉を順番に手に持ります。

別の箱にそれぞれのカードを差し込むとカチャって音がしてカードの記載が変化します。

「フ～イー黒の星4つだよ。」

「私も同じよ。強くなつたものね。」

「銀の3つか・・・フム。悪くない。」

「・・・・・・・?」

「お姉ちゃん。どうしたの?」

ライムが硬直したリューイを見て、聞きました。ついでにカードを覗き込みます。

「え!・・・色が違う・・・」

ライムの声に2人が駆け寄つてリューイのカードを手に取りジッと見つめました。

「金のカードとも違うのか・・・でも、カードに金の縁取りははじめて見るぞ。」

「この白い宝石は？」

「あのですね。私も始めて見るんですが・・・どうやら実力は金だけ経験が銀つて判定されてるみたいで。その白い宝石はオバケの討伐章ですね。」

「皆さんのカードにも着いてるはずなんですが・・・」

「あ！付いてる。でも、小さい・・・」

「段々大きくなりますよ。もつとオバケを退治すると。」

「そうなんだ。ついリューイにカードが戻ってきました。基本的には銀の星4つになるんですね。」

今度は、依頼板の所に行つて、依頼書を皆で探します。やつぱり、歩くより馬車がいいですからね。

「あつた！」

「どれどれ・・・護衛求む。王都まで。報酬銀貨10枚。但し、女性に限る・・・」

「報酬は妥当な額だ。でも、女性限定が気になるな。」

「行つてみれば解るでしょう。皆強いし、変なことにもならないと思つわ。」

サンディは依頼書を手にとつて、受付のお姉さんの所に行きました。

「これをお願いします。」

「やつぱり、選んでくれたわね。女性限定であればあなた達ぐらいいしかいないから、そう書いたのよ。」

「では、これって・・・」

「あなた達への指名依頼つてこと。パーティの半分が黒では、はつきりと指名するわけにはいかなかつたのよ。」

「しかし、指名依頼となれば報酬は破格のはずだ・・・」

「破格よ。書いてあるでしょ。銀貨10枚つて。それは、1名に

付き10枚つてことよ

そんな訳で、リューイ達は依頼者の待つ西の門に向います。

途中の武器屋でライムの炸裂ボルトを補給します。今回は、手持ち金も多いので10本買いました。

そして、小ぶりの長剣を2本買い込みました。ルミナがリューイに剣の使い方を教えるのだそうです。

門の手前のお菓子屋さんでおやつを買い込み、カバンに詰め込みます。

リューイは皆がお菓子を選んでる隙にパイプとタバコを買い込みました。素早く、腰のバックに収納します。ライムに見られたら、色々言われそうでしたから。

西門に着くと、小奇麗な馬車が3台並んでいます。その他に馬車はありませんし、旅人らしき人もおりません。

サンディが馬車の傍に立っているお母さん位のご婦人に声をかけました。

「あのう・・護衛を依頼されたのは、あなた方でしょうか?」

「あら、若い方々ですね。そうですよ。王都まで、お嬢様をお守りください。」

サンディは成り行きを見ている3人に手を振つて、オイデオイデをします。

とことことやつてきた3人をおばさんはみてます。やがて、4人が揃つたところで、カードの確認を要求しました。

4人のカードを見るや、吃驚してます。

「サミニーネが、「若いがとんでもない連中だ!」って言った訳が解つたわ。これなら安心できます。そーですね・・前に2人。後ろに2人でお願いします。」

リコーアイがライムと前の馬車に乗り、ルミナとサンディは後ろの馬車に乗り込みました。

皆が乗ると馬車は出発です。

西門をくぐり、石畳の街道をガラガラと音を立てて馬車は王都に向いました。

サムズ市から王都までは馬車で5日程度の旅になります。歩くと2週間ぐらい掛かるかもしません。

王都の前にルーディック市がありますが、ルーディック市までは小さな集落が点在してますだけになります。

そんな訳で、4日間は野宿することになってしまいます。

「フーイ、凄くいいね。このクッショーン！」

ライムは感激します。この前の馬車は荷馬車でしたが、この馬車は貴族が使うような乗用馬車です。車輪には貴重なバネが使われますし、内装のソファーもふんわかです。

リコーアイはスポーツタイプの車を思い出したりします。道路の僅かなでこぼこをシートに「ゴツゴツ」感じるのが似てるみたいです。

「あなた達は何処から来たの？」

リコーアイ達の乗る先頭の馬車には先に2人が乗つてました。紺のワンピースを着て白いエプロン・・メイドさんみたいです。

「ナナイ村からだよ。ずっと、東のほうにある山の村なんだ。」

ライムが答えました。メイドさん達はサンディより少し年上のようですがとても綺麗です。

「でも、あなた達は冒険者なんですよ。強いんだよね。」
もう1人のメイドさんが話しかけます。

「ライムは・・ライムとサンディは普通だよ。リコーアイお姉ちゃんとルミナお姉さんが強すぎるんだ。」

「こんなことが・・・」

ライムはメイドさん達に今までの武勇伝を話し始めました。

時々、メイドさん達がリューイをチラッと見るので、リューイは少し赤くなつてたりします。

そんな話で時間が過ぎていきました。

「

ドオオ！！

御者の声と共に馬車が止まりました。

外を見ると休憩所についたようです。太陽も真上にありますから、昼食を兼ねた休憩を取るみたいです。

リューイは外に飛び降りると、ヨイショーツでライムを馬車から降ろしてあげます。

ライムはありがとつて言つてサンディの方に走つていきました。

「その杖をちょっと見せてくださいませんか？」

メイドさんの1人がそう言つたので、リューイはどうぞーつて手渡しました。ライムの話で興味を持ったみたいですね。

「ええーーーーー重いいいー。」

メイドさんは片手で支えきれず両手でしつかり握つてます。

「結構、重いでしょ。でもお気に入りなんですよ。」

笑つて受取るリューイをメイドさんはジト目でみてます。

リューイがサンディ達と合流するのを見て、もう一人のメイドさんが近寄ってきます。

「どうだつた？」

「とんでもない重さだ。確かに鋼の杖だ。あれを振るえるなら大型の獣でも一撃だろ？。」

「しかし、彼女の強さの根源は力ではない。」

「そうだ。【メギドの火】そして【レギオン】聞いたことも無い。

しかし、その威力は、凄まじい限りだ。森を瓦礫に変える等、だれが信じる。私も見るまでは信じられなかつた。」

なんか2人で密談しています。

リューイ達が待っているとメイドさんがお弁当とお茶を分けてくれました。

簡単にパンに野菜とハムをはさんだお弁当です。

ゆっくりと休憩を取つて出発です。

馬車にリューイ達が乗り込むと、さつきのメイドさん達と違う人が乗り込んできました。でも一応メイドさんみたいですね。

がたがたと馬車が走ります。途中の集落で一度止まると、民家から薪を買い込みました。夜の焚き火様ですね。

今度のメイドさん達もライムの話を興味深く聞いてます。

そんな中、ふとライムは話をやめてリューイを見ました。

「ねえ、お姉ちゃん。【レギオン】と【メギドの火】って何なの？魔法の効果は判るけど・・言葉の意味がわからんない。」

2人のメイドさんはお互に頷きあいます。真相が聞けるかも知れませんからね。

「えーとね。まず、【レギオン】は、昔の軍隊の単位だよ。千人ぐらいかな。大勢をさす言葉もあるんだ。」

「へーえ・・だから一杯戦士が出てくるのね。」

「そして、【メギドの火】だけど・・神様のお話で、神話つて言つのがあるんだけど、その中には、メギドっていう都市の話があるんだ。メギドはね。町中の人が悪い事しかしなかつたんだ。それに怒った神様が天から光りを落として、その都市は滅んでしまったんだ。」

「なるほどね。だからお空の上から光りが降つてきてドカーンってなるんだね」

「聞いたか？軍隊の編成単位と都市の名だ。」

「はい。でもそんな名前は聞いた事もありません。」

メイドさんは2人でコソコソ話します。

馬車の外は一面の畠です。

農家の人たちが馬や牛を使って畠を耕しています。
街道はそんな中をずっと西に向って続いています。遠くに、休憩所が見えてきました。

太陽がだいぶ傾いてきましたので、今日は此処で野宿になるでしょう。

王女様はお転婆娘

休憩所で野宿する者はリュウイ達だけです。馬車を降りると、メイドさん達がおばさんの指示の元で、テキパキと夕食の準備です。

リューイ達も手伝おうとしましたが、焚き火の番を仰せつかつて4人とも小さな焚き火を囲んでます。

「すみません。これお願ひします。」

メイドさんが鍋を持つてやってきました。

はいよ。つとルミナは鍋を受取ると慣れた手つきで棒を3本組み合わせて、紐で鍵のようになつた薪を吊ると、その鍵に鍋を掛けます。

「あまり、煙を出すなよ。美味しいシチューはとろ火で長時間だ。リューイは盛大に燃やそうとして薪を加えようとしましたが、その一言で止めてしました。

後ろの方ではメイドさん達がおばさんの指示でテーブルセットを組み立てています。

どうやら馬車に折りたたんで収納しているみたいです。
そこに、別のメイドさんがやってきました。

「どうぞ、こちらにお座りください。」

さつきのテーブルに案内されました。テーブルには白いテーブルクロスが掛けられています。

4人はさつさと席に着きました。

「ここで、野宿だよね。」

「まさか、野宿でテーブルに着くとは思わなかつた・・・」

4人を見て、おばさんは馬車の扉を開けました。すると、そこから、軽そうな鎧帷子を着込んだ少女が降りてきました。
少女は4人の対面に座ります。

「お嬢様。この者達が今回の警護を行います。紅い靴という少女達です。」

おばさんが少女に説明します。

「大儀である。護衛は要らぬと申したが、乳母様にはかなわぬ。
・ギルドカードを見せて貰えぬか？」

何か、凄いお嬢様らしいですが、リューアイは首にかけたギルドカードを外すと少女の前に置きました。

少女はカードを手にして観察します。

「フム。銀4つで金の縁取りは始めて見る。討伐章は2つ・・・
少女はおばさんにカードを渡します。おばさんが丁寧にカードを返してくれました。

「私は王国の第2王女、エリーナだ。オバケ討伐を行うため王都からまいったのだが・・・貴方達に先を越されたようだ。」

「1人で十分と言つたのだが・・親衛隊を着けて、自分まで着いて来るとは・・・過保護で困る。」

4人はしばらく、ポケットとしてます。だつて、王女様ですよ。
偉い人です。そんな人が目の前にしかも、オバケ退治をしようなんて・・・なんてお転婆な！

開いた口が塞がらない状態ですが、いち早く回復したリューアイが質問します。

「あの・・・王女様って言つたら、お城で舞踏会なんかで忙しいん

じゃないですか？」

「そんなことは無い。父も、お前の好きにしてよい。出来ればこれ以上城を壊すな。と言つておる」

（それって、じゃじゃ馬で、お転婆で始末におえないから、なるべく外にいる。つてことだよな・・・多分。）

（世の中つて広いね。私も似たような事言われた事があるわ。）

（やはづ・・・）

「しかし、幾ら武芸に秀でも、王女様がオバケ退治とは・・・」「国民を苦しめる魔物を討伐するのは、上に立つ者の使命と考える。」

「確かに、そうだけど・・・ちょっと、違つような・・・」

「ところで、王女様のお年はお幾つですか？」

サンディイが復活しました。

「今年で一六じゃ。そち達は？」

「ルミナが一八、リューイと私が一六、ライムは一二だよ。」

サンディイは紹介しながら答えました。

「ほー・・ 同い年か・・ 同い年の少女は皆私から逃げてゆく。話相手になつて貰えぬか？」

「いいですよ。」

サンディイは即答しました。

そんな話をしている間にメイドさん達が料理を並べます。
シチューとサラダそれに柔らかなパンです。

食事が終わるとリューイ達は焚き火の番です。
そこにおばさんがやってきました。

「黙つていて申し訳ありません。姫様は優しく、正直な方なのですが・・小さい時から女の子らしい遊びに全く興味を持たず、貴族の男の子達とチャンバラ」この毎日・・気がつけばギルドカードで銀を持つほどの武芸を身につけれれ・・・」

「俺達は気にしてませんよ。上に立つ方が、優しくて正直なら何

も問題ないじやないですか。」

「それは、そうなんですが・・・それを直ぐ実行なさるとなると問題です。」

「何時飛び出すか判らないものですから、メイドに扮した近衛兵が直ぐに姫様に同行できるようにしてますけど・・・」

「かく言う私も、銀2つです。」

4人は吃驚しました。だって、自分達がいなくとも十分やつていける人達です。

でも、なんで自分達を雇つたんでしょうか？ちょっと判らなくなりました。

「姫様の同行者はだいたいいつもこの位の人数なんです。今回も何時もの通りオバケだ！つて姫様が飛び出しそうになつた所を、慌てて馬車に押込めて出発しました。でも、オバケは皆さんに退治されしていました。そして、現場に行つてみると・・・姫様は大変興味を持つて、帰り道を貴方達と同行したいと言い出したんです。・・・それに、この所、街道に出没する盗賊団が気になりまして・・100人を超す盗賊団では私達だけでは対処出来ません。ですから、護衛と言つのに偽りは無いんです。」

乳母様と王女が言つていましたが・・・苦労してるようです。育て方が少し不味かつたみたいですね。

「大丈夫です、気にしてませんから。・・それに、同じ年の女子と同じように遊べないなんて・・お気の毒ですね。明日は、王女

様と一緒に馬車に乗せて頂けませんか。ライムのお話で少しは和むかと思つんですが・・・

「それは、是非お願ひします。」

おばさんまわいつと馬車の傍に行き、王女様と話をしているようです。

その後で、メイドさんを集合させました。何か指示していくゆうひですがここでは良く聞くこえません。

3人のメイドさんが焚き火の傍にやつてきました。

「今夜は私達が番をしますから、寝ても大丈夫ですよ。」
メイドさんが不寝番をすると言つてますが、寝てもいられません。
だつて、依頼内容は護衛ですからね。

適当に交替しながら寝る事にしました。

でも、少しは楽が出来ると言つ事で、ライムのお願いです。

「昔、昔、あるといひて、一つの王国がありました。王様には1人の王女様がいましたが、王妃様はありません。王女様が生まれた時死んでしまったのです・・・・・」

「ほう・・小人を7人集めると王子様が来るんだな・・・ドワー
フで代用できるかな?」

「・・そんな王国があつたかしら?」

「おとぎ話だよね、これ?・・でも、聞いたこと無いよ?」

「やっぱり、王子様が来るんだね。ライムもそう思つたもの!」
感想はまちまちでしたが、ライムには好評だつたようです。

(姫さんー姫さんー)

(盗賊100人つてどうするんだよ。ばらばらに攻めてきたらどうしようもなによ。)

(船を利用すると広域攻撃になるし、海兵隊だと後で回収するの
が面倒だし……)
(大型怪物相手は準備万端なんだけど……盗賊相手じゃね……
……)

(なんか、閃いたとか……)

(良く聞きなさい。先ず、ターボで加速状態にして、杖を回しながら自分も回転しなさい。次に重力場を制御して地上数センチを高速で移動しながら敵に近づくと……触れる相手は全て杖に当たつてポーンと飛んでいく……いいアイデアでしょ。名付けて、【ダブルサイクロン】これで行きましょう。)

(なんか、目が回りそう……)
(大丈夫！そんな柔な改造してないから……じゃあ、頑張つてね。)

ちょっと不安でしたが、何とかなりそうだと自分に言い聞かせました。

ダブルサイクロン

次の朝。

焚き火の番をしているメイドさんに、おはようを言つて、鋼の杖を使つてトレーニングです。

クルクルと回すとバトントアラーのように見えますね。

頭の中で、行進曲が流れると、一人でトアリングの始まりです。 クルクル前で回し、腰に回すと上に投げ上げ、クルクルと落ちてくるのを左手でキャッチ。そしてまた前で回します。

パチパチと拍手があります。

え！って後ろを見ると、ルミナが長剣を持つて立っています。

「まるで、踊ってるみたいだな。しかし、あの杖を……まあいい。ほら！」

そう言って、長剣を放つてきました。
パシ！っと長剣を受取りました。

「構えろ！」

ルミナの一言で、思い出しました。剣の使い方を教えるつて言つてました。

とりあえず、剣を抜き剣道の竹刀の構えを思い出して構えます。 切つ先を相手の喉笛に・・正眼の構えですね。

「ほおー・・変った構えだが、筋はいい。」

ルミナはさつと剣を抜くと・・えい！つてリューイに鋭い突きを入れます。

リューイはすかさず軸足を後ろに下げ、体を半身にします。

「なるほど・・その構えは、防御用か・・今度は攻撃してみるー。リューアは剣を上段に構えます。

そして、えい！って半歩踏み出しながら剣を振り下ろしました。ルミナはトンって後ろに飛んで剣を避けます。

「ふむ・・やはり、遅いといつか・・素人といつか・・・・」

「ちよと、見てなー！」

ルミナの剣舞が始まりました。

剣を片手で回し、両手でも回す。回しながら体を入れ替えると攻撃に隙がなくなります。

どの部分をとっても円を描いています。ですから、攻撃が止まる事がありません。

「やつてみるー。」

リューアはルミナの動きを再現します。全く同じ動きで・・

一度動きを見てますから、シユミレーシヨンは数十回電腦世界で行っています。後は体で再現ですが、これは制御特性上、シユミレーションをモーションにしただけですから問題はありません。

ルミナは吃驚しました。ルミナ自身がエルフ族の中で例外的な武道家であることを自覚しています。その動きを一度みただけで再現しているのです。

いつたいどんな才能なんだ・・思わず首を傾げます。

後は実戦ですが、ルミナもリューアの強さは十分知っています。

そして、以外と素人であることも。

真剣でのかけひきは経験をつませるしかないと思つたりします。

リューアは長剣をジッと見ています。刀と違つて反りが有りません。

そして両刃です。

これだと、居合には無理かな？なんて暢気に考えてました。

「見ました？」

「見ました！」

「棒術も凄いですが・・・ルミナ様のご教授で、ど素人があのような達人の動きに！」

「是非、我が部隊の指南役に・・・」

焚き火をしながらリューアイ達を見てたメイドさん達ですが・・・勘違いしてますよ！」

リューアイ達が練習を終えて戻つてくると朝食です。

テキパキとメイドさん達が準備して、食事を終えるとサッサと付けます。ほんとに、親衛隊なんでしょうか、ちょっと心配ですね。

馬車は王女様とサンディ姉妹が一緒です。リューアイは先頭で、ルミナは最後の馬車に乗りました。

ガタガタと馬車は進みます。

王女様が今までの冒険を聞きたいという事なので、ライムがダイジェスト版でお話します。

「それで、銅竜が出てきて私達の攻撃がぜんぜん利かない時に、リューアイが光の剣でエイ！ヤア！-!ってやると竜の首がバタンと落ちたのよ！」

「ほう・・光の剣とは、我も見たことが無い。それほどの切味なのか？」

「うん。そしてあまりの切味で切った所からあまり血も出ないみたいなの。」

「一度見てみたいものだな・・・」

盛り上がってるみたいです。

馬車の中には小さいながらもテーブルがあり、そこにお菓子を載せて、皆でつまみながら話をしています。

話の内容はちょっと物騒ですが、女の子同士のお話等ひさしごりの風景に乳母のおばさんはニコニコしながら姫様を見てます。

日中は何事も無く過ぎ去り、夜は焚き火の周りでお休みです。メイドさん達が火の番をしてくれますから少し安心です。異常があれば直ぐに起してくれますからね

でも、その夜。月も無い深夜になつて、リューアイの頭の中で警報が鳴り響きました。

慌てて、生体レーダを展開します。
すると、街道にそつて、東と西の2方向から赤い集団が少しづつ近づいてきます。

リューアイはマントを跳ね除けると、サンディ達を起します。
何事なの?つてこっちを見ていたメイドさん達にも、訳を話します。

直ぐに、メイドさんは走つて全員を非常召集します。
集まつたメイドさん達を見てリューアイは吃驚しました。だつて、10人が全て武装してます。

長剣が5人、弓が2人そして魔道師の杖を持つている3人です。
乳母さんは大きなフライパンを持つてました。

そこに、王女様がやってきました。王女様も長剣です。

何か、軍隊みたいだとリューアイは思つたりしますが・・・親衛隊つて軍隊ですよね。

「リューアイとやら・・・来るのか?
王女様の確認です。

「はい。街道の前後から接近してきます。数は不明ですが、かなり多いものと・・・

「ふむ・・例の盗賊団と見てよからう。さて、作戦じゃが・・・

「ちよつと、待つてください。・・・敵が馬車の北側で合流するみたいに動き始めます。・・・街道にはもう、1人もおりません。」

「そうか。相手の殺氣を辿り動きをそこまで読めるとは・・いや、今は作戦であつたな。北側となると馬車を盾に出来る。剣を持つものは、馬車の前。魔道師は馬車の中。弓は馬車の上じや。敵の攻撃と同時に光球を打ち上げる。弓は炸裂弾を先ず使え。盗賊団を壊滅させる。解つたな！」

リューアイ達は直ぐに配置に着きます。後ろの馬車の上には、サンディ姉妹が乗っています。

王女様とメイドさん達が馬車の前で待機したのを見て、ライムが全員に【アクセル】の魔法を掛けます。身体加速呪文ですからかなり有利になります。

リューアイは少し前に出ると、【ターボ】と咳きます。加速性能はアクセルを遙かに凌ぎます。次に、体の半重力制御です。少しづつマイナス重力を上昇させ、地上数センチで釣合をとります。少し前後に動いて制御の具合を確認します。

「ねえ・・彼女、浮いてない？・・なんか動いてるようにも見えるけど・・」

「氣のせいよ！」

何処にでも、見てる人はいるようですね。

リューアイは前方をジッと見ています。

視覚モード、パッシブ赤外線・・・いま、リューアイは世界を温度で見ています。

わらわらと集まつて、少しづつ近づいて来るのが解ります。

リューアイが鋼の杖を手にして前方をジッと見ているのを、全員が見守つてます。

距離が100m程になったとき、リューアイは片手を上げました。
そして、杖を構えます。

それを合図に魔道師達が光球を上空に何個も打ち出しました。
馬車の周りが明るく照らし出されます。遠くの方も夕暮れ時位の
明るさです。

「「ウワオ——！」

その暗がりの中から盗賊団が一斉に飛び出してくださいました。

盗賊団に向って、ライム達が破裂弾を発射します。魔道師さん達
が火炎弾を続けざまに発射します。

ドガーン！、ドガーン！・・バーン！！

盗賊団の集団の中で盛んに爆発が発生しますが、そんなの関係ね
え！状態で突っ込んできました。

盗賊の先頭は、もうリューアイの目の前まで来ています。

リューアイは、手に持った鋼の杖を目にも留まらないほど速さで
回しあげました。リューアイ自身もクルクルと廻りだします。

【ダブルサイクロン！】
リューアイが敵の襲撃の声に負けないように叫び声を上げます。
そして、独楽のように回りながら、敵の中に飛び込んで行きまし
た。

バコン、バン・・バコン・・

リューアイの鋼の杖に接触して弾き飛ばされる音が薄暗い中に木霊
します。

それでも、盗賊達の群れは怯みません。

ルミナは最初に接触した盗賊を大上段から袈裟懸けに切り伏せま

す。返す剣で更に1人を切り倒します。

乱戦にならない様に近づく盗賊を「」と魔法で牽制しますが、次々と盗賊は襲ってきます。

王女様とメイドさん達もルミナに負けずに盗賊達を切り伏せています。

乳母さんも、フライパン振り回して応戦します。戦闘斧とフライパンでどつちが強いかというと、絶対に戦闘斧なんですが、名人は筆を選ばないというか・・フライパンでバコンって顔を打ち付けてます。ひょっとしたら、王女様のパーティで一番強いのかも知れませんね。

ブウーンっと音を立てて、リューアイが戻ってきました。

クルクル状態からピタッ止まって、鋼の杖を構えます。杖の先と後からポタポタと血が滴つてます。

馬車の周囲を移動しながら、盗賊達に鋼の杖を打ち付けます。

段々と襲つてくる盗賊の数が少なくなつたかと思っていると、突然逃走を始めました。

すると、なにやらズン・・ズン・・という規則正しい振動が近づいてきました。

全員??の状態ですが、リューアイの生体レーダには大きな赤い点が近づいてくるのが解りました。

鉄人登場

リューアイの生体レーダには北から近づく大きな赤い点が映つてます。

そして、ズン・・ズン・・からズシン・・ズシン・・と振動が大きくなりました。

なにか巨大なものが近づいてきます。

魔道師さん達が音がする方向に向つて光球を打ち出しました。闇の中に映し出された物は・・・

巨大な熊です。とんでもなく大きいです。リューアイ達の5倍以上の背丈があります。

ライムが射程ギリギリの状態も気にせずに炸裂ボルトを発射しました。

ポン！って体に当たりましたけど、全く気にならないようです。サンディーと魔道師さん達が火炎弾を連射します。

熊の大きな体のあちこちに炎がぶつかり炸裂しますが、さつきと同じで全く効果がありません。

リューアイが走つて行き、すれ違いざまに熊の足に鋼の杖を叩きつけました。

上手く、弁慶の泣き所に当たつたんですが・・・効果無しです。

「じゃんの、どうすんだよ！・・・逃げるしかないのか？」
ルミナがそんな光景を見て咳きます。

「ほう・・・合成獣か・・・いつたい何頭の熊を合成したのだ・・・合成獣ならば制御している者が居るはず・・・」

王女様は冷静に対処方法を考えてるみたいですね。

(どうすんだよ・・全く攻撃が利かないぞ。)

(今こそ、あれを使う時・・呼んで!)

(呼んでつて、誰を呼ぶんだよ。)

(呼んで!・・・鉄人を、呼んで!)

え! つてリューアイは考えました。鉄人・・・何か、やな予感がします。

でも・・他に方法も思いつきません。

リューアイは思いつきり大声で叫びました。

「出るおー・・鉄人!!」

これは不味い・・誰もが思つたその時にリューアイの大声が聞こえます。

でも、誰がこんな所に来るのでしきう・・そんな皆の思いが重なつた時です。

「ガウ・・・」

空の上から声がしました。皆で空を見上げます。

大熊も一緒に空を見上げてます。

すると、何か巨大なものが落ちてきました。

ズシン! つと降り立つたものは・・

頭を白い布で巻き、その顔は白地に赤の隈取です。筋肉質の体を黒い衣で覆い、足には不思議な2本歯の歯肝を履き、背中には何やら色んな武器を背負つてます。そして、腰の長い刀に手を添えると大熊に対峙しました。

リューアイは、頭を抱えました。

どう見ても、弁慶さんです。しかも、ロボットです。そして、大熊と同じ位大きいのです。

「んな『ザイン』から仕入れてきたんでしょう。

弁慶さんがリューイを見つけました。ガウって言ひてます。どうやら攻撃命令を待つてるみたいで、半ば焼けになつてリューイは叫びます。

「行け！・・鉄人！・」

その言葉で弁慶さんは素早い動きで大熊に迫ります。すれ違いざまに、ガウ！と短い声をあげたかと思うと、ガシャン！・！・と大きな鎧鳴りが響きました。

静寂が辺りを覆います。

あまりの出来事が続けざまに起きたので誰も声も出ないみたいで、す。

突然、弁慶さんが片足で地面を蹴りつけます。

ドゴン！と大きな音と共に地面が摇れます。

すると、大熊が斜めに2つに分かれて、バダン！・と振動を伴つて斃れました。

弁慶さんはすれ違いざまに居合い抜きで大熊を両断したみたいです。

弁慶さんは首を回して大熊を確認すると、下駄の下から口ケットの噴射炎を上げて上空に去つて行きました。
ライムがまたね～つて手を振つてます。

リューイは頭を振つて気持ちを切替えます。

生体レーダには周囲に敵対反応はありません。とりあえず危機は去つたと言えます。

馬車の裏に回つてみると、皆さん焚き火の廻りで、メイドさんが入れたお茶を飲んで一息入れてます。
リューイが戻るとお茶のカップが渡されました。

「何処まで、そこが見えない奴だ。あの、「ダブル・サイクロン」つてやつだが、よく目を回さないな。」

ルミナの賞賛？に、鍛えてるからなんて答えてます。

「それより、あの巨人だ。鉄人と言つたな。あれだけで1個大隊の戦力がある。是非とも召還魔法を教授願いたい。」

王女様が詰め寄りますが・・・あれの原理はリューアイにも想像がつきません。

「一子相伝の召還技なれば・・・お教え出来かねます。」もつともらしく言い訳してたりします。

「でも、かつこいいですね。あの化粧・・・シビれますわ。」

「そうです。あの衣装・・丈夫振りが際立ちますわ。」

「どうも、感性がリューアイと異なるようです。」

そんな事を焚き火の廻りで話していると何時しか東の空が白んできました。

明るくなつたのを見計らつて出発の準備をします。準備に関わらない者達は総出で周囲の確認をします。

昨日の盗賊の討伐状況を確認するためです。

馬車の周囲に20人程度。リューアイがクルクル回つて居た場所には数十人の盗賊が斃れていました。

とりあえず、そのままにしておき、最初の集落でギルドに言付けを頼むことにします。

そして、馬車が走り出します。

見渡す限りの畑の中に所々林があります。そこには数軒の集落があるはずです。

その日は何も起こらず、夜も何も起きません。

そんな日が2日続いた毎過ぎです。

遠くに巨大な都市が見え始めました。王都です。

ようやく辿り着いたという感じです。お婆ちゃんもこの王都のどこで暮らしてますです。

王都の東の門にこの街道は続いているとのことです。

「ところで、赤い靴は何処に宿を取るのだ？」

王女様がサンディに聞きました。

「カレミーとこう宿に行つてみようかと思つてます。」

「カレミーか・・どこかで聞いた名なんだが・・」

「姫様。疾風様が利用してお宿ですよ。」

「おお・・そうであった。エリア殿の常宿であつたな。」

「あのう・・ひょっとして、今のお話は、疾風エリアのお話ですか？」

「そうじや。王都で10指に入る冒険者の疾風エリア殿だ。お前達知つておるのか？」「

「ライムのお婆ちやんだよ。」

「なんじやと…」

そんな訳で、お婆ちゃんの話をライムが話し始めました。でも、詳細はサンディが話します。

お婆ちゃんはエルフだけど人間と一緒になりその子供の子供がサンディ姉妹だと説明します。

「なるほど・・確かにエルフの年齢は不詳じや。そつか、一緒に仕事をしたのか・・」

しきりに、王女様は関心してます。

乳母のおばあさんも、常宿が分かれればたまに城に招待して姫様のお相手に・・そうすれば少しばかり城に落ち着くかもと考えてたりしま

す。

それに、疾風エリア殿の親族なら安心できます。なんていっても、あの人は・・・

夕暮れを迎えるころに、王都の東門につきました。

馬車の紋に気がついた守備兵は隊長を呼びに駆け出しました。王都に入る列に、リューアイ達の乗った馬車も並びます。王都には、大勢の旅人や馬車がやってくるため、門の番兵さんは大忙しです。それに、番兵以外に守備隊が常駐してます。番兵が不審を感じたら後は守備隊の仕事です。

そんな中、列の脇を守備隊長が走り抜けます。

そして、リューアイ達の馬車に着くなり、兵を御者台に上げ、御者を交代させました。

馬車を列から外して、東門に向います。

隊長は王女の馬車を見つけると、扉の下の足場に足を乗せて中の王女に話しかけます。

「王様が心配しておいでです。この度のオバケには別の動きがあると賢者の予言もありました。早く王にお目通りを・・・」

「解つてある。・・とこ�で、門をくぐつたらこの者を、カレミーに連れて行つて欲しいのだが。」

「了解であります。」

足場から飛び降りると、前方にかけていました。

「ここまでで、よいじやうつ。護衛」くろうであった。」

王女様はそう言つて、懷から2枚の金貨をサンディに渡しました。

「これでは、多すぎます。」

「よい。面白いものを見せて貰つた謝礼じゃ。それとこれをやる。城の守衛に見せれば私のところに案内してくれる。また、話相手になつてくれ。」

王女様からライムは指輪を貰いました。小さな花の絵がついたメ

ダルがついてます。

門をくぐると、大きな通りがずっと続いています。
なんか迷子になりそうです。

4人が馬車を降りると、隊長が待っていました。

「お嬢さん達は冒険者とお見受けする。先ず、ギルドに案内する
のでワシの後についてまいれ。ギルドの手続きが終了次第、カレミ
ーに案内する。」

親切な守備隊長にお世話になることにしました。

やうだーお城に行ひ

さすが王都のギルドです。

でつかいです。4階建ての石造建築物。大通りに面して石柱まで立つてます。凝った彫刻がいたるところにちりばめられて・・日本でしたら世界遺産登録確定つて感じの建物です。

入口の扉たつて、リュウイの背の2倍ほどあります。

そのまま中に入ると、基本的な配置は変わりませんが、奥のカウンターには綺麗なお姉さんが数人並んでます。

その中の1人に皆のカードを渡して、王都のギルド登録は終了になります。

大通りに出て、隊長さんの後をカルガモみたいにトコトコついて行きます。

しばらく歩くと、路地がありました。路地を少し進んだ所で、隊長さんが止まりました。

「ここが、カレミーじゃ。」

そう言つて隊長さんが看板を指差します。

確かに、カレミーと書いてありますか・・・小さな宿屋です。

「では、これで失礼する。くれぐれも気をつけてな。」

去つていいく隊長さんに、ありがとうーって皆で手を振つてお別れします。

それでは、とカレミーの扉を開き、中に入ります。直ぐにカウンターがあつて、太つたおばさんがジロリつて此方を見ています。

「あのう・・・ここは、宿屋ですよね。泊めていただけないでしょくか?」

「ああ・・宿屋だが、泊めるかどうかは別だね。見たところ冒険

者のようにだが・・もつと良い宿屋は他にもあるはずだよ。」

「それが・・サミーさんが王都へ行くならカレミーを尋ねると・

・」

「サミーの紹介かい。・・悪かったね。問題ない、泊めてあげるよ。4人なら丁度4人部屋があるよ。1部屋1晩、銀貨一枚。どうだね。」

「お願いします!」

「食事は左に3件目のアクネがいいよ。カレミーの客だと言えばサービスしてくれるはずだ。」

4人は部屋に荷物を置くと早速食事に出かけました。

そんなどころに、エリアが帰つて来ました。

「どうだい、何か解つたかい?」

「手がかり無し・・・洞窟の規模からかなりな合成獣だと思つんだが・・何処にもいない。」

「冒険者が此処にも来たよ。サミーの紹介さ。」

「そういえば、姫様が帰つて來たようだ。明日にでも守備を確認せねば・・・」

「あのヤンチャ姫だね。今度は何を?」

「オバケ退治だそうだ。」

そう言って部屋に帰つて行きました。

リューイ達はアクネで夕食を食べて宿に帰ります。

アクネの若い夫婦が2人で経営している小さな食堂です。奥さんはカレミーのおさんの子供だとか・・カレミーに泊まつてると言うと、食事の後に美味しいジュースが付いて来ました。

2階の4人部屋に戻ると今日はこれでお休みです。

さすが都会と言つか、人の多さに酔つたみたいで、今夜はライム

のおねだりもあつません。

皆でお休みを言い、ベッドに入りました。

ゆづやく寝がしりみ始めた頃にリューアイは起き出して杖を振ります。

「ひして振ることにより体になじませるのです。ブンブンと音を立てて振り続けますが、流石に声を出さないためか苦情はありませんでした。

一頻り杖を振ると、今度は長剣を抜いて、舞うよつに素振りを続けます。時折、ヒュンヒュンって風を切る音がしますが、この程度ではやはり誰も気がつかないようです。

すっかり夜が明けて朝になるころにリューアイの練習は終了です。皆まだ寝てるんだろうな・・・って思いながら、部屋に戻つてベッドに潜り込みました。

リューアイ達の隣の部屋の扉がガタンと開き、エルフの冒険者がすっかり身繕いを済ませた姿で現れました。

スタスターと通路を歩き、階段をトントンと降りていきます。

「おや・・でかけるのかい？」

「ああ・・何か、殺氣じみた氣の高まりを感じてね・・・」

おばさんにそんな挨拶をして、宿を出て行きました。

リューアイ達が部屋を出たのはすっかり太陽が顔を出した後のことです。

王都の朝のぞわめきで起きたところのがホントのところですかね。皆でおばさんこおはよつを言って、アクネに出かけます。

その後で、ギルドに向いました。

リューアイとしては、一日ぐらこ王都の見学をしたかったのですが、

それは依頼を兼ねながら、と黙つて意見に逆らえませんでした。

ギルドの依頼・・・王都での依頼ってどんなものなの？・・みんなの興味は一緒のようです。

ギルドに着いて早速依頼板に向います。

「・・・あまり、変わり映えしないな・・・」

楽しみに覗き込んだ掲示板の依頼用紙にはそれほど変わった依頼はありませんでした。

でも、薬草採取なんて依頼は王都のまわりではちょっと無理なような気もしますが・・・

「でも、こんな依頼始めて見るよ・・・」

どれどれ・・・と、ライムが指差す依頼書を見ると・・迷子のチャッピーを捜してください。礼金、銀貨一枚・・・って書いてあります。

「この依頼は危険だぞ！・・だいたいチャッピーがどんなものか書いてない。とんだ化け物がチャッピーってことも有るわけだ・・なるほど、書いてありません。これを犬や猫と思つてはいけないんですね。

でも、それを指摘するルミナつて・・・こんな依頼の経験を持つてるのでしょうか？

王女様から頂いた金貨も残っていますので、今日の所は様子見です。

依頼の内容はそんなに変ることはないという事がわかれれば今日のところはお終いです。

「そういえば、王女様から指輪を頂いたんだわ。」

サンディの言葉に、これだよーつてライムが手を翳して見せます。中指に光りますね。

皆でお城に向います。

お城の大きな尖塔がランドマークになつてますので、解らなくなることはあります。

お城は王都の城壁の中に、更なる城壁で守られています。城壁の門番さんにライムは指輪を見せました。

門番さんが吃驚して、お城に走つて行きました。

しばらくすると、メイドさんを1人連れてきます。

そのメイドさんは、馬車でいつしょだつたメイドさんでした。

「お待ちしておりました。さあ、こちらにどうぞ…」

メイドさんが4人を案内して城に入ります。流石に、城の正面ではなく、城の雑用を行う者達が使用する扉からでした。

でも、城の中は天井が高く、綺麗な絨毯も床に敷かれています。城内部の角々には金属製の全身鎧を着けた兵隊さんが見張っています。メイドさんは城の中を自由に通行できるらしく、リューイ達4人が停止を命じられることもありませんでした。

階段を2階に上がり、さらに3階に移動します。

少し通路を歩き、大きな扉の前で止まりました。

コンコンと扉を叩きます。

すると扉が中から開き、部屋のメイドさんが現れました。でも、この人も馬車で一緒だつた人です。

「王女様がお待ちです。」

そう言つて、4人を部屋の更に奥にある部屋に案内してくれました。

「よく來たな！」

王女様は、4人に長椅子を勧めます。

自分も、反対側の席に着くと、すかさずメイドさんがお茶とお菓子を持って5人の前にそつと並べていきます。

「無事にギルドと宿に着く事が出来ました。」

サンディがお礼を言います。

気にするなつて王女様は言いましたが、ふと何か思い出したよう

です。

「言いにくい事ではあるが・・・お前達の事を親衛隊が城中に話してしまったようなのだ。女の子4人でオバケが倒せるわけはない。巨大熊もせいぜい小熊程度であつたのでは?と懐疑的でな。」

「城に来た時に手合させを願う騎士が多いのだが・・・2・3人相手にして貰うとありがたい・・・」

「お姉ちゃん・・・受けて立つよね!」

ライムに言わわれては、後にも引けません。しぶしぶながら受けることにしました。

準備は任せておけつて王女様が言つてます。

メイドさんの1人がササーっと部屋を出て行きました。きっと準備の連絡ですね。

何でこんな事に・・・リューアイは少し後悔します。

闘技場のオバケ

メイドさんが入れてくれた紅茶を皆が飲んでます。
しばらく時が経つたつ時、そろそろかな・・つて王女様が席を立ちます。

「ひちだー！」って声に4人は王女様の後をトコトコと着いて行きました。

2階に下りて、1階に下りると通路を奥に歩いて行きます。どうやら城の中庭のようです。

「ここだ！」

王女様が扉を開きます。

そこには、30m程の円形の闘技場と数千の人人が入る」とが出来る観客席がありました。

「リューア様はこちちらに・・・」

メイドさんがリューアを闘技場に案内してくれます。

「お前達は私と一緒にだ・・」

サンディ達は王女様とロイヤルシートに座ります。

「おお・・そちらが例の娘達だな。ワシはこの国の王じゃが・・
気にせんでよい。娘の友になってくれて嬉しい限りじゃ！」

「気さくな王様ですね。近所のおじさんみたいです。」

サンディは改めて廻りを見渡しました。

どう見ても2千人以上います。ひょっとしたら城の中の全部の人？って感じです。

王女様が立ち上がりました。

「皆のもの、よく聞け！・・・ただ今より、王国第1軍の、部隊長

ガルート対赤い靴のメンバー、オバケ殺しのリューアイが戦う。 「

リューアイは、ギョギョツとしました。

だつて、ある意味お祭りイベントだと思つていたからです。当然勝たさせてくれるものと思つてました。

対戦相手もこっち向いておいでおいでをしています。とても強そうです。

メイドさんは隊長から5 m程の所にリューアイを立たせると、ササーっと帰つて行きました。

相手の隊長さんは金属鎧に兜被つています。身長程の抜き身の長剣を脇に突き刺していましたが、リューアイを見て、その長剣を片手で掴みました。

リューアイも鋼の杖の金具を固定していた布を解きました。杖の先の木のカバーも外します。

「一本勝負！・・悔いを残すな！・・・・・始め！・・・」

王女様の声で試合が始まりました。

王女様の声が終わらない内に隊長は脇に刺した長剣を掴み、一気にリューアイを頭上から両断しようと襲い掛かってきました。

【ターボ1！】

すかさず、加速して体をひねり斬撃を避けると、ヒュンヒュンと鋼の杖を回して相手目掛けて振り下ろします。
でも、隊長も身体加速を使えるようです。剣で受け止めず、リューアイと同じ様に打撃を避けました。

「ほー・・リューアイ殿も加速が使えるのか。しかし、隊長はさら

に加速できるぞ。」

「分身できるということか？」

「滅多にはやらないが・・・最後の手段といつやつだ。」

王女さまとルミナが闘技場の2人から目を離さずに会話します。

「やるな！・・・しかし、これは防げまい。」

隊長の体がぶれて行きます。ぶれながら「ユーッと両側に伸びて2人に分身しました。

でも、体がたまにぶれて見えます。

片方の隊長は長剣を大上段に、もう片方は斜め下に構えました。

「【ターボ2!】分身！」

リューアイの体からリューアイがもう1人歩き出して2人になります。さらに、2人のリューアイから別のリューアイが歩きだします。体のぶれもありません。1人のリューアイが4人に分身したのです。

4人のリューアイは各自ばらばらの構えを取ります。杖を回すもの、斜めに構えるもの、自然体で構えるもの・・・

「リューアイ殿も分身出来るのか？しかも、4人だと・・・」

「ああ・・以前1度見たことはある。あの時は渡り狼の群れを全滅させた。」

リューアイ達は簡単に2人に分離した隊長の剣を弾き飛ばしました。2人掛かりですからね。ちょっと卑怯ですけど、これも実力です。隊長はブレタ体をビニョーンとくつ付けると元の1人になりました。

リューアイも、2人づつ歩み寄つて2人になり、また歩み寄つて1人になりました。

「大変です・・ガルート様が大怪我をして倉庫から出てきた所を保護されました。」

メイドさんの1人が息せき切つて王女さまに報告します。

「隊長は・・ほれ。あそこに居るじやうが・・」

王様が、ハアハア・・言つてるメイドさんに指差した時です。

隊長の体が膨れたかと思つと、金属鎧を内側から破つてモむくじやらの怪物が現れました。

頭は、鰐。体はゴリラ。背中には蝙蝠の羽が生えています。尻尾は頭と同じ鰐のようです。

「オバケか・・・誰が城の中に!」

見るからに醜悪な姿に、王女様は思わず顔をそむけました。

「旨を安全な場所に!」

王女さまの命令でメイドさん達が一斉に観客の避難誘導を開始しました。

たちまち闘技場はリューアイとオバケ・・・と隠れてみてる王女様達 + サンディ達だけになりました。

リューアイは周囲を見渡しました。だれも居ません。隠れていますけど・・・

左手で腰のバックから小さな懐中電灯モードキを取り出します。そして、上部のスイッチを指先でひねると・・・ジヨワ――つ

てプラズマで生成されたソードになりました。

「あのが・・光の剣・・綺麗だ!」

「私では光りもしない・・どうやら持ち主を選ぶ剣みたいだぞ!」
ルミナは残念そうに言いました。王女様も残念そうです。

オバケはガオオーーーーと叫びながら闘技場の足元に拳を叩き付けました。そして、その拳を上げると、その拳には大きな棍棒が握られていきました。

そして、リューアイに向つてその棍棒を大きく振り上げると、ビューンっと呑きつけました。

ヒョイってリューアイはそれを避けます。リューアイは、プラズマソードを逆手に持つとシユタツと飛び上がります。そして、高速でオバケを切り刻みました。

パタ！つと闘技場に降り立ちます。プラズマソードのスイッチを切つて、元の懐中電灯モードキにすると腰のバックに戻しました。

スタスターと歩いて鋼の杖を拾います。オバケの所まであるいて、杖でドンーーと殴りつけると・・・ドタドタドタ・・とオバケがばらばらになつて崩れ落ちました。

「見事！」

王女様が顔を出すと拍手しました。サンティ達も、メイドさん達も、王様も・・どつかから現れました。皆、隠れながら見てたようです。

ぱちぱち・・と拍手の中をメイドさんに案内されて闘技場を出ます。

「イヤー・・見事であった。しかし、オバケがあのよくな醜悪なものであるとは思わなんだ。」

王女様の部屋に行くと王女様は、機嫌です。

「父がこれを取らせるようこと・・」

王女様は銀のサークレットを取り出しました。

「何でも、邪神を退ける力があるとが何とか言つておつたが、リューイ殿にはどうでも良いだろ。」

ありがとうございました。

被ると少しカツコ良くみえます。ちゃんとメイドさんが鏡で見せてくれました。

また遊びに来るねーって、お城からかえることにしました。
何時の間にか夕暮れみたいです。とりあえず食事をして帰ることにしました。

カレミーの宿に、ドタドタとエリアが帰つてきました。

「おや？・・どうしたんだね。イヤに慌てるね。」

「城にオバケが出た！・・・退治したみたいだが、誰が退治した
か不明だ。」

急いで着替えるとまた出かけるみたいです。

「あんたも、大変だねえ。」

ドタドタドタ・・・と走り去る姿を見ておばさんは眩きました。

「『ただいま！』」つてリューイ達が帰つて来ました。

「お帰り！・・・いい仕事は見つかったかい？」

「無かつた・・・また明日探すの！」

ライムが答えてます。

まあ、サミニーネの紹介だし、それなりの腕はあるわけだ。ギルドの仕事も良し悪しが有るつて言つし、無理に仕事を見つける必要はないわね。

2階の部屋に帰つていく4人を見て思つたりします。

そういえば・・・あの子のつけてたサークレットは見たことが無かつたけど・・途中で買ったのかしらね？

森の泉の猪退治

今日も、朝早くからリューオーイの稽古が始まりました。一頻り、杖と長剣を振り回した所へライムが顔を出しました。

「お姉ちゃん。出かけるよ！」

え！って感じで驚いてますけど、・・ああ！そう言えば、と思い出したみたいです。

ゆっくりしてたから良い依頼が無かつたのかも知れない・・・だったら朝早く出かければ、という訳です。

4人は、朝早くすぎて人通りも少ない大通りを歩いてギルドに向いました。

こんな朝早くでも、ギルドの大きな扉は開いています。ひょっとしたら閉じる事が無いのかも知れません。

4人が入ると「おはようございます！」つてお姉さん達が挨拶してくれました。

当然、4人並んでお辞儀をして、ご挨拶です。礼儀知らずつて言われたくありませんからね。

依頼板の所に行つてみると、こんな早くでも先客がいました。まだ為り立ての男の子達です。

一生懸命採取依頼を探してるようです。

ライムが「おはよう」って声をかけると、「なんだよう・・ちっちやい子はあっちに行つてな！」って言つてますけど、この位の男の子は生意気盛りですからね。

ライムは膨れてますけど、ルミナは微笑んでます。

皆で依頼板を調べます。やはり、良いのは無い様です。

「此れなんかどうかしら?」

「どれどれ・・・猪討伐。北の森にある泉付近で猪の田撃情報あります。至急討伐されたし。報酬：銀貨3枚・・・」

「少し報酬が高いが、至急ならば納得だ。・・・採取依頼をするための討伐であれば皆の為にもなる」

ルミナは納得したようです。

ルミナが納得すれば問題ない、とこれを受けるために依頼書を外して、カウンターのお姉さんに渡します。

依頼Tmと討伐の証明を確認して出発です。

一旦宿に戻つて、アクネで朝食を取つて出発しました。
大通りを北に進むと城門があります。門番の兵隊さんに北の森の場所を聞くと、この道を真直ぐと言つ事です。

「頑張つて来いよ!」つて兵隊さんに元気付けられトコトコと北の街道を進みます。

途中でお茶を飲みながら休憩していると、畠に出かける農家の荷馬車が通りました。

挨拶すると途中まで乗せてくれるやうです。

「ヤツター!」つてライムは喜んでいます。

農家のおじさんに泉の場所を聞くと、この街道を森に進めば看板が出ているので判るそうです。

森がもう目の前まで来た所で、荷馬車を降りると、おじさんにお礼を言つて森に入ります。

森の木々の若葉はまだ少ししか出ていません。そんなわけで森の中は明るく遠くまで見通せます。

しばらく進むと、看板を見つけました。

「森の泉この先」と書いてあります。そして、看板の示す方向に小道がのびています。

4人は矢印の方向に歩き出します。

森の中をジグザグに小道は続いていました。

前方が少し開いてきました。森の泉に近づいたようです。

突然、前方がガサガサと音を立てたかと思うと、「出たーーー！」つて男の子達が此方に走ってきます。

4人の脇を男の子達は猛スピードで通り過ぎました。

「何だろ？」つて4人は思つたりしてますが、とりあえず臨戦態勢です。だつて、猪の討伐に来たんですから、「出たーー！」が猪である可能性は高いのです。

恐る恐る4人は小道を進んでいきます。

突然に森が開かれて広場みたいな場所に出ました。

中央に泉が湧き出して、森の中に小さな小川を作つています。

そして、依頼の物は・・・いました。泉を挟んだ奥に3匹います。大きさは、リューアイが退治した大猪の半分位ですが、それでも十分大きいです。

リューアイが左廻り、ルミナが右回り、サンディとライムが此処でボルトと魔法で退治することにしました。

「いくよー！」

一声かけてリューアイとルミナが走り出します。ライムは中央の猪にボルトを発射しました。

ズデン！つと中央の猪が倒れました。

「やああーー！」つてリューアイが鋼の杖で猪に打ちかかりました。

ボギー！つて嫌な音を立てて左の猪が倒れます。

「ソレ！」

ルミナがオニギリを振るうと、ズバ！つと猪の頭が落ちます。あつという間に3匹の猪を退治することが出来ました。

「以外と簡単だったよね。」

サンディが皆にそういう時です。

突然、リューアイが杖を振り上げたかと思つと、サンディ曰掛けて投げつけました。

ビューン！・・・ドス！・・・ドサツ！

鋼の杖は、サンディの顔の直ぐ傍を通りすぎて後ろの何かに突き刺さったようです。

サンディはギギイーっと音を立てるように首を回してみると、大きな猪に鋼の杖が突き刺さっています。

「『免！・・とつさだつたん』で声を出す暇も無かつたんだ」

リューアイは取り合えず謝ります。

サンディはハアハア・・言いながら今更ながらにショックを受けていますが、リューアイに悪気が無い事は判つています。背中をバシツ！つと叩いただけで許してあげました。

大猪から杖を抜くと、倒した猪の牙を集めます。これが、討伐証明になるからです。

でも、猪の肉はどうしたかといふと、内臓を抜いて大まかな血抜きをした後で、立ち木を2本切り取り簡単な橇を作りました。橇に猪を4頭乗せると、リューアイが橇を引きます。

森の小道はガサガサと藪が引っ掛けあって大変でしたが、街道に出

るとそれなりに楽になります。

「ずるずると街道を引きずつていくと、朝方リューイ達を乗せてくれた農家のおじさんに会いました。

丁度、作業が終わって帰るところみたいですね。サンディが交渉して、猪1頭で王都まで乗せて貰える事になりました。

「しかし、こんなに貰つていいのかな?ワシの家だけでは食こきれんぞ。」

「良いんですよ。まだこんなにありますから。とにかく、王都の肉屋さんを知つていたら紹介してください。」

「ああ、いいとも。このまま乗つけていくぞ。」

ガラガラと進む荷馬車はラクチンです。

夕暮れ前に王都の北門に着きました。

門番の兵隊さんは今朝挨拶した人です。「おお!大漁だな。」つて言いながら通してくれましたので、猪を1頭進呈することにしました。

「いいのか?こんなにもらつて・・・」

兵隊さんは喜んでました。今夜は門番仲間で猪鍋かもしれませんね。

「このが、行き着けの肉屋だが・・オオイ・密だぞ!..」

農家のおじさんは、そう言いながらお店に向つて怒鳴ります。

「聞こえてるよ・・・何だ此れは?」

「この子達が売つてくれるって言つんだが・・お前さん、買つかね?」

「此れだけの猪をこの季節で・・・買つぞー銀貨4枚だ。」

「銀貨3枚でいいです。その代わり、この部分を下さい。」

「ああ・・・いいとも。待つとれ!」

肉屋さんはたちまち皮を剥いでサンディの望んだ部位を切り分けてくれました。

「また、肉が取れたら家において、何時でも買い取るからな。」

肉屋さんを出て、ギルドに向います。

「泉の猪退治を受けた、赤い靴です。討伐しました。これが討伐証明です。」

カウンターの上に猪の牙をバラバラとカバンから取り出しました。お姉さんは牙を1個1個丁寧に確認します。

「はい。猪の牙4頭分。確かに受取りました。これが報酬です。お姉さんは、牙をトレイに入れると、カウンターの下から銀貨を3枚出してサンディに渡します。

次に向つのは、アクネ食堂です。

「これで、美味しい料理をお願いします。残りは使ってください。」

サンディがリューイの扱いできた猪の腿肉を渡して言いました。出てきた料理は、野趣溢れた猪肉の香草焼きです。とても美味しく頂ました。

代金を払おうとしたんですが、受取りません。残りの肉で十分だということです。

「馳走様つて言つと宿に戻ります。

カレミーのおばさんに金貨を渡すと、しばらく此処に泊まりますと言つて、2階に上がります。

今日は良い稼ぎをしたということかい・・つておばさんは納得します。

その夜遅くにエリアが宿に戻りました。

「あや？遅いね。晩飯はすんだのかい？」

「アクネで猪のシチューを頂いた。猪討伐をした者がいるらしい。門番達も貰いものだと言つて猪1頭丸ごと焼いていたし、肉屋にも少し出回つているようだ。でも、アクネは冒険者から貰つたといつていたが・・」

「確かにこの季節の猪は珍しいね。」

エリアは自室に帰つていきます。おばさんは明日にでも娘の所で、
「相伴にあづかるうなんて考えてました。

オバケってなに？

エリアはギルドの2階にあるラウンジでお茶を飲んでいました。でも、カップの中身はあまり減っていません。

この所の出来事を考えてるみたいです。

（王女様は、オバケ退治だ！って出て行つたんだけど・・・オバケは退治された後だつたつて言つてたのよね・・・）

（そして城に出たオバケも王女様の友人が退治したつて言つてたわね・・・）

（そして、昨日はこの季節珍しい大猪を退治した冒険者がいたと門番が言つてたわ・・・）

（凄腕の冒険者が居るつてこと・・・その冒険者がどうやら女の子のパーティらしいつてことまでは分かつたけど・・・）

（こういう時に限つて個人情報の開示は出来ません・・・つて、私もギルドの関係者じやないの！）

考えてる内に段々ヒートアップしてきたようです。
すっかり冷えたお茶をガブつて飲んで階段を降りていきます。

カウンターのお姉さんの、王都登録冒険者リストをサッと取り上げ、パーティの欄をササーっと読んでいきます。

「ダメですよー・返してください・・・」つてお姉さんが言つてますが、ギロ！つて睨んで黙らせます。

「・・んん！・・これは、サンディ達か！」

エリアの頭で素早く、映像が再現されます。

エリアが片手剣を振るより速く飛び込んで鋼の杖を振るつて灰色熊を倒したのは・・・リューアです。

「ホイ・・返すよ」

エリアはリストをお姉さんに返します。

そして、ギルドを出て行きました。

「全く・・來たなら、來たで挨拶ぐらいしに来ればいいのに・・
ブツブツ言いながら王都の人ごみに紛れていきました。

一方そのころ、お城の王女様は・・

メイドさん達と倉庫の探索です。隊長さんが大怪我をして倉庫から出きたという情報を元に、倉庫を調べているんですが・・かんばしくありません。

居るのは、鼠ぐらいです。メイドさん達がキヤー キヤー言いながら退治してますけど・・

倉庫の一角から扉まで何かを引きずった後がありましたが、これは隊長が傷つきながら這い出した跡だと考えられます。

でも、最初に隊長を此処に連れてきた者達の足跡らしきものは何処にもありません。

「やはり、何も残つておらぬか・・この件も迷宮入り、王宮フ不思議が一つ増えてしもうた。」

「彼女達を呼びましょうか?」

「・・そうだな。退治した者の意見も聞くべきだろ?・・

リューイ達は、王都の町並みを見物してました。

ナナイ村と違つて、お店がみんな大きくて品揃えも豊富です。

広場には屋台も出てます。皆でベンチに座り、串焼きを食べながらジュースを飲んでます。行儀が少し悪いですね。

さて、次は貴族館でも見ようかな!って立ち上がった時でした。
リューイの小さなサークレットがブルブルと震えます。

「ちよつと待つて……なんかサークレットが震えるんだけど、これって何だらう?」

「それって、王様から頂いたのよね。……おいで…ってことかしら?」

「多分、そんなことだらう。」

「行つてみよひよ。……あそこのお菓子……美味しいんだよ。」

お城の門の所に行くと、メイドさんが待つてました。
直ぐに3階の王女様の部屋に案内されます。

「待つておつたで。・・まあ、かけたまえ。」

メイドさんがどうぞ…って椅子を引いてくれます。

高そうなテーブルセットで美味しいお菓子を食べながら、王女様のお話を聞くことになりました。

一昨日のオバケ騒ぎですが、入れ替わられた隊長さんは、誰に襲われたか解らないことです。何故か気がついたら大怪我をして倉庫の隅に居たと言つてゐるそうです。

また、隊長さんの部下は、闘技場までずっと傍についていたと書いており…・・そうすると、隊長さんは何時オバケと替わったのでしょうか。確かに謎ですね。

「謎はあるが。退治したオバケは消えてしまつた。何も残さずにな。お前達と出合つた場所でのオバケも同じだ。やはり、時間とともに消えてある。」

「面白い話をしてるじゃない!」

突然、窓際から声がしました。

皆が窓を一斉に見ますと、エルフのお姉さんが立っています。

「ヒリア殿か・・」

「お婆ちゃんだ！」

王女様とライムが？ つと互いを見つめます。

「ライム！ お久しぶり。来てるなら、来てるつて連絡すればいいのに・・。」

「ヒリア殿の知り合いなのか？」

「サンディ姉妹は私の孫よ。だから、お婆ちゃんでいいんだけど・・・ライムとサンディ、王都では私のことは、エリアちゃんって呼ぶこといいわね。」

お婆ちゃんなんだけど、確かに見かけは若いし・・お婆ちゃんと呼ばれるのはイヤなのかも、つて納得して2人とも頷いてます。王女様とメイドさん達は？？？の状態ですが、エルフの長命と姿を固定できるところ」とは誰でも知つてのことです。最終的には・・フーン、そうなんだ。と納得するしかありません。

「私も、お話に参加したいわねえ。」

エリアさんはそう言つてテーブルに脇の方から椅子を持つてきて座りました。

「ヒリア殿がどこから話を聞いてきたか知らぬが、このオバケ騒ぎには謎が多くすぎる。」

「それは、私も感じてるわ。前のオバケ騒ぎの時に多分此処で作つたであろう場所まではわかつたわ。しかし、何も痕跡がないのよ。」

「ちよつと、気になつたんですが・・」

リューイの言葉に全員がリューイを見つめます。

「……聞きづらくなつたけど……オバケって結局何なんですか？」

「オバケはキメラだ。というか、キメラが多い。何種類かの生物を合体して作られている。・・偶に同一種を合体する場合もあるがな。」

「キメラを作る魔法は、エルフの歴史をもつてしても存在しないの。でも、切つて付けたわけではないのは確かね。」

(姫さん。何言つてるか解る?)

(解説しましょう!・・彼女達が言つているのは、医学的な結合ではなく遺伝子的な結合を持つて作られたといつことね。)

(フランケンショタインではなく、又工に近いってことかな。)

「あのう・・誰かが、新しい魔法を考案したとか・・・」

「それは、十分に考えられる。・・しかし、新しい魔法なり!」
千年は誰も作つていない。もし出来たなら、どの国でも大魔道師として国王に次ぐ地位を与えられるだろう。・・しかし、誰も名乗らんのだ。」

「誰かが世界征服を狙つてるとか・・・」

「!――」

「それは、また斬新なかんがえかただねえ・・でも、そうすると、オバケは兵器として開発・・なんとなく納得しちゃいそうだねえ。」

「仮定だよ。・・飛躍しすぎてるし・・・」
リューイは慌てて否定します。

「しかし、一番的を得てているやも知れぬ。王国を含めて近隣諸國の大魔道師と言っている者の消息を調査せよ。大至急だ。」

マイドさんが慌てて部屋を飛び出して行きます。

「それと、問題が一つあるわよ。今までオバケを退治したのは、リューアだけだと言つこと。」

「確かに・・追い払った者は居たが退治したものは初めてだ。つまり、退治する方法を考えねばならぬと言う事じやな。」

確かに、最初のオバケは【レギオン】次はプラズマソードですから、この世界の人には無理な話です。

「基本的に切れないことはないです。でも、相手の回復力というか再生能力が半端じゃないので、それを上回る速度で切れば倒せます。若しくは、切断面を焼いて再生能力を低下すればなんとか・・レギオンは千近い斬撃ですし、プラズマソードの切断面は焦げてますからね。」

「深い傷を負わせて、火炎弾を打ち込むといつ事で対処できると・・

・フム、やつてみる価値はありそうじやな。」

王女様はなにやら考え込んでいます。

そんな、王女様をエリアさんは一瞬ながら眺めています。

オバケ退治の依頼書は2つ

お城の王女様の部屋で密談してゐる最中です。
どうやつたら、オバケを退治できるか……難問ですね。

「そう言えば……もう一つ方法があつたな。あの大熊だ。・・確
か、あれは・・そうだ。リューアの召還魔法で退治したのだったな。

」

「なにそれ？」

「確かに・・鉄人と呼んだと思うが・・身長はギルド建屋程の巨人
だ。異国の姿で、片刃で反りの深い剣で一刀の元に切り伏せた。
しかも怖ろしい程の剣速で、剣を鞘に入れた音で我等に切つた事を
知らしめたぐらいじゃ。巨人は別としてもあれほど益荒男は恐ら
くこの世に居るまい・・」

「そんなに早いの？」

「見えません（でした）」

「確かに異常な再生速度と言えども一瞬に体を両断されてしまう
こともあるまい。・・それも、退治方法のひとつと数えて良いだ
らう。」

「皆さん考え中です。確かに方法はあります。でも、再生速度を上
回る攻撃方法はそんなに多くはありません。

「確かに、赤い靴は冒険者であつたな？・・では、長期の契約も
可能と言つわけだ・・」

「ちよつと待つてください。直接契約は不味いです。赤い靴のラ
ンクはまだ銀1つ程度・・ギルドを通す必要があります。」

エリアが王女様の話に駄目だします。

そうなんです。

金カードであれば、ある程度の融通は利きますが、銀カードで低レベルとなると、王女様の勅命を「ハイ、そうですか。頑張ります。」って聞く訳には行きません。そんなことしたら誰もギルドを使用しなくなります。

ギルドは冒険者への仕事の斡旋所でもあるわけですから、ギルドを通すのがスジとなる次第です。

「しかし・他に引き受ける者はおらんぞ……それにギルド仲介ではリューアイ達が我の命を断る事も可能となる。」

「それは、此処で念押します。・それに万が一、リューアイ達以外が引き受ける場合も想定されます。それは、金額を抑えることで可能と考えますが、

2チームを募集すれば宜しいかと。」

「・・・では、期間は今年の灰色の月半ばまでとし、報酬は金貨10枚。仕事はオバケの調査とオバケ退治とする。・・これで良いか?」

「そんなものかと・・但し、契約時に特例として王女様より調査費用として別に報酬を『えればリューアイ達の宿代も問題ないでしょう。』

「では、ギルドに依頼してまいれ。」

そんなわけでリューアイ達は半ば強制的にオバケ退治の手伝いをさせられることになりました。

でも、宿代は別に出してくれるなら故郷に帰るときは金貨10枚を持って帰れるわけですから、そんなに悪い話でもなさそうです。

後は、リューアイ以外にもオバケを退治できる方法を4人で考えればいい事ですし・・・

しばらぐするとヒリアさんが帰つてきました。

「ギルドとの話は着きました。明日の朝には依頼板に表示されます。但し、「依頼は公平に」の原則通り、依頼を受けるTmは先着になります。」

ギロツテヒリアさんがサンディ姉妹を見ます。ちゃんと早起きするのよ！つて無言の圧力ですね。
ライムは、アワワ・・つて言つてますけど怖かつたのかもしれません。

「それでは、早く帰つて、寝ますので・・・」と言つて城を後にしました。

次の日、朝早くギルドにリューアイ達は向います。
とりあえず、日の出前に行けば、依頼を取れなくともいい訳位は出来るだろう・・・つて極めて曖昧な考えでリューアイに起して貰いました。

朝早くからギルドの広間は人が溢れていました。

依頼の中には、遠くまで行く必要のあるものもありますから、仕方ありません。

リューアイ達はバラバラになって依頼板の依頼書を探します。

オバケ・・オバケ・・と言いながら探してゐる4人を他の冒険者達は奇異の目で見てますが、そんな事は気にもしません。

「あつた！」

ライムは、勢い良く依頼書を高く掲げました。・・俗に言つ「取つたどー！」状態です。

他の3人が急いで駆け寄ります。

確かに、オバケ調査と討伐の依頼書です。

「ライム・・良くやったわ！」

うんうんとサンティは頷いてます。リューイとハミナは、パチパチと拍手します。

カウンターのお姉さんは所に持つていきますとリューイ達のワンクの確認です。

「黒2つに銀1つ・・銀に金の縁取り！」

お姉さんは始めて見たのか、リューイのカードを見て驚いてます
が、赤い靴の平均レベルは銀1つ程度なのでしょうか？さらに確認されました。

「この依頼は、あなた達にはちょっと荷が重いような気がするけど・・・」

「大丈夫ですよ。既に、オバケを4体退治してますし・・その内の1件は王女様も見てますから。」

サンディのオバケ4体退治に周囲の視線が一斉に集まりました。
(ああが・・。どうやつたら倒せるんだ。・・小さい娘もいるぞ！・・)等々と囁き声が聞えます。

「では、依頼します。この依頼は、一定期間、王女様の指揮下に入ることになるので、至急お城に向ってください。この依頼書で王女様に会えるはずです。では、御武運を！」

「解りました。」

リューアイ達はギルドを後にしてお城に向いました。

お城の門にはあのメイドさんが待っていました。早速、王女様の部

屋に案内されます。

すると、そこにはリューアイ達以外にもう一組の冒険者のチームが王女様の前でお茶を飲んでました。

「来たか・・2組としたのは正解だったよつだな。」

先客のチームも全員女性ばかりです。

その中の黒髪から尖った耳が覗いてる人が此方を見ました。

「我々は、竜の牙のメンバーだ。ランクはもう直ぐ金になる所・・そちらは?」

「赤い靴の者です。ランクはようやく銀1つ・・ひとつといろかな。」

「竜の牙から見ればランクはかなり低い・・しかし、赤い靴はオバケを既に4体倒しておる。その内、2体は我的目の前でだ。その実力は侮るものでない。」

銀1つに軽蔑した眼差しを向けた竜の牙のメンバーに王女が告げます。

途端に彼女達の顔色が変わります。

(どうやって・・倒せるの?・・王女様がウソを言つとは思えないし・・・)ヒソヒソ声で話します。

「王女殿・・申し訳ないが、どうやつたら銀1つにオバケが退治できるか教えて欲しい。」

「話してやるうづ・・それより、リューアイ達も席に着け。」

「先ず先に言つておく。リューアイ・・カードを出してみる。」

リューアイは王女様にカードを渡します。

王女様は、そのカードを竜の牙のメンバーに渡しました。

「これが彼女の力一ドジや。実力は金・・但し、経験が浅いために銀でいる。」

「では、実力は・・・これは、竜の討伐章・・・これほどの者達とは、存じませんでした。」

「よい。・・それで、倒し方だが・・色々と方法はある。」

王女様は昨日のお茶会で得た知識を纏めます。

1つ目は、相手の再生能力を超えた傷を与える続けること。

2つ目は、切った場所を焼いて再生させないようにすること。

3つ目は、真っ二つに切断すること。

今までの退治方法からこのよつた方策が取れる事を説明しました。

「この者は、オバケを一刀両断したのですか？」

「実際には、この者が召還した巨人により倒されたのがな。」

「・・俄かには信じられない。私と勝負出来ないか？」

「止めておけ、この者の分身能力は4体まで分離できる。そして、その武器は・・・リューアイ彼女にそれを持たせてやれ。」

リューアイは錆の杖を黒髪のエルフに渡しました。

渡されたエルフは持ち上げようとして、驚きました。片手では持ち上げる事も出来ません。

「それを片手で風車のように回しながら戦うのだ。剣で受ける等不可能。体ごと持つていかかるぞ。」

「しかも、分身しながらそれをやるだけの能力がある。」

竜の牙の連中は驚いてます。ひょっとしたら、彼女一人の能力は彼女達を大きく引き離しているのかも知れません。

試合で試そうとしましたが、王女様はそれを無駄だと言い切ります。

ひょっとしたら・・・最初から王女様は彼女達に依頼したかったかも知れない・・・そう思い始めました。

3本の矢

王女様の部屋で2つのT-mの顔見せが終わると、早速オバケの会議です。

何時の間にか、エリアさんも来てました。

「よいか。オバケによる人心の混乱を防ぐとともにオバケの討伐、そしてオバケがどうして造られているか・誰が、何のために・・・」

「オバケ退治と調査の2つを行う事になるのね。」

王女様とエリアさんが仕事を整理していきます。

「今回の依頼に応募してくれた2つのT-mは、それなりに実績がある。・・しかし、現在は単一で出現しているオバケが複数同時に出現した場合は対応が取れなくなる可能性が高い。」

「通常の戦士が対応できるかを見極める必要があるってことね。」

「ここで、2つのT-mを分割して、戦士T-mと魔道師T-mに分けめうと思う。」

「2つのT-mとも、戦士2名と魔道師2名で構成されてるしね。」

「しかし、極端に分離しては作戦上の支障もあるだろう。」

「戦士T-mには魔法使いが必要だし、魔道師T-mのも戦士がいるつてことよね。」

「よつて、戦士T-mには、我の近衛から魔道師を1人付ける。魔道師T-mには、我とエリアがいれば十分だろう。」

「2つのT-mの連絡は、近衛に持たせている魔道石による念話を用いる。」

皆真剣に聞いていましたが、リューアイは頭の中に「が浮ぶと、？」が段々と大きくなりそつちばかり気が移ってしまい、王女様とエリアさんのお話なんか馬耳東風の状態です。

「ウム！・・リューアイ・・聞いてあるのか？」

突然、王女様に問い合わせられて、ビクッ！って体を硬直させます。

「何を考えておったのじや？」

「・・・いや・・あのあ・・どうしたらオバケを探せるのかな？つて考えてました。」

「フム・・確かに疑問じやろづ。しかし、よい方法があるのじや。・・ギルドの相互間通信網を使う。されば、王国内外のオバケに関わる情報は直ぐに分かるという寸法じや。」

「ギルドと言えば・・おかしなことがあるのよね。・・王国外でのオバケの話は聞かないのよ。」

「王国限定じやと！」

皆、ちょっとと考え込んでます。

幾ら王国の領土が広いと言つても、オバケが王国限定となると原因はこの国、若しくは他国からのテロ行為となります。

王女様には王国が狙われる理由が思いつきませんし、竜の牙の皆さんも他国でこの王国の悪口を聞いたこともありません。

「そう言えれば・・北の国では竜の被害が増えているって、聞いたことがあります。でも、竜はオバケではありません。」

「似た話は、東の国もあるのね。灰色熊が今年は当たり年つてね。」

「私も聞いたことがあります。ベテランの冒険者が、（近年討伐依頼の内容が変わつてきてる。より大型で凶暴な獣が多くなつた。）つて。」

「異変は王国だけではないと言つ事じやな。」

「やはり、オバケに限定しては本題を外すことも考えられますね。」

「

「フウーム・・・」

「あの～・・ギルドをこの件に加える」とは出来ないんですか？」「どうこいつことかな？」

「先ほど、ギルド間の通信網があるって言つてましたけど・・それを使って過去と現在の様相の変化を調査して貰うんです。オバケ出現の報告も大事ですけど・・変化がどのように起つているのかも調べておく必要があるよなな気もするんですけど・・」

「比較調査つて訳ね・・そういう調査依頼ならギルドは受け付けられると思つよ。」

「なるほど・・以外と重要なことが解るかも知れぬな・・この際だ、父と交渉して博士達の協力と転移陣の使用を承諾させよう。」

そんなことをその日一晩話し合ひ、夕暮れと共に散会となりました。

この続きはまた明日つてことですね。

宿の部屋に車座になつて、4人で今後の事を話し合つてます。

「なんか、大変なことに巻き込まれたけど・・大丈夫だよね。」

「Tmを解散するのではなく、2つに分けて1つの仕事をするのだから、問題なかろう。・・灰色の月には一旦、仕事を終えることも打ち合わせ済みだ。」

「そうよね・・」

「ライムは調査部隊だし・・・ヒリアさんと王女様も強いみたいだから大丈夫だよ。」

「でも、お姉ちゃん達と離れるの・・・ヤダなあ・・・」

次の日お城に行くと、昨日の顔ぶれが揃っています。
メイドさんにテーブルに連れて行かれ、早速、お茶が出されました。

「皆、まつてたのよ。」

「揃つた事だし、始めるか。」

「昨日の話を続ける。先ず、オバケ調査とオバケ退治の依頼だが・・・オバケに限定しては本筋を外すことになる。よって、依頼名称を（3本の矢）と改名する。名称変更に伴う報酬の変更は無い。但し、連携を図るため住食をこちらで提供する。お城の客間に住まるのだ。」

「次に、ギルドの件だが・・・協力を図ってくれる事になった。また、城の博士達もこの件で動く事を了承した。」

「先に3本の矢と言つたが、我等の行動も3つに分かれる。」

「オバケ達を退治する部隊。・・・ミケナイ、マルチナ、リューイ、ルミナ。それに近衛の火炎魔道師のポーチナの5人だ。・・・リーダーはミケナイとする。」

「次に、オバケ達が出現した周辺を調査する部隊。・・・ヘンネ、ユーミン、サンディ、ライム、エリア・・・そして我がリーダーとなる。」

「最後に、分析と対策検討を図る部隊。・・・城の博士とギルドがこれに当たる。今日は来ていないが、必要な時には向こうからやってくるだろう。以外と変人が多いが頭は切れる。」

「そして、父から転移陣の使用許可を貰った。ポーとヒリアそし

て我が使用すれば各自の部隊を田舎近くの町まで移動する」とが可能だ。」

「各自、装備等に問題があれば申し出るよつこ・・国の仕事を請け負つたのだ。これを機会に武具等を新調するのもよからう。」

「あの～・・鍛冶屋を紹介してくれませんか。」

「どうあるのじや?」

「剣を作つて貰いたくて。・・武器屋では良いのが無いんですね。」

「じゃあ、出かけましょーー・・ざつせ、後は部屋割りでしよう。」

「」
エリアさんは、リューアを立たせると手を引いて部屋を出て行きました。

お城を出て、大通りを歩き、少し路地に入ります。

石造りの低い建物が並んだこの周辺は王都の職人街となってます。似たような建物の並びを見ながら歩いていくと、一つの建物の前でエリアさんは止まりました。

「」
「」

扉を開けると軽く店主を呼びました。

奥のほうから、カンカン・・と聞えていた槌音が止むと、筋肉質の小柄なお爺さんが奥の扉を開いてやってきました。

「誰かと思えば・・お前さんかい・・今日は何だね?」

「連れの武器を造つて貰いたいんだけど・・」

「坊主のかい?」

「・・あのね!・・」の子は女の子。「

ドワーフは下からリューアイをスキヤンします。下から上へ・・上から下へ・・胸で止まり、その小さな膨らみを、哀れむように見ています。

「すまなかつた・・では、お嬢さんの武器をつてとか?」

「そうよ。リューアイ。杖をお爺さんに渡しなさい。」

ドワーフは受取つた杖の重みに吃驚します。

「この子は、剣も持つてるけど・・数打ちの剣よ。剣を忘れないよう持つてるだけだわ。」

「その剣も、見せてみろ!」

リューアイは肩に担いだ剣をドワーフに渡します。

ドワーフは剣を鞘から抜いて長剣をしげしげ見てました。

「・・確かに、数打ちだな。・・どんな剣が欲しいのだ。エリアはお得意様だ。少しば相談に乗つてやる。」

「・・折れず、曲がらず、良く切れる・・そんな刀が欲しいんですけど・・」

ドワーフは考え込みました。今彼女が言つた事は、剣を打つドワーフ達の理想です。でも、折れない剣は曲がつてしまします。逆に曲がらなければ折れてしまます。その限界ギリギリに両者の特性を持たせる事を要求しているのです。

過去に、1つだけ成功例とされた剣がありました。伝説の剣オーギリです。

ふと、ドワーフは気がつきました。

(この娘は何と言つた・・刀と言つた・・剣ではないのか?刀とは聞いたことが無い。前振りから推測するに剣の一種だとは思うが・

・

「お嬢さん・・申し訳ないが、刀と言ひ武器を打つた事が無い。簡単な絵を書いてくれないか?」

リューイはドーフが差し出したペンで、さらさらと紙に描き出します。

刃の長さは1m程度、刃に少し反りがあり、片刃です。柄は別構造でたつた一本の釘で止められます。鞘は皮ではなく木で作られるみたいです。

「こんな感じの武器ですけど・・」

「見たことも、聞いたこと無い剣だな・・・何故反りがあるのだ?

?

「引いて切るからです。刀は切るために特化した武器です。」

「この波目は、鋼を何度も叩いて伸ばし、折り曲げ、また伸ばし・
・其の過程で生じる刃紋です。」

「この娘は今なんと言つた・・叩いて伸ばし、折り曲げて伸ばす・・
俺達は叩いて伸ばすが、1回きりじゃ・・この娘はそれを何度も行
うと言つてある。」

どんなものが出来るかわしにも判らんが、この国ではまだ誰もそ
んな技法は知らんはずじゃ。

訓練それとも試合

鍛冶屋さんにリューアイは刀を作つてもうおつと頼んでるんですけど・・

鍛冶屋さんはそんなの見たこと無いって言つてます。

確かに、リューアイが元住んでた世界でもレアな武器ですからね。

「造り方で、他に知つてている事があれば教えて欲しいのだが?」

「え～っと・・確かに、純度の高い鉄・・玉鋼を使って・・最後に刀を真っ赤に焼いて、お湯に入れるんだと聞いたことが・・」

「玉鋼とは?そしてお湯に入れるとは?」

「玉鋼とは、砂鉄から造る極めて純度の高い鉄です。そして、お湯に入れるのは焼き入れと言つて・・刀の価値がこれで決まる程度です。昔、ある刀鍛冶は、弟子が間違つてお湯に手を入れた時、その手を切つてしまつた程に秘密な部分があります。」

「微妙な温度が影響するということか・・・」

「何とかなりますか?」

「ああ・・造つてやるとも。・・エリア、感謝するぞ。」

ドワーフの鍛冶屋さんは、喜んでます。

ドワーフ界鍛冶屋の最高傑作・・オニギリ・・これを越える可能性が出てきたからです。

聞いた限りでは、2つの鍵があることが解りました。鉄を叩き、鍛造で多重積層構造を造る事。そして、完成直前の焼入れです。

今までは、鉄鉱石を熱して、叩いて形を作り、研いで終わりです。更に、彼女は砂鉄で作ると言つてました。

砂鉄は純度が高いのですが・・それを形に纏める事は困難です。(フウーム・・鉄の純度を要求するのだな・・しかし、純度が高

すぎると、折れる原因にもなる・・)

ブツブツと呟きながら店の奥に入つてこまました。

「じゃあ、またね！」

エリアさんが店の奥に軽い挨拶をして、リューアイを外に連れ出します。

「大丈夫よ。お爺ちやんだけど…腕は確かよ！」

リューアイはエリアさんは、そう言つてくれましたが、さて、どんなのが出来るのかは想像出来ません。

でも、がんばってくれるみたいですから…そこそこ期待できるかもしれませんね。

お城にトコトコ歩っこくと、門の所にメイドさんが待つてました。

「エリアさんは、王女様がお待ちです。リューアイさんは私に付いて来てください。」

「じゃあねえ…」

軽くリューアイに手を振つてエリアさんは城の中に入つていきます。リューアイはメイドさんに連れられて城の2階にある部屋に案内されました。

「エリが、リューアイさん達の部屋になります。どうぞ中へ！」

扉を開けて中に入ると、真中のリビングルームの両側に部屋があります。

「帰ってきたか…リューアイはエリだ。」

右の扉が開いて、ルミナがおいでをおいでをします。

トコトコと部屋に入ると、大きなベッドが3つありました。

「窓際は頂いた。・・・真中はポーチナが取つてゐる。リューアイはこ
こだ。」

ルミナが壁際のベッドを指差します。まあ、どうぢでもいじこと
ですけどね。

トントンッと扉が叩かれました。扉が少し開いて、ポーテール
の女の子が顔を出しました。

「お茶がはりますよ。・・・来て下さい。」

ばたんと扉が閉まるど、2人は顔を見合せました。

「今のが、ポーチナだ。・・・さて、竜の牙とい対面だ。」

2人は扉を開けて、リビングに入りテーブルの席に着きます。
竜の牙の2人はもう席についています。

ポーチナが自分のカップと4人のカップにお茶を注いで、お茶会
の開始です。

「エルフの戦士は珍しいな。・・・魔法は使わないのか？」

「生憎と、双子の妹が魔法を極めている。・・・私はこれだけだ。
ミケナイというエルフの問い合わせにルミナが背中のオーギリを叩きま
す。

「そうちか、我々エルフの言い伝え通りというわけだな・・・私も姉

に魔法を譲つて いる。」

エルフは通常魔力が人間よりも高いのですが、双子が生まれると、片方に全て移るみたいですね。でも、もつ片方は通常のエルフより強靭な肉体を得ることになるんですよ。

「まさか、討伐章を銀で見るとは思わなかつたわ。・・ホントに強いのね。」

マルチナは人間です。リューアイを興味深々で見つめます。

「私、見てました・・毎朝鍛錬してるんですね。まるで舞踊を見てるようでしたわ。」

ハーフエルフだと言つていたポーチナも会話に参加してきます。

「どうだ・・此処で何時出動するか判らん時を過ぎますより、訓練がてらに立合つてみないか?」

「面白い・・確かに暇だ。」

「やるんですか?では、リューアイさん相手をお願いできますね?」

「わたしは・・応援しますね!」

立会い場所は、リューアイが隊長さんに化けたオバケを退治した闘技場です。

いつたい何処で知つたのか知りたいぐらいに観客がいますが、軍服を着てるとこ見ると、城の警備部隊の人達みたいです。

「お姉ちゃん・・がんばれーー!!」

サンディとライムも来てます。ホントにこの城の情報網は不思議なぐらいに広がりますね。

第1回戦はミケナイとルミナです。

どちらも珍しいエルフ戦士ということで観客の応援も力が入って

ます。・・でも、どちらも美人で、観客が男性なのが原因だとリューアイは冷静に分析します。

「では、行くぞ！」

「オオ！」

闘技場の真中で、ミケナイとルミナが見合つたかと思つた瞬間に、上空に飛び上りました。

枝渡りの応用です。エルフ戦士の戦い方は空中戦なんです。

上空に飛び上がりながら互いに剣を抜刀してガシ！・・ガシ！と打ち合います。

上ったものは当然落ちてくるわけですが・・その状態でも、剣戟の音がします。

着地と同時に互いが後飛び・・直ぐ剣を上段に構えて相手に向つて走りこみ、ガシン！・と互いに鎧がかみ合いました。

「やるな！」

「フン・・お前もな！」

互いにピヨンっと飛び跳ねて距離を取ります。

ルミナが舞いを舞うように剣を回しながら少しづつミケナイに近づきます。

「・・・それは、・・・【舞闘剣】・・話には聞いていたが・・・」

ミケナイは剣を正眼に構えます。舞闘剣の剣スジは円の動きです。始めと終わりがありません。隙が無いのです。

でも、一撃を交して相手の動きを止めることが出来れば・・・

ガシンと剣がぶつかりました。

一瞬、取ったとミケナイは思いました。

でも、ルミナはぶつかった剣の反動を利用して素早く体を反転します。

そして、ミケナイの首すじにピタッと剣を押し付けます。ちょっとでも、どちらかが動けばミケナイの首から鮮血が飛び散るような状態です。

ガチヤン・・とミケナイの手から剣が滑り落ちます。

「参った！」

ミケナイの降伏宣言です。

ウオオオオー・・・と闘技場が沸きました。
ルミナはミケナイが落とした剣を拾つと、相手に渡します。

「ありがとう・・しかし、【舞闘剣】か・・・話には聞いていた。
だが、それを使うものは、隠れ里の者のみ・・」

ミケナイは自分の剣を調べてます。刃のあちこちに深い傷が刻まれています。

ルミナが剣をしまうのを見て、驚きました。はっきりとは判りませんが・・傷が見えません・・

「ルミナ・・お前の剣は・・その剣は・・まさか…」
「オニギリだ！」

スタスターと闘技場を出るルミナをミケナイは呆然として見送ります。エルフ界の伝説・・【舞闘剣】の使い手が・・オニギリを持つ

者が今日の前にいるのです。

魔法の使えないエルフにとつての憧れ・・オバケ退治は依頼通り行つまでも、ルミナに師事して【舞闘剣】をなんとかものにしたい・

・ そう思ひと、ルミナを追つて闘技場を後にしました。

さて、次はリューアイとマルチナです。

2人が闘技場の中央に出た途端、ワアアアアーコという喚声が上ります。

鋼の杖を持つたりューアイと馬鹿でかいハルベルトを持ったマルチナが互いの武器をガシン！と打ち合わせると3m程の距離を置いて対峙しました。

普通の人なら片手ようやく持ち上げられる鋼の杖をクルクルとバトンのように回して相手の隙をリューアイは窺います。

マルチナはハルベルトを斜めに構えジッヒリューアイを見てます。微動だにしません。

先ずは小手調べ・・リューアイは体を回転させながらクルクルと回していた杖を片手に持ち替えてハルベルトの柄に杖の先を打ちつけようとしました。

マルチナは僅かにハルベルトを持ち上げると、ガシン！と柄の石突に近い部分で受け止め、その運動エネルギーを利用してハルベルトを回すように斧をリューアイに叩きつけようとしました。

リューアイもハルベルトとの衝突を利用して体を回転させる事で一撃を回避すると同時に、反対側への攻撃に移ります。

一旦、攻撃を始めると止まる事がありません。

でも、この攻撃はリューアイが昔、カンフー映画を見てたことで体を動かす事が出来るのですから、人間何が役に立つか判りませんね。

マルチナの攻撃は、後の後つて感じの攻撃です。自分からは攻撃に出ませんが、余程、動体視力が良いのでしょうか…的確に、攻撃を見切つて反撃してきます。

男でも振り回すのが大変なハルベルトを相手の攻撃の力を借りて動かしているようにも見えます。

（この子・・【アクセル】使つてるよー!）

（加速状態なのか？・・道理で、動きに追従出来る訳だ・・）

（どうするの？）

（【アクセル】ってどの位持つの?）

（人によるけど・・以外と短時間よ。・・だつて、その間動いてるんだから・・）

（じやあ・・この方法で・・）

突然、リューアイの攻撃速度が上りました。でも、加速してるわけではありません。今までよりも体の動きが少し上っただけですが、末端部分の杖の先は凄いスピードで回転してマルチナに打ちかかります。

マルチナは最初は的確に攻撃をさばきながらリューアイに打ちかかって来ましたが、段々と攻撃が散漫になり・・ついには、攻撃を受け流すのがやつとの状態です。

そして、

「ヤア！」

と掛け声とともにヒュンヒと空気を切り裂いた杖をマルチナは避ける事が出来ませんでした。

思わず口を閉じたマルチナですが、幾ら待つても衝撃はありません

マルチナが口を開けると、首スジにピタリと杖が止まっています。

ガシャン・・とマルチナはハルベルトを離します。

「負けましたわ・・【アクセル】で有利でしたのに・・

闘技場にワアアアアーッといつ喚声が上ります。

どうやら、試合が終わりました。

怪我もなく無事に済んで良かった・・なんてリューアイは考えてました。

ミケナイの驚き

オバケ退治工房の監さんは、現在部屋でお茶会の最中です。魔道師のポーチナがメイド服でお茶をお給仕します。数時間前までの、ちょっと気まずい空気はありません。闘技場での戦い済んで、気は晴れて・・って感じです。

「・・すまん。少し高慢でいたようだ。」

ミケナイが頭を下げるトマルチナも同じようにリューイ達に頭を下げました。

「・・いや、私は頭を下げる程の実力は無い。・・運が良かつただけだと思っている。」

「運も、実力の一つだ。・・といひで、さつきの舞闘剣・・あれは、エルフの隠れ里に伝わるものと聞いたことがある。それに、その剣は・・あの伝説の剣なのか?」

ミケナイは気になる事をストレートに聞いてみました。
エルフ界でも、隠れ里を知る者は少ないのです。

ミケナイがまだ小さい頃、お母さんにしてもらつたエルフの伝説の中に不思議な隠れ里とそこには伝わる、かつての技術、剣術そして名剣の話がありました。

(その名剣はどんな魔物でも一撃で倒せることから「オーラギリ」と銘を付けられ、鉄の剣をも切ることが出来るのよ。)

(剣術は連續する攻撃が円を描き、まるで踊っているかのように見える。それで、舞闘剣って言つんだけど・・隠れ里にしか伝わっていないって聞いてるわ。)

ミケナイは、冬の山村で炉辺で聞いたお母さんの言葉を思い出します。

あれから、100年位過ぎてます。一緒にきいてた兄弟、姉妹は今何処にいるのだろうか？村はあるのだろうか・・この依頼が終わったら、直ぐにでも会いに行こうって決めました。

「・・同族には隠せないか・・確かに、私は隠れ里のものだ。そして、この剣はオニギリ・・長老にたくされたものだ。」

ルミナは今までの出来事をミケナイ達に話ました。

妹ロミナの病気と、唯一つ治せる方法・・

恋の洞窟・・

隠れ里からの追放と長老から託されたオニギリ・・

「・・せうだったのか・・私でも、治せる方法があるのなら・・たぶんそうしたと思う・・」

ミケナイはルミナの長い話を聞いてそう言いました。

「ではルミナさんは、もう一度ヒロミナさんと会えないんですか？」

「ああ・・直接にはな・・しかし、話は出来るし、姿もお互に何時でも見ることが出来るだ。」

ルミナはそいついで腰のポーチから、コンパクト型通信器を取り出しました。

「この中の鏡に相手が写るんだ。・・ロミナと分かれる時、天から授かった・・」

天から授かっただけ。隠れ里では、神様がまだ現実のものとして存在しているのでしょうか？

3人は不思議そうにコンパクトを見つめています。

リューアイだけはちょっと冷や汗をかいてますけど……

「ところで……一つお願いがあるのだが……私に、舞闘剣を伝授してくれ……頼む！」

ミケナイがテーブルに頭を付けてルミナにお願いします。

「……いいぞ。リューアイにも教えるしな……それ程、難しくはない。リューアイは一度見ただけで覚えたみたいだからな。」

3人はその言葉に吃驚します。

世界には、沢山の武術家がいます。それぞれ長い経験の末やっと辿り着いた武術のはずです。それを見ただけで覚えられるのでしょうか？

マルチナはさつきの試合を振り返ってみました。

最初は確かに自分が有利だつたと今でも思っています。

でも、時間と共に、自分の行動が先読みされていったような気がしてきました。

（自分の修行したハルベルト槍術がリューアイにマスターされた……）

「しかし、その剣は早めに修理したほうがいいな。オニギリと打ち合つたんだ、ボロボロだろ？」

ミケナイは鞘から、長剣を取り出しました。
あちこち刃が欠けてます。また何箇所かは、オニギリの斬り箇所がV字形に入っています。

「オニギリ・・確かに切味は鋭い。・・剣をも切り刻むとはこのことだな・・」

「切味なら上を行くものがある。」

ルミナは立ち上がると、オニギリを持ちテーブルの上の花瓶をジツと見据えます。

オニギリを鞘から抜くと、シュン！って花瓶の上を拵いました。花瓶に差されていた花がゆっくりとテーブルに落ちました。

「横一文字に花の茎を切つても花びらが落ちる事もなく、花瓶も倒れず・・正に伝説だけの事はある。」

ミケナイがオニギリの切味に感心してます。

ルミナは、そんな感心ごとを気にせずにリューアを見据えます。

「リューア・・光りの剣で花瓶を切れ！」

リューアはルミナの顔を見ました。頷くのを見て渋々席を立ちます。

す。

腰のポーチから懐中電灯モードキを取り出します。

【ターボ】と小さく呴きました。これで剣速が10倍に跳ね上がりります。

腕を振ると同時にプラズマ形成スイッチを操作して、1m程の細いビームを形成します。

テーブルの花瓶に向つて数回腕を振るつた所で、スイッチを切り懐中電灯モードキをポーチに戻しました。

3人はリューアを見てましたが良く解りませんでした。

腕を振ると同時に糸のような光りが棒の先から現れ、テーブルの

上を数回行き来したかと思うと終わりでしたから・・・

リューイが席についたのを見て、もう終わったの?と不審におもいましたが、ポーチナが手に持ったカップをテーブルに戻した時に、その結果が解りました。

「カチヤー!」とテーブルの皿にカップが戻された時です。
パシヤー!つといふ音を立てて、花瓶が四散しました。

まるで、自分からわれたような感じです。

数辺の欠片に分かれた一つをミケナイは手に取つてみました。
確かに、切られています。割れたものではありません。

「・・・今のが光りの剣か・・光りのスジが何度も行き來したのは
見えたが・・これ程の切れ味なのか・・」

「防具、防御魔法に關係なく切れるようだ・・しかし、切れ味があまりにも良すぎる・・為に、リューイはあまり剣を使いたがらない・・」

「確かに、乱戦になると危険だな・・しかし、頼りにもなる。・・
光りの剣は我々にも使えるのか?」

「以前試してみたが・・剣すら出すことが出来なかつた。・・何でも特殊な技を必要としており、我々には習得出来ないそうだ・・」

「・・あまりの業物は、世界を乱す・・確かに、我々には過ぎたものだ・・」

「そう言つとミケナイは席を立ちます。

「この剣では、討伐には耐えられん・・城下の武器屋で剣を手に入れてくる!」

「それでしたら、私が一緒に参ります。・・武器と防具は王女様がお支払いになりますから、気に入ったものをお探し下さい。」

ポーチナが慌てて、ミケナイの同行を申し出ます。

2人が出かけると、部屋には3人残りましたが、特にすることもありません。

こんな時は・・部屋に戻つてお昼ねですね・・

数日が過ぎていきました。オバケの情報は入ってきません。
サンディ達は城の倉庫を再度調査してゐみたいですが、状況はあまり芳しくないようです。

ルミナはミケナイに舞闘剣の教授です。

それなりに剣を使ってきたミケナイですが、今までの動きと余りにも異なるためか、中々思うように体が動きません。

「本当に、リューアイはこれを一度見ただけで覚えたのか?」

「本當だ・・しかし、その前にリューアイの形を見たが、少し、舞闘剣に似たものであつたことも確かだ。」

肩で息をつくよになつたため、少し休む事にしたミケナイでしたが、遠くで何も持たずにゆっくりした動作を繰り返していたリューアイをボンヤリと見ました。

「まるで、踊りの練習だな。・・あんな練習に意味があるのか?」

「一人では・・そうだな。演舞といつぐらこだから踊りと見ても良いのだろう。・・だが!」

ルミナは遠くで練習していたリューアイを呼び寄せます。
走つてきたリューアイに、2人の演舞をミケナイに披露することを了承させました。

「よく見ている。最初はゆっくり始める・・最後は私の最高速で

対応する。演舞が何かわかるはずだ。」

ルミナはそう言って、リューアに始めるよう促します。
リューアの動きにワンテンポ遅れて、そして向かい合つてルミナ
は演舞を始めました。

最初は距離をとつていましたが、少しづつ距離を狭めます。

ミケナイは最初では宫廷での宴会に向いているような優雅な2人の舞を見ていましたが早くなるにつれ、突然に理解しました。

2人は舞を舞っているではありません。

徒手空拳で戦っているのです。

足を払うと、相手は体を捻りながら回避を行い、その回転を利用して攻撃に転じます。

回転しながら斜めに相手の懷に入り急所への打撃を、腕で払い流して、その腕を折る動作に入ります。

段々と演舞の速度が上り、2人が交差するたびにパシ！・・パシ！つと袖や裾の空を切る音だけがミケナイには聞えるだけです。

そして、唐突に2人は拳を打ちつけた状態で停止しました。

「全部が攻撃と防御なのか・・演舞か・・なるほど舞闘剣に似ているところがあるな。」

「それが解れば十分だ。・・全ての動作が流れるような円を描く・

・

「リューア・・私にその演舞を教えて欲しい・・

「いいですよ。・・これは基本動作だけですから、体操代わりに毎朝稽古できますからね。」

倉庫の調査とリューイの刀

次の朝早く、闘技場で4人がゆっくりした動作で演舞をしていました。

闘技場には、お城の近衛隊の人達や、兵隊さんが早朝の練習で剣を打ち合い、剣戟の音が煩いぐらいですが4人はそんなことは気にせずにはたら静かに・・・ゆっくりと体を動かします。

闘技場の片隅で演じる4人の演舞を見ていた者がありました。

「・・・ねえ、あの人達なにやってるのかなあ？」

「・・・私、知ってる。あの人・・確かに隊長さんに化けたオバケを退治した人だよ。」

「でも・・踊ってるよね・・あんなダンスは始めてみるけど・・まだ、お城の演芸会は先だよね?」

「・・判らない時は?」

「聞いて見る!」

トコトコ・・とメイドのお姉さん達がリューイ達の所にやってきました。

4人は、なに?って感じです。

「・・・あのう・・そのダンスは・・何なんですか?」

メイドさんの1人がおずおずと尋ねました。

「これか・・我々の朝の練習だ。拳法という攻撃手段なのだが、その攻撃と防御の基本をゆっくりとした動作で体になじませているのだ。」

「全身運動に繋がるので、」の後の武器を使った練習の準備運動にぴったりなんです。」

「剣は腕の延長と考えれば、」の練習は十分に役に立つ。」

「えうです。一緒にやりませんか？・・美容にもこゝし。スタイルもよくなりますよ。」

メイドさん達は一斉に頷き、リューイの指導を受ける事にしました。

「動作の基本は円を描く事にあります。手、足が体から離れる時に息を吐き、体に引き寄せる時に息を吸い込みます。・・こんなふうに・・」

メイドさん達はダンスみたいに見えたこの練習がどんなでもない負荷を体に与える事に気がつきました。

直ぐに、息が荒くなり体の動きと合わなくなります。普段使わない筋肉が悲鳴を上げてます。

でも！・・美容とスタイルには代えられません・・頑張るのみです。

次の日の朝、闘技場にやつてきた4人は吃驚しました。

メイドさんの数が2倍に増えているのです。

更にその次の日には、お城中のメイドさん達が集まつていきました。

「ひして、リューイの指導を受けたメイドさん達は毎朝闘技場の半分を使って演舞に余念がありません。」

さらに、リューイが護身用にと攻撃方を伝授したりしましたから大変です。

毎朝、闘技場から・・ハツ！・・ハツ！ハツ！つという声が響き

拳が空気を切る音と脚が大地を踏みしめる音が響きます。

「おい・・あいつらメイドなんだよな?」

「見たとおり、メイドだな。」

「あいつらに・・お前勝てる気がするか?」

「無理だ。剣で挑んでも懷にもぐりこまれて一撃・・恐ろしい・・

」

遠巻きに演舞を見てる近衛兵達がぼそぼそと自信なげに言葉を交します。

「うして、このお城の名物、戦うメイドさんが生まれるんですけど・・

「これは、このお話にはあまり関係ありませんので、このくんにしちゃますね。」

話は、ドドーンっと變つて、サンディ達は調査の真っ最中です。お城の倉庫に隊長さんがいたことから何らかの手がかりがあるかもしれませんと、再度調査を大々的に行つてます。

近衛兵を使って、倉庫の荷物を全て外に出し、荷物の梱包を引き剥がして一つ一つ中身を確かめています。

また、すつからかんになつた倉庫を皆で端から端まで歩いて手がかりを探します。

天井にも、梯子を掛けて近衛兵が一区画毎に探しています。

「何も無いな・・」

「でも、普段通り隊長さんは執務していたと言つてましたから、倉庫以外で入れ替りは不可能ですよ。」

5人が倉庫の真中あたりまで調査を進めていた時に、倉庫の外で

荷物の調査をしていたエリアさんがやつてきました。

「荷物に不審なものはなつかたねえ・・ただ、箱の残骸が結構あるねえ。整理整頓をサボってたようだねえ。」

「残骸だと？」

「荷の梱包にまみれてけつこつな量があつたねえ。」

「それだ！」

王女様は外に出ようとしたしました。

「待つてください。・・これは・・ちよつと見てくれませんか？」

王女様はくるりと方向転換して、サンディーのところにやつてきます。

「うれ！・・床のタイルの色が變つてるんだよ。」

ライムが床を指差して王女さまに言いました。

詳しく述べると、少し色が變つてゐるというか、新しいタイルが床の1区画に広がっています。

近衛兵を呼び寄せるとなつてタイルをばがします。

床を人の背丈の2倍程の広さでタイルがばがされ、そこに現れたのは魔方陣でした。

「これは！」

「魔方陣のようだねえ。」

「至急、博士を呼ぶのじや！」

しばらくすると数名の博士達が弟子を引き連れて現れました。

「……れじや。魔方陣の目的を探るのじや。」

王女様の言いつけの前に博士達は魔方陣に並ぶ記号の意味を探りはじめました。

弟子達に魔方陣の模写をさせています。

そんな作業を見ていた王女様は、ふと、外の荷物の件を思い出しました。

「サンディ。最後まで倉庫の確認を頼む。私は荷を確認した後、部屋に戻る。」

そう言つて倉庫を出て行きました。

サンディ達4人は、倉庫の残り半分の調査を開始します。
エリアさんは天井を調査していた近衛兵と残りの天井付近を調べ始めています。

少し進展があつたようですが、まだまだ謎は解けないようですね。

そんな日が続いたある日、リューイのところに木箱が届きました。持つてきたメイドさんは鍛冶屋さんからのお届け物です。って言つてましたから、大まかな見当はついてます。

「開けてみないのか？」

ミケナイが興味深々で聞いてきます。

「刀を作つてもらつたんだ。・・でも、初めて作るみたいだからあまり期待しないほうがいいよ。」

「そういえば、あの時、エリア殿と鍛冶屋に行つたみたいだな。・

王都の鍛冶の腕も見たい。やはりここは披露するのがスジではな

いか?」

ルミナにもそう言われては、お披露目するしかないようです。腰から鉈改を抜くと、木箱を縛つてある紐をスイ・ツて切りました。

木箱の蓋を開けると、そこにはやや反った感じの棒みたいなものが入っています。

小さな鍔がついているので、剣の一種なんでしょうけど……横幅がありません。オニギリの半分以下の横幅です。

皆の失望をよそに、リューイは箱から刀を取り出しました。

リューイの手の中の棒を再度見たミケナイは少し驚いてます。

唯の棒のように見えたものは鞘のようです。でも、普通の長剣の鞘は皮製ですが、そこにあるのは木の鞘です。たぶん2分割で造られているのでしょうか、所々金属の環でしっかりと止められています。柄の部分は金属ではなくこれも木のようです。そして、滑らないように細い糸が斜めに交互にまいてあります。

鍔の部分は相手の剣を受けるために通常は大きく張り出していますが、この刀はまるでコインをそこに合わせたような、小さなものでした。

「リューイ・・抜いてみる。」

リューイはルミナに急かされ、あわてて、ハンカチを口に咥えました。

そして、刀を柄と鞘を片手に持ち両手を広げるように抜きました。

皆の目が、見開きます。

そこには、片刃の反りのある長剣があります。

剣の横幅は小さな硬貨程、長さはリューアイの片腕より少し長い位、

そして、鋭い切つ先・・

でも・・本当の驚きは別です。その刃の部分は濡れているように

見えるのです。

鍔の部分から切つ先まで・・静かな渚に打ち寄せる波のような波紋が幾重にも連なつて見えるのです。

ガチャヤリ！

リューアイは水平に持つていた刀を左手で垂直に立てます。

（この剣は・・なんだ！・・片刃なのは刃に反りがあるからだろうが、意味があるのか・・）

（あの刃に付けられた波紋・・美しいが意味はあるのか・・）

3人は不思議な剣を何時までも見ています。

リューアイは刃先に力ケや曇りがない事を確認すると、鞘にパチンと戻します。

「色々と聞きたい事はあるが・・その剣の刃先の波紋は何だ！」

「たぶん、鍛造過程で生じたんだと思うよ。ちょっと鍛え方に注文つけたし・・」

「そんな刃先でオバケを斬れるのか？」

「斬れるとと思うよ。斬ることに特化したのが刀だし・・」

「オニギリより斬れるのか？」

「解なんいけど・・試してみる？・・ポーチナさん糸持つてる？・・

ポーチナが自分のポーチからお裁縫セットを取り出すと糸を身長程引き出しリューアイに渡しました。

リューアイはテーブルの上に乗つてシャンデリアに糸をぶら下げます。

「この糸を斬ることが出来る?」

早速、ミケナイが試します。ミケナイの長剣は、金貨10枚の新品です。武器屋で一番良い品を買つてきたばかりです。

「テエイ!」

氣合一閃長剣で糸を斬ろうとしましたが・・糸は長剣の振り払われたほうに一緒に飛びてしまい斬れません。次は、ルミナです。

「ハアツ!」

ヒュン!と空気を斬る音がしましたが結果はミケナイと同じです。

「よく見てよ・・・ハツ!」

ヒュン!と空気が斬れる音がしてリューイは刀を振り切つてます。

そして、グラグラと糸がテーブルの上に落ちました。

「何故斬れる・・オーギリでさえ斬れないものを・・」

「だって、2人とも糸を一点で斬ろうとしてるでしょ。俺は、線で切つてるの。この違いかな。」

「線で斬るとは?」

「えーとね・・・たとえば、この花瓶を斬ろうとするよね。ミケナイやルミナは剣でこうなぎ払つようにするでしょう。切る場所は点になるよね。」

「俺の場合は、花瓶に刀が当たる瞬間から刀を手前に引いている。そうすると、・・・こういうふうに線で斬ることになるわけ。この動作がしやすいように刀には反りが入ってるんだけど・・」

「要するに、我々は力で斬っているが、お前は技で斬っていると

言いたいのか・・

「そこまでは、言わないけど・・ルミナは舞闘剣を使えるよね。あれだけ円の戻りは俺の動作と同じだよ。」

ルミナは再度糸に向つて剣を振るいます。今度は奥義の舞闘剣での斬り方ですね。

ヒュイーっと空氣を切る音がして、糸がテーブルに落ちました。

「なるほど・・線で斬るか・・良い事を聞いた。」

「待て、それでは私だけが斬れないことになる。リューイ今から特訓だ！・・何としても極めて見せる。」

「私はどうなるのですか？」

「マルチナはハルベルトだろ。斬るといつより打撃武器だから今まで良いと思つよ。」

「そうですね。安心しました。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8986v/>

ある晴れた日に

2011年11月6日17時26分発行